岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 36

本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査

I

曾　　原
琴海1号墳

1980・3

岡山県教育委員会

文化課

序

瀬戸内海でへだてられた本州と四国を結び，西日本全体の総合的な整備開発をめざす本州四国連絡橋建設計画は，昭和30年以来，建設省，日本国有鉄道，日本鉄道建設公団，日本鉄道公団などによっておしすすめられ，昭和45年７月から本州四国連絡橋公団が計画実施機関となり，環境アセスメント（環境影響評価）を含めた検討がなされながら今日に至っています。

岡山県教育委員会では，昭和53年度以降，本州四国連絡橋陸上ルート建設にさきだち，計画路線にかかる埋蔵文化財について発掘調査を実施してきました。発掘調査をはじめるにあたっては，本州四国連絡橋公団と文化庁との協議に基づく埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについての通達を留意のうえ，当公団第二建設局と県教育委員会との間で協議を重ねて実施してまいりました。

調査は建設がすすむとともに今後も継続しますが，本書はこれまで二箇年にわたって調査した倉敷市曽原地区の遺跡と同琴海１号墳の２遺跡について，まず当建設事業に伴う第１分冊の報告書として刊行するものであります。本書に収録いたしました曽原地区の遺跡では，特に中世墓群の調査において，また，琴海１号墳では石室の解体調査において，それぞれ考古学的に新知見を得ることができました。

発掘調査の実施にあたっては，本州四国連絡橋公団第二建設局のご理解とご協力をいただき，埋蔵文化財保護対策委員の諸氏からご指導・ご助言をいただきました。また，倉敷市教育委員会をはじめ，地元の方々のご協力とご鞭撻を賜りました。関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和55年３月

岡山県教育委員会
教育長　佐　藤　章　一

例　　言

1. 本調査報告書は，岡山県教育委員会が本州四国連絡橋公団の委託を受けて実施した，本州四国連絡橋陸上ルート建設用地に拘る埋蔵文化財の発掘調査概要である。
2. 本書に収録した遺跡並びに調査区は，昭和53年と昭和54年にわたり実施した倉敷市曽原地区に所在する曽原遺跡，曽原西Ａ遺跡，曽原西Ｂ散布地，曽原天王山中世墓群，天王山山頂の古墳推定地，新池の古墳推定地と昭和54年度に実施した倉敷市阿津に所在する琴海１号墳である。
3. 発掘調査期間

昭和53年度曽原地区	昭和53年４月10日～10月31日
昭和54年度曽原地区	昭和54年７月21日～10月１日
琴海１号墳	昭和54年４月12日～７月19日

4. 発掘調査は，昭和53年度に実施した曽原地区を伊藤晃，山磨康平，昭和54年度に実施した曽原地区と琴海１号墳を山磨，福田正継が担当した。
5. 報告書の作成は，調査を担当した伊藤，山磨，福田が主として行い，遺物の実測では，山本悦世，北村智子，平井典子諸氏の協力を得た。遺物の写真作成は伊藤が行った。
6. 本調査報告書の執筆は，I-1 経過と問題点を光吉勝彦，II-1 昭和53年度曽原地区を伊藤，II-2 昭和54年度曽原地区と琴海１号墳を山磨，福田が行った。

   なお，I-3 分布調査結果については，昭和51年度の分布調査の概要から抜粋したものである。

   報告書の作成にあたっては，文化課分室の職員諸氏の多大な協力を得た。
7. 出土遺物・実測図・写真等は，岡山市西古松の文化課分室に保管している。
8. 本報告書に使用した標高はすべて海抜高であり，方位はすべて磁北である。
9. 本報告書に掲載した地図は，建設省国土地理院発行の 25,000 分の１地形図（茶屋町）と，50,000 分の１地形図（岡山南部，玉野）を複製したものである。

目　　次

Ⅰ　序　説

頁

1.　埋蔵文化財保護対応の経過と問題点……1

2.　調 査 の 組 織……4

3.　分布調査の概要……7

Ⅱ　曽原地区の調査

1.　昭和53年度調査……13

——曽原遺跡・曽原西Ａ遺跡・曽原西Ｂ散布地・曽原天王山中世墓群・天王山山頂の古墳推定地——

1.　地理的・歴史的環境……13

2.　調 査 の 経 過……17

3.　第１次確認調査……18

4.　曽原天王山中世墓群の調査……20

5.　小　　結……39

2.　昭和54年度調査……41

——曽原西Ａ遺跡・新池の古墳推定地——

1.　調査の契機と経過……41

2.　曽 原 西 Ａ 遺 跡　第１地点……45

3.　曽 原 西 Ａ 遺 跡　第２地点……67

4.　新池の古墳推定地　第３地点……70

5.　小　　結……71

Ⅲ　琴海１号墳

1.　地理的・歴史的環境……75

2.　調 査 の 経 過……79

3.　立地と調査前の概要……82

4.　調 査 の 概 要……84

5.　小　　結……114

図　目　次

（序　　説）

第１図　岡山県位置図（Ｓ＝1/1320000）……2

第２図　本州四国連絡橋陸上ルート予定地内文化財分布図（Ｓ＝1/80000）……6

（曽原地区昭和53年度調査）

第１図　曽原地区遺跡及び周辺地形図（Ｓ＝1/25000）……14

第２図　曾原遺跡及び曾原天王山中世墓群調査位置図（Ｓ＝1/3000）……折り込み
第３図　№-12 トレンチ土層断面図（Ｓ＝1/40）……18
第４図　各トレンチ土層断面図（Ｓ＝1/40）……19
第５図　曾原天王山中世墓群調査位置図（Ｓ＝1/1000）……20
第６図　曾原天王山中世墓　第１群（Ｓ＝1/40）……22
第７図　第１群　出土遺物（Ｓ＝1/4）……23
第８図　第１群　土壙２遺構図（Ｓ＝1/20）……24
第９図　第１群　周辺出土古銭（Ｓ＝1/2）……24
第10図　第１群　周辺出土遺物（Ｓ＝1/4）……25
第11図　曾原天王山中世墓第２群（Ｓ＝1/40）……27
第12図　第２群　出土遺物（Ｓ＝1/4）……28
第13図　中世墓及び周辺出土五輪塔（Ｓ＝1/6）……29
第14図　包含層　出土遺物 (1)（Ｓ＝1/4）……32
第15図　包含層　出土遺物 (2)（Ｓ＝1/4）……33
第16図　包含層　出土遺物 (3)（Ｓ＝1/4）……34
第17図　包含層　出土遺物 (4)（Ｓ＝1/4）……35
第18図　包含層　出土遺物 (5)（Ｓ＝1/4）……36
第19図　包含層　出土遺物 (6)（Ｓ＝1/4）……37
第20図　包含層　出土遺物 (7)―№43トレンチ一括他―（Ｓ＝1/4）……38

（曾原地区昭和54年度調査）

第１図　曾原工事用道路敷調査区位置図（Ｓ＝1/3000）……44
第２図　曾原西Ａ遺跡第１地点調査範囲図（Ｓ＝1/1000）……45
第３図　第１地点 断面図（Ｓ＝1/300）……46
第４図　第１地点 拡張部 断面図（Ｓ＝1/100）……46
第５図　第１地点 遺構 配置図（Ｓ＝1/300）……47
第６図　井戸状遺構（Ｓ＝1/60）……48
第７図　井戸状遺構・溝１（Ｓ＝1/100）……49
第８図　井戸状遺構・溝１出土遺物 (1)（Ｓ＝1/4）……51
第９図　井戸状遺構・溝１出土遺物 (2)（Ｓ＝1/4）……52
第10図　溝２（Ｓ＝1/100）……54
第11図　溝２出土遺物（Ｓ＝1/4）……54
第12図　溝３（Ｓ＝1/60）……55
第13図　溝４・溝５（Ｓ＝1/60）……55
第14図　土壙１（Ｓ＝1/60）……56

第15図　土壙２・土壙３（S＝1/60）……56
第16図　柱穴・土壙出土遺物（S＝1/4）……58
第17図　第１地点の遺構に伴わない出土遺物 (1)（S＝1/4）……60
第18図　第１地点の遺構に伴わない出土遺物 (2)（S＝1/4）……61
第19図　第１地点の遺構に伴わない出土遺物 (3)（S＝1/4）……62
第20図　第１地点の遺構に伴わない出土遺物 (4)（S＝1/4）……63
第21図　第１地点の遺構に伴わない出土遺物 (5)（S＝1/4）……64
第22図　曾原西Ａ遺跡第２地点トレンチ配置図（S＝1/1000）……67
第23図　第２地点出土遺物（S＝1/4）……68
第24図　第３地点トレンチ出土遺物（S＝1/4）……70

（琴海１号墳）

第１図　琴海１号墳 周辺遺跡分布図（S＝1/25000）……76
第２図　琴海１号墳周辺地形図（S＝1/3000）……82
第３図　琴海１号墳 調査前 測量図（S＝1/300）……83
第４図　琴海１号墳墳丘測量図（S＝1/150）……84
第５図　琴海１号墳石室実測図（S＝1/60）……折り込み
第６図　琴海１号墳断面図（S＝1/60）……折り込み
第７図　石室内天井石（S＝1/60）……86
第８図　琴海１号墳 石室 解体過程図 (1)（S＝1/60）……87
第９図　琴海１号墳 石室 解体過程図 (2)（S＝1/60）……89
第10図　琴海１号墳 石室 解体過程図 (3)（S＝1/60）……91
第11図　琴海１号墳 石室 解体過程図 (4)（S＝1/60）……92
第12図　琴海１号墳 周辺調査後 測量図（S＝1/150）……94
第13図　琴海１号墳遺物出土状況（S＝1/80）……96
第14図　ガラス小玉出土状況（S＝1/10）……97
第15図　琴海１号墳出土・土器 (1)（S＝1/3）……98
第16図　琴海１号墳出土・土器 (2)（S＝1/3）……99
第17図　琴海１号墳出土・土器 (3)（S＝1/3）……100
第18図　琴海１号墳出土・土器 (4)（S＝1/3）……101
第19図　琴海１号墳出土・武器　（S＝1/3）……108
第20図　琴海１号墳出土・鉄釘・武器　（S＝1/2）……109
第21図　琴海１号墳出土・武器・その他　（S＝1/2）……110
第22図　琴海１号墳出土・装身具　（S＝1/2）……112
第23図　出土石器　（S＝1/2）……112
第24図　概念図　（S＝1/100）……114

図　版　目　次

（曽原地区　昭和53年度調査）

図版 1-(1)　曽原遺跡遠景（天王山頂から南東を望む）

図版 1-(2)　曽原遺跡遠景（清田八幡神社裏山から南を望む）

図版 2-(1)　曽原地区第１次調査　No.-８トレンチ（南から）

図版 2-(2)　曽原地区第１次調査　No.-60トレンチ（北から）

図版 3-(1)　曽原地区第１次調査　No.-43トレンチ遺物出土状況（東から）

図版 3-(2)　曽原地区第１次調査　No.-43トレンチ遺物出土状況（東から）

図版 4-(1)　曽原天王山中世墓群を望む（南から）

図版 4-(2)　曽原天王山中世墓第１群調査前近景（南から）

図版 5-(1)　曽原天王山中世墓第１群骨蔵器出土状況（東から）

図版 5-(2)　曽原天王山中世墓第１群２号（左），３号（右）骨蔵器出土状況（南から）

図版 5-(3)　曽原天王山中世墓第１群４号（左），５号（中），６号（左一部）骨蔵器出土状況（南から）

図版 5-(4)　曽原天王山中世墓第１群５号(左)，６号(中)，７号(左)骨蔵器出土状況(南から)

図版 6-(1)　第１群２号骨蔵器出土状況

図版 6-(2)　第１群３号骨蔵器・五輪塔地輪部出土状況（南から）

図版 6-(3)　第１群４号骨蔵器出土状況

図版 6-(4)　第１群骨蔵器出土状況（北から）

図版 7-(1)　曽原天王山中世墓第１群土壙-2 人骨出土状況（南から）

図版 7-(2)　曽原天王山中世墓第１群土壙-2 人骨取り上げ後（南から）

図版 8-(1)　曽原天王山中世墓第２群南半部（西から）

図版 8-(2)　曽原天王山中世墓第２群南半部（北から）

図版 9-(1)　曽原天王山中世墓第２群第４号墓（東から）

図版 9-(2)　曽原天王山中世墓第２群第４号墓（西から）

図版10-(1)　曽原天王山中世墓第２群11（左）～８号墓（西から）

図版10-(2)　曽原天王山中世墓第２群11号（左），10号（右）骨蔵器（西から）

図版10-(3)　曽原天王山中世墓第２群10号（左），11号（右），骨蔵器（東から）

図版11-(1)　曽原天王山中世墓第２群（北から）

図版11-(2)　曽原天王山中世墓第２群10号 骨蔵器出土状況（北から）

図版12-(1)　曽原天王山中世墓第２群10号（上），11号（下）骨蔵器出土状況（北から）

図版12-(2)　曽原天王山中世墓第２群11号（上），10号骨蔵器出土状況（南から）

図版13-(1)　曽原天王山中世墓第２群10号骨蔵器出土状況（東から）

図版13-(2)　曽原天王山中世墓第２群11号骨蔵器出土状況（東から）

図版14-(1)　天王山山頂の古墳推定地　調査前（西から）
図版14-(2)　天王山山頂の古墳推定地　調査後（東から）
図版15-(1)　曾原天王山中世墓第１群出土骨蔵器他
図版16-(1)　曾原天王山中世墓第２群及び包含層T-43 出土遺物

（曾原地区　昭和54年度調査）

図版 1-(1)　曾原西Ａ遺跡　第１地点調査前全景（南から）
図版 1-(2)　曾原西Ａ遺跡　第１地点調査後全景（南から）
図版 2-(1)　曾原西Ａ遺跡　第１地点トレンチ全景（北から）
図版 2-(2)　曾原西Ａ遺跡　第１地点トレンチ土層断面（南東から）
図版 3-(1)　曾原西Ａ遺跡　第１地点トレンチ全景（西から）
図版 3-(2)　曾原西Ａ遺跡　第１地点トレンチ全景（北東から）
図版 4-(1)　曾原西Ａ遺跡　第１地点東半（北から）
図版 4-(2)　曾原西Ａ遺跡　第１地点溝１土層断面（北から）
図版 5-(1)　曾原西Ａ遺跡　第１地点井戸状遺構（北から）
図版 5-(2)　曾原西Ａ遺跡　第１地点土壙２・３（西から）
図版 6-(1)　曾原西Ａ遺跡　第２地点トレンチ全景（南から）
図版 6-(2)　曾原西Ａ遺跡　第２地点トレンチ全景（北から）
図版 7-(1)　新池の古墳推定地　第３地点調査前全景（南から）
図版 7-(2)　新池の古墳推定地　第３地点トレンチ状況（南から）
図版 8-(1)　曾原西Ａ遺跡　出土土器 (1)
図版 8-(2)　曾原西Ａ遺跡　出土土器 (2)

（琴海１号墳）

図版 1-(1)　琴海１号墳　調査前遠景　（南から）
図版 1-(2)　琴海１号墳　調査前石材散在状況　（南から）
図版 2-(1)　琴海１号墳　側面から調査前全景　（東から）
図版 2-(2)　琴海１号墳　後方から調査前全景　（北から）
図版 3-(1)　琴海１号墳　墳丘全景　（南から）
図版 3-(2)　琴海１号墳　墳丘全景　（北東から）
図版 4-(1)　琴海１号墳　墳丘全景　（西から）
図版 4-(2)　琴海１号墳　墳丘北側周溝　（西から）
図版 5-(1)　琴海１号墳　石室内　（南から）
図版 5-(2)　琴海１号墳　石室入口部分　（北から）
図版 6-(1)　琴海１号墳　天井石・封土土層断面（西から）
図版 6-(2)　琴海１号墳　石室前面　（南から）

図版 7-(1)　琴海1号墳　天　井　石　（西から）
図版 7-(2)　琴海1号墳　天　井　石　（北東から）
図版 8-(1)　琴海1号墳　墳丘西側封土断面　（北から）
図版 8-(2)　琴海1号墳　墳丘東側封土断面　（北から）
図版 9-(1)　琴海1号墳　墳丘北側周溝土層断面（西から）
図版 9-(2)　琴海1号墳　石室奥掘形土層断面　（西から）
図版10-(1)　琴海1号墳　石室内遺物出土状況　（南から）
図版10-(2)　琴海1号墳　石室内入口周辺遺物出土状況（北から）
図版11-(1)　琴海1号墳　石室内奥壁部遺物出土状況（南から）
図版11-(2)　琴海1号墳　石室内西側・ガラス玉・耳環・大刀出土状況（東から）
図版12-(1)　琴海1号墳　石室内東側棺台付近遺物出土状況（南西から）
図版12-(2)　琴海1号墳　石室内入口付近遺物出土状況（東から）
図版13-(1)　琴海1号墳　棺台設置状況　（北から）
図版13-(2)　琴海1号墳　棺台設置状況　（南から）
図版14-(1)　琴海1号墳　石室東側壁　（南から）
図版14-(2)　琴海1号墳　石室東側壁　（西から）
図版15-(1)　琴海1号墳　石室奥壁北西隅　（南東から）
図版15-(2)　琴海1号墳　石室奥壁北東隅　（南西から）
図版16-(1)　琴海1号墳　石室西側壁　（南東から）
図版16-(2)　琴海1号墳　石室西側壁　（東から）
図版17-(1)　琴海1号墳　天井石除去後全景　（南から）
図版17-(2)　琴海1号墳　天井石除去後全景　（北から）
図版18-(1)　琴海1号墳　石室基底部・掘形全景（北から）
図版18-(2)　琴海1号墳　石室基底部全景　（南から）
図版19-(1)　琴海1号墳　石室基底部　（南から）
図版19-(2)　琴海1号墳　石室基底部　（西から）
図版20-(1)　琴海1号墳　石室東側壁裏込め石　（東から）
図版20-(2)　琴海1号墳　石室西側壁裏込め石　（北西から）
図版21-(1)　琴海1号墳　掘形全景　（南から）
図版21-(2)　琴海1号墳　石室解体作業　（東から）
図版22　琴海1号墳　出土須恵器 (1)
図版23　琴海1号墳　出土須恵器 (2)
図版24　琴海1号墳　出土須恵器 (3)
図版25　琴海1号墳　出土土師器
図版26-(1)　琴海1号墳　出土装身具

図版26-(2)　琴海1号墳　出　土　武　器
図版27-(1)　琴海1号墳　出　土　武　器
図版27-(2)　琴海1号墳　出土武器・鉄釘

表　目　次

（序　説）

頁
表1　昭和53年，54年度調査工程表……3
表2　本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会議事録……5
表3　一般国道30号分布調査結果一覧表……7
表4　本四備讃線分布調査結果一覧表……9

（曽原地区　昭和53年度調査）

表1　曽原遺跡周辺地名表……15
表2　曽原地区昭和53年度調査工程表……17
表3　五輪塔観察表……30

（曽原地区　昭和54年度調査）

表1　曽原地区昭和54年度調査工程表……43

（琴海1号墳）

表1　土器観察表……102
表2　耳環計測表……112
表3　玉類計測表……113

本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査 I

I 序　　説

1. 埋蔵文化財保護対応の経過と問題点

本州四国連絡橋は「夢のかけ橋」とも言われ，瀬戸内海で隔てられた本州と四国を橋で結ぶことにより，生活便利と経済水準向上などから長い間希望されていた。

その建設については，昭和30年以来建設省を中心として関係機関が各種の調査を行ってきた。同45年7月に本州四国連絡橋公団が設立され，従来の調査を引継ぎ，これらの調査にもとづき着工の見通しが得られたので，同48年10月に認可をうけ同年11月から着工予定であったが，オイルショックによる総需要抑制により一時延期され，同53年10月着工が認められた。

岡山県教育委員会では，従来山陽新幹線・中国縦貫自動車道等大規模開発事業については，事業の基本計画段階において文化庁国庫補助事業により事前に計画幅 500m の範囲における埋蔵文化財の分布調査を実施し，その結果を建設省または公団に提出してルート決定に際し文化財保護の調整を計る資料としている。この本州四国連絡橋陸上ルート（道路・鉄道）についても同様の対応が必要とされるため，昭和 49～50 年に調査予算を計上し，本州四国連絡橋公団と調査実施について協議していたが，公団の地元説明が先行するなかで，その話し合いが難航したことなどもあって，結果的に公団のルート決定前に分布調査が出来ず，その後において公団の依頼により昭和51年度に実施されたことは反省すべき点がある。その調査内容については次節で述べることにする。

しかし一方では，遺跡地図等の既資料を公団に提出し，文化財の保護調整を行うとともに，公団においても，これらを基礎資料として昭和50年度に人文文化財現況図を作成している。主な埋蔵文化財保護調整事項としては，まず磯の森・船津原両貝塚がルート計画内にあるため，路線変更の努力がなされ，その結果，磯の森貝塚の縁辺部のみが路線内に位置することになった。また，工事設計上高架となるため，スパン幅を 17m から 30m に変更し，出来るだけ遺跡の現状保存を計った。一方，地元住民より公団に対し，磯の森・船津原両貝塚の間を流れる「はらわた川」は源平合戦の古戦場であり，保存を強く要望するという申し入れが出され，公団が示した代替ルートとなった東方の丘陵も源平合戦にちなむ古跡であり，その取り扱いについて再三協議された。

菰池遺跡は北向に開析した谷の出口の狭あいな扇状地にあり，路線変更が困難であるため，高架橋

スパン幅 40m 設計計画を遺跡確認（トレンチ調査）の結果をみて最大 80m にすることで保存協議をしている。鷲羽山遺跡は丘陵全域に広がりをみており，また名勝下津井鷲羽山が連絡橋の接地部となるため，工法（トンネル化）等を配慮して遺跡の保存につとめるよう協議している。

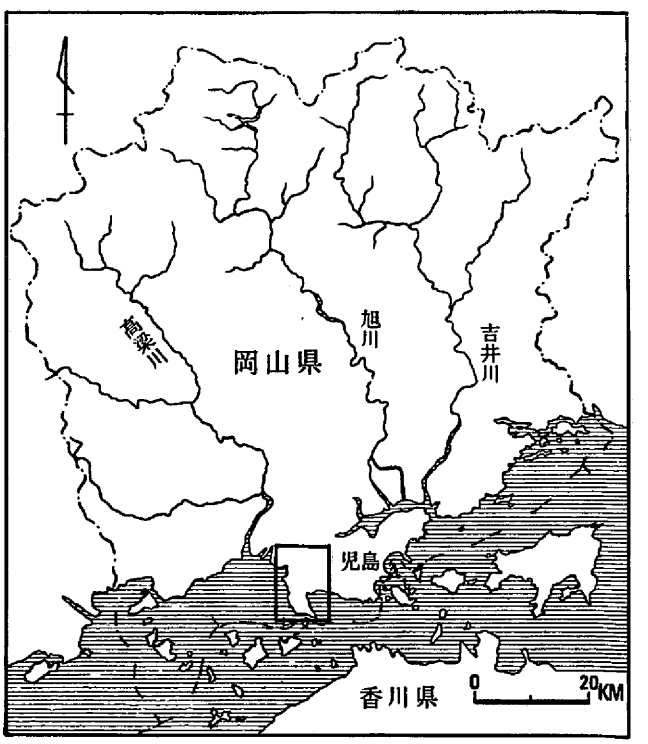
本州四国連絡橋公団では，昭和52年７月に環境庁・運輸・建設両省から「児島・坂出ルート本州四国連絡橋事業の実施に係わる環境影響評価基本指針及び技術指針」の提示を受け，同年11月にこれらを踏まえて従来から実施してきた環境影響評価の成果をまとめ，評価書案を地元に縦覧した。

これによると埋蔵文化財関係の記述がごく限られているため，公団に事情を聴取するとこの評価書案は国からの「指針」にもとづいて作成したもので，その「指針」は別に定めてある協定書等がある事項については除外している。したがって埋蔵文化財関係については，「文化財保護法」及び文化庁との協議に基づいて作成された通達「本州四国連絡橋公団の建設工事の施行に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて」により，事前に十分協議のうえ実施する旨の回答があった。

岡山県教育委員会では，本件について岡山県文化財保護審議会に諮問した結果，同審議会より意見のとりまとめ（資料）を受けて，本州四国連絡橋公団及び関係機関に進達した。

公団では文化財保護法57条３項に基づき，道路単独部は昭和52年９月19日付，鉄道及び道路共用部は昭和53年５月１日付をもって協議書を文化庁長官あてに提出した。岡山県教育委員会では事前に十分の発掘調査を実施し，特に重要な遺構等を検出した場合は設計変更等により保存することを条件として文化庁へ進達した。文化庁からそれぞれ昭和53年５月10日付委保第５の1275号，昭和53年12月８日付委保第５の4654号をもって，公団に対し岡山県教育委員会と協議のうえ事前の発掘調査をするよう通知され，昭和53年度から曽原遺跡が所在する水島インターチェンジ予定地の発掘調査を実施するに至った。

なお，本州四国連絡橋陸上ルート建設予定地に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて，昭和52年２月に実施した分布調査の資料に基づき公団と協議した結果，次表の※印の遺跡につき事前に発掘調査を実施し，記録保存措置を講じたうえ工事を施工することで合意している。



第１図　岡山県位置図（S＝1/1320000）

（資料）　　昭和53年２月３日

岡山県教育委員会
委員長　宮　崎　定　一　殿

岡山県文化財保護審議会
会　長　大　熊　立　治

本州四国連絡橋（児島・坂出ルート）環境影響評価書案について（意見）

このことに係る文化財関係の意見については，岡山県知事意見書の中で既に記述されているが，別紙のとおり意見をとりまとめましたので，よろしくお取り計らい願います。

〔別　紙〕

本州四国連絡橋環境影響評価書案について

1.　関係区域に所在する文化財（有形文化財・記念物等）については正確に記述するとともに，その保護保存について十分に配慮することを明記されたい。

特に埋蔵文化財については，昭和51年度において建設予定地内の埋蔵文化財の実施踏査した結果47遺跡（または遺跡予想地点）を確認している。しかし，埋蔵文化財の性格上，この調査結果のみで完全というものではなく，今後とも埋蔵文化財の確認のための調査を行うとともに，次の事項を遵守し，埋蔵文化財の保護・保存に万全を期されたい。

（１）　建設予定地端部に所在する遺跡については，設計等により保存をはかること。

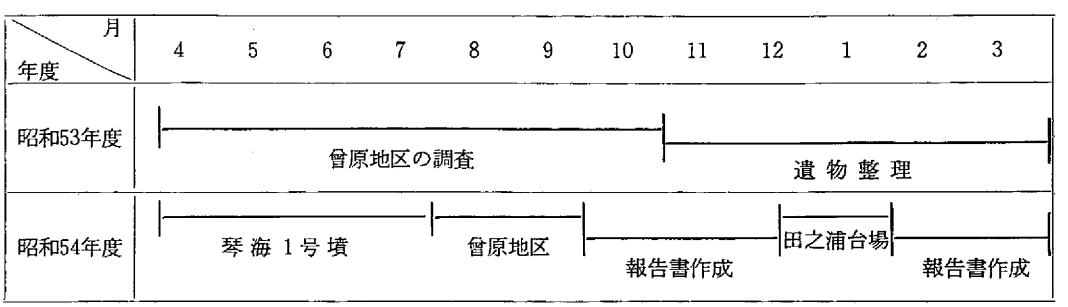
（２）　高架予定地内の遺跡については，高架脚間の距離等を配慮し，保存に努めること。

（３）　可能なものについては，トンネル工法等により保存を計ること。

（４）　やむなく建設予定地内にかかる遺跡については，事前に十分な記録保存のための発掘調査を実施すること。

2.　さらに国指定名勝鷲羽山の現状に変更をきたすこととなる部分については，名勝としての価値に影響を生じないように配慮されたい。なお，同所に所在する鷲羽山遺跡についても工法等を配慮し遺跡の保存につとめられたい。

表１　昭和53年，54年度調査工程表



2. 調査の組織

発掘調査は，岡山県教育委員会が本州四国連絡橋公団より委託を受け，昭和53年・54年度の2箇年間に行った本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴うものである。

調査にあたっては岡山県遺跡保護調査団の推薦を受け，下記の方々に本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の委員を委嘱した。

本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員（あいうえお順）（昭和53・54年度）

倉敷市教育委員会	小野一臣
岡山大学	近藤義郎
県立矢掛高校	中田啓司
自営業	西岡憲一郎
倉敷考古館	間壁忠彦

対策委員各位からは，発掘調査並びに報告書作成にあたり，有益なご指導・ご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表します。

昭和53・54年度における県教育委員会の構成は下記の通りである。

昭和53年度		昭和54年度	
教育長	佐藤章一	教育長	佐藤章一
文化課		文化課	
文化課長	飛田真澄	文化課長	近藤信司
課長補佐	吉光一修	課長補佐	吉光一修
主幹	小川佳彦	主幹	西田聰一
文化財二係長	光吉勝彦	文化財主幹	光吉勝彦
文化財保護主査	河本清	文化財二係長	河本清
文化財保護主事	柳瀬昭彦	文化財保護主事	柳瀬昭彦
文化課分室		文化課分室	
文化財主幹	難波進	文化財主幹	難波進
文化財保護主事	伊藤晃	文化財保護主事	山磨康平
文化財保護主事	山磨康平	文化財保護主事	福田正継
主事	藤井守雄	主事	藤井守雄

発掘調査を行うにあたっては，本州四国連絡橋公団第二建設局，同倉敷工事事務所，同児島工事事務所，県立児島高校，倉敷市郷内地区の中西士寿，粂　勇，三宅次郎の各氏，倉敷市大畠地区の毛利元保氏に種々のご援助をいただいた。厚く御礼申し上げます。

さらに発掘調査の作業には，下記の方々の参加をいただいた。厚く感謝の意を表します。

曽原地区の調査

大賀章正，小畑　敬，巧木隆一，高山　司，武鑓伊三郎，熊谷光正，難波勇一，原　政夫，宮原文治，三宅兼光，粂　　勇，横山忠夫，宮原重夫，難波　操，花岡士郎，宮原辰夫，渡辺林一，小川貴弘，高山伊佐子，橋本恵子

琴海１号墳

岩崎隆雄，三浦広吉，川脇　進，小寺喜多夫，花井時雄，畑中　弘，大北兼一，津崎十八，森本章二郎，岩崎富子，旅田登志子，岩崎敏子，藤原節子，松下久美子

報告書作成にあたっては，山本悦世，北村智子，瀬戸川陽子，近藤友子，坪井和江，森本耶須子，網沢靖枝，平井典子の方々に遺物整理等の援助を受けた。また，ノートルダム清心女子大学の学生諸君にも浄書等の協力を受けた。記して感謝の意を表します。

表２　本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会議事録

（昭和53，54年度）

月　日	場　所	審　議　事　項
53. 4. 8	倉敷市曽原	昭和53年度発掘調査計画。 曽原地区の第１次調査計画・調査方法について検討。
53. 4.28	倉敷市曽原	第１次トレンチ調査結果の報告と補足調査の検討要請。 今後の調査計画について検討。
53. 7.13	倉敷市曽原	曽原天王山中世墓群の調査の現地指導。 今後の調査計画について検討。
53.11. 4	倉敷市曽原	曽原天王山中世墓群の調査終了報告。 今後の調査計画について。
54. 4.21	倉敷市阿津 琴海１号墳	昭和54年度発掘調査計画。 琴海１号墳の調査計画と調査方法について検討。
54. 6.16	倉敷市阿津 琴海１号墳	琴海１号墳の調査の現地指導。 今後の調査計画について検討。
54. 9.22	倉敷市曽原 曽原工事用道路敷	曽原工事用道路敷内の調査の現地指導。 今後の調査計画について検討。

第２図　本州四国連絡橋陸上ルート予定地内文化財分布図　（Ｓ＝1/80000）

3. 分布調査の概要

表3　一般国道30号分布調査結果一覧表

番号	種類・文化財名称	時代	所在地	遺跡概要
1	中世貝塚・長津貝塚	鎌～室	都窪郡 早島町長津	丘陵東端部
2	中世貝塚・宮崎貝塚	〃	〃　〃　宮崎	宅地崖面に貝層遺物が露出している。
3	道　標	江	倉敷市 藤戸町有城	笹無山西の四辻
※4	貝塚・磯の森貝塚	縄 鎌～室	倉敷市 粒江磯の森	旧児島湾に北面する段丘上 中世遺物も含めると相当範囲に広がる。
※5	貝塚・散布地 船津原貝塚・船津原遺跡	〃	倉敷市 粒江船津	磯の森貝塚の東段丘上 中世遺物の散布地は非常に広い範囲に散布している。師楽式土器も出土。
※6	古墳・荒神山古墳	古	倉敷市曽原	荒神山山頂に立地し直径10m程度
※7	箱式棺・中世墓地群	古 鎌～室	〃	荒神山南斜面
※8	散布地 曽原西A遺跡	弥・古	〃　曽原西	南面する緩斜面一帯に弥生式土器片・須恵器片が散布している。
※9	曽原西B遺跡	弥～平	〃　〃	〃　〃
※10	散布地	〃	〃　〃	沖積地一帯に土器片の散布がみられる。
11	〃 前山遺跡	弥	〃　福江	緩斜面に集落址が想定される。 標式遺跡である。
12	窯　址 福江天王池遺跡	古	〃　〃	谷部および緩斜面に窯址が予想される。
13	石造美術 延命地蔵坐像	鎌	〃　〃	建治二年銘あり 県指定
14	散布地	弥	〃　福江，稗田	緩斜面，池の中に土器片が散布し集落址が予想される。
15	古　墳 寺内古墳	古	〃　稗田	山頂，円墳らしいもの

番号	種類・文化財名称	時代	所在地	遺跡概要
16	寺院址 堂の谷寺跡	室	倉敷市柳田	中世の寺院址
※17	散布地	弥～鎌	倉敷市通生池ノ奥	数点の土器片が散布している。
※18	散布地 菰池遺跡（広畑遺跡）	弥	〃　菰池	北向きに開析した谷の出口扇状地上に広がる台地上 瀬戸内における弥生時代中期の土器型式が設定された。 標式遺跡
※19	散布地	弥・古	〃　菰池～児島赤崎	通称てんぐ山の山頂から北へのびる尾根の稜線上 高地性集落か？
※20	〃	弥～飛	〃　児島阿津3丁目～児島赤崎2丁目	東向きに開析した谷の裾が広がった緩斜面
※21	〃	弥～平	倉敷市児島阿津3丁目	宮池の西岸，東向きに開析した谷の出口，緩斜面
※22	〃	〃	〃　〃	宮池の西岸，東向きに開析した谷の出口，緩斜面
※23	〃	弥～奈	〃　〃	宮池の東岸，谷間の池水田
24	〃	弥～平	倉敷市児島阿津2丁目	丘陵のくびれ部，峠から東向きの谷間緩斜面
※25	〃	弥～室	〃　〃	北向きの谷間から台地裾部，谷を挟む丘頂部は地形の上から要注意
※26	〃	古～平	〃　〃	神道山の北山裾，北東に面した谷の広がった所
※27	古　墳 琴海古墳群1号墳	古	〃　〃	東南に向いた山裾斜面，段々畑の跡，竹藪になっている。東に開口した横穴式石室で天井石3枚残っている。
※28	散布地	弥～平	〃　大畠	東にのびる丘陵の先端部頂
※29	〃	古～室	〃　〃	神道山の東山裾，東に開口した谷

番号	種類・文化財名称	時代	所在地	遺跡概要
30	古墳 琴海古墳群2号墳	古	倉敷市児島阿津1丁目	東向き開口した谷の北側にある。 径12m高さ約2m，横穴式石室，周囲に石材あり，古墳の破壊された可能性あり。 鷲羽山までの間の丘陵，斜面等に古墳が存在する可能性があり，要注意。
31	石造美術 石造地蔵菩薩立像	南	倉敷市下津井田之浦182	高1.85m，像高58cm花崗岩製 県指定 昭和34年1月13日
32	台場跡 大畠越台場跡	江	倉敷市下津井田之浦	丘陵の鞍部稜線上　文久3年（1863）前後に造られたお台場13箇所のうちの1つ。南北70m，東西30mの平坦面を造成している。
※33	〃 田之浦台場跡	〃	〃　〃　〃	鷲羽山の西斜面110m×50mの平坦面を造成している。
※34	散布地 鷲羽山遺跡	先～弥	倉敷市下津井大畠，田之浦	丘陵の尾根上に点々と散布密度の高い地点がある。 東西約1.5kmの尾根上から斜面にかけて散布がみられる。
35	名勝 下津井鷲羽山		〃	下津井東方海上に突出した岬角 国指定昭和5年11月19日

表4　本四備讃線分布調査結果一覧表

番号	種類・文化財名称	時代	所在地	遺跡概要
A	神社 毘沙門天	江	倉敷市木見下木見	標高232mの蟻峰山の南側中復に位置する。 付近に倉敷市遺跡地図No.6-46道標がある。
※B	古墳 木見4号墳	古	〃　〃　〃	横穴式石室天井石1枚残存
※C	散布地	弥・古 平・鎌	〃　木見寺内	寺内集落内の緩斜面上，周囲に家が密集しており範囲は不確実である。

番号	種類・文化財名称	時代	所在地	遺跡概要
D	石造 道標	江	〃 木見寺内	三十八丁喩伽山 高さ0.66m由加山へ
※E	散布地	平・鎌	〃 木見寺内 ～西谷	沖積地の畑，水田に土器片が散布している。 散布地周辺に条里が認められる。
※F	散布地	弥・古	倉敷市向木見	福南山山塊の北側の低台地上に立地し，弥生～古墳時代の大規模な集落址が想定される。
※G	〃	弥・古	〃 向木見	北に開析した谷の斜面から平坦面にあたる。 特殊器台を出土した向木見遺跡に隣接しており関連の遺構が想定される。
※H	散布地（集落址）	弥	〃 天王	高述山より南に派生した舌状の尾根上にある。 土取りによりカットされた断面に焼土・炭・土器片が出土しており住居址が想定される。
※I	散布地	弥・古	〃 西之頭	周囲の水田との比高20m前後の低丘陵上の頂部平坦面に土器片の散布がみられ，集落址が想定される。
※J	〃	弥・古	〃 児島 小川町	瀬戸内海を見下す丘陵の浅い谷部より斜面にかけて位置する。
※K	〃	弥～室	〃 〃 阿津1丁目	県道阿津海岸線の西に位置し，児島競艇場を見下す低丘陵上である。 丘頂平坦面が城址とも言われている。
※L	〃 走出遺跡	古	〃 〃	No-Kの丘陵下より児島競艇場にかけての旧海岸線上。 製塩址である。

Ⅱ 曾原地区の調査

Ⅱ 曾原地区の調査

1. 53年度調査

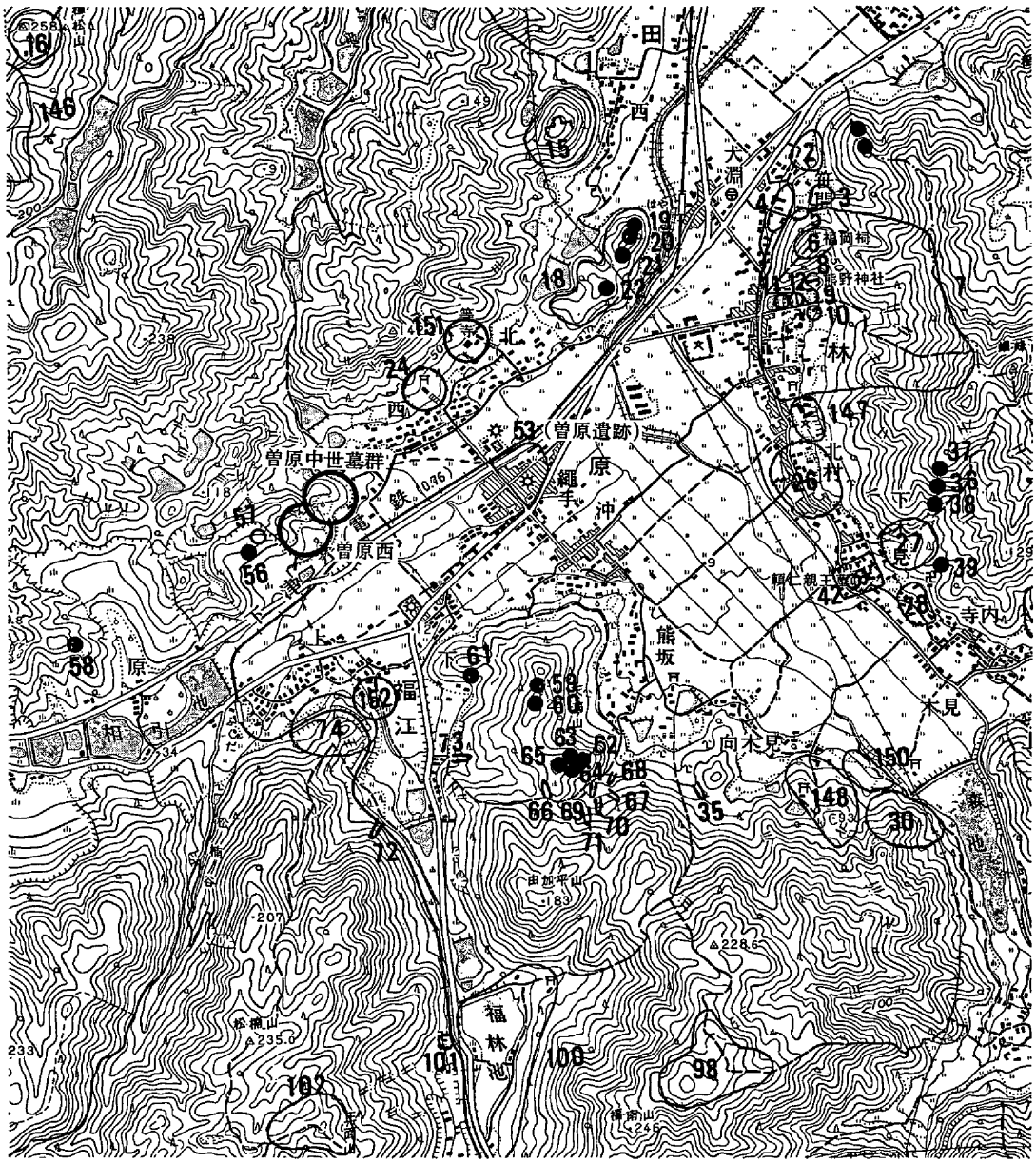
—曾原遺跡・曾原西A遺跡・曾原西B散布地・曾原天王山中世墓群・天王山山頂の古墳推定地—

1. 地理的・歴史的環境

曾原遺跡は行政的には，倉敷市曾原・林・福江にあたり，旧児島郡郷内村である。郷内村は旧林村（林・串田・曾原・福江）の4村が合併し，さらに旧木見村（尾原，木見），彦崎村の植松が合併して，明治22年から1959年（昭和34）児島市に合併されるまでつづいた旧村名である。そして児島市は1967年（昭和42）倉敷市と合併し現在に至っている。

この曾原地区を含む郷内盆地は，南に竜王山（198m），銅剣が出土した由加山（245m）の山塊を，北に銅鐸が出土した種松山（258m）を頂点とする山塊を，東に蟻峰山（232m），熊山（241m）の山塊を，西南に由加平山（183m），福南山（246m），松楠山（253m）に囲まれた盆地で，児島半島北部に位置する。北の鞍部を越えれば粒江，藤戸などかつての内海に，西の乢を越えれば水島灘に達する。盆地中央を南から北に郷内川が貫流し，串田南側で山塊にぶつかりさらに東進し児島湖に注ぐ。かつてはこの盆地内にも内海から海水が入り込み，近世以降の干拓，郷内川の堆積により徐々に陸地化していったものである。この盆地の縁辺部には現在の集落が形成されているが，古代の遺跡は現在の集落と重なりながら更に，丘陵上あるいは低位部にかけて広がり散在している。弥生時代前期の曾原遺跡，中期の串田遺跡，福江・前山遺跡などがあり，前山遺跡は中期後半の標式遺跡として著名な遺跡である。又，後期には特殊器台を出土した向木見遺跡が南西部に位置している。向木見遺跡につづく古墳時代前半期の遺跡は現在の所みられない。横穴式石室を中心とする後期古墳はこの盆地内において串田南・北・木見・熊坂などの古墳群を中心にして，20基前後が知られている。また熊坂から向木見の丘陵部を中心にして，7世紀前半～8世紀代にかけての須恵器の古窯址群が10基程存在している。児島における唯一の古窯址群であるが，そのほとんどを宅地造成，土取りなどで破壊されてしまっている。平安時代と推定される諸興寺址も蟻峰山西山麓に存在している。

源平合戦の藤戸の戦いは曾原の山塊の北側山麓にあたる。古代末～中世にかけての寺社は，この盆地周辺にかなり著名なものが何箇所か知られている。曾原に存する清田八幡神社は建長元年（1249）の修造棟札を初現とし，至徳四年銘（喜慶元—1387）以降の上棟棟札から寛文八年（1668）に至る修造棟札などが残され，備前における最古の八幡神社ともいわれている。また室町時代中頃の木造狛犬一対も残されている。



第１図　曾原地区遺跡及び周辺地形図（S＝1/25,000）

林に存する熊野神社，五流尊院には鎌倉時代中頃の国指定重要文化財の石造の宝塔，熊野神社の本殿６棟のうち第２殿は明応元年（1492）に再建され，県指定文化財になっている。神社には県重要文化財になっている鎌倉時代初期の作品とされる木造十一面観音立像をはじめ，鎌倉時代の御正躰（青銅製懸佛），室町時代中頃の絹本如来荒神坐像，康正３年銘（長禄元年―1457）の青銅製梵鐘などを蔵しており，又，永禄11年（1568）の毛利氏の制札にその名が見え，曾原荘，林荘，火打荘（福江）とともに熊野十二社現神領であったことを伝えている。中世において非常に繁栄していることを見る

ことができる。又，この近くには頼仁親王墓と称される五輪塔が存している。これは，後鳥羽上皇の第4子にあたり，承久の乱によりこの地に流され，この地で没しこれが墓（供養塔）として伝えられている。曾原の法輪山・一等寺は天正年間に再興されたと伝えられているが，寺域内には室町時代前後を中心とする五輪塔が多く残され，中世に建立の初現をみることができるのではなかろうか。

又，福江の宝寿院には南北朝前期と思われる，石造地蔵菩薩坐像が残されている。

以上のように中世において熊野信仰，あるいは修験道の上にたった熊野神社をはじめ，数多くの寺社が残されこの地が一拠点として活動していることを垣間見ることができるのである。

表1　曾原遺跡周辺地名表

地図及び遺跡番号	S42文化財保護委員会編No.	分類	種別	年代	名称	所在地	備考
2		埋蔵	散布地	中世	大正池遺跡	林	
3		〃	〃	〃	園地池遺跡	〃	
4		〃	〃	〃	笹間遺跡	〃	
5		〃	貝塚	〃	福岡山北貝塚	〃	
6	427	〃	散布地	弥生	福南山遺跡	〃	
7		〃	〃	中世	新熊野山遺跡	〃	大半は県指定史跡新熊野山に含まれる（県指定）
8		建造	本殿	中世，近世	熊野神社本殿	〃	（国，県指定）
9		〃	塔婆	近世	五流尊龍院等三重塔婆	〃	（県持定）
10		石造	宝塔	中世	五流尊龍院宝塔	〃	（国指定）
11		〃	層塔	中世，近世	桜宮覚仁法親王墓	〃	
12		〃	灯籠	中世	行者池灯籠	〃	
15	445	埋蔵	城址	〃	鼻高山城址	串田	
16		〃	包含地	弥生	種松山山頂遺跡	粒江	銅鐸出土　梅原末治「岡山県下発見の銅鐸」吉備考古83号
17		〃	〃	〃	種松山山頂西方遺跡	〃	
18	428	〃	〃	〃	戸津田遺跡	串田，林	
19	430	〃	古墳	古墳	戸津田北古墳群1号	串田	円墳，径7m
20	〃	〃	〃	〃	〃　2号	〃	
21	〃	〃	〃	〃	〃　3号	〃	
22	〃	〃	〃	〃	戸津田南古墳群	林	
24		建造	本殿	近世	清田八幡宮本殿	曾原	（県指定）
25		埋蔵	散布地	中世	赤尾池下遺跡	木見	
26		〃	〃	〃	北村大下遺跡	林	
27		〃	〃	〃	下木見遺跡	木見	
28		〃	〃	〃	寺内遺跡	〃	
29	432	〃	包含地	弥生，中世	正無田遺跡	〃	
30		〃	散布地	中世	森池遺跡	〃	
31		〃	〃	〃	北谷池遺跡	〃	
32		〃	〃	〃	内木見上遺跡	〃	
33		〃	〃	〃	前谷池奥遺跡	〃	
34		〃	〃	〃	前谷池遺跡	〃	
35		〃	窯址	古墳後期	桧谷窯址	林	

曾　原　地　区

地図及び遺跡番号	S42文化財保護委員会編No.	分類	種別	年代	名称	所在地	備考
36		埋蔵	古墳	古墳後期	木見古墳群1号	木見	横穴式石室らしき石材あり
37		〃	〃	〃	〃 2号	〃	横穴式石室，天井石1枚残存 南開口
38		〃	〃	〃	〃 3号	〃	横穴式石室，石材露出
39		〃	〃	〃	〃 4号	〃	横穴式石室，天井石1枚残存
40		〃	〃	〃	森池東上古墳	〃	横穴式石室，石材露出
41		〃	〃	古墳	秋葉神社古墳	〃	円墳，径3m
42	435	〃	寺院址	中世	諸興寺跡	〃	頼仁親王御墓あり
43	436	〃	城址	〃	戸山城址	木見，尾原	
53	442	〃	包含地	弥生	曾原遺跡	曾原	
56	〃	〃	〃	〃	曾原西古墳	〃	円墳，横穴式石室，長32m，南東開口
57		石造	五輪塔	中世	曾原西五輪塔	〃	
58		埋蔵	古墳	古墳後期	溝池北古墳	広江	横穴式石室
59	440	〃	〃	古墳	天満山古墳群1号	林	
60	〃	〃	〃	〃	〃 2号	〃	石材露出
61	〃	〃	〃	古墳後期	〃 3号	〃	横穴式石室，南開口
62	〃	〃	〃	古墳	熊坂古墳群 1号	〃	円墳，径9m，石材露出
63	〃	〃	〃	〃	〃 2号	〃	天井石3枚露出
64	〃	〃	〃	〃	〃 3号	〃	天井石一部露出
65	〃	〃	〃	〃	〃 4号	〃	
66		〃	窯址	古墳後期	熊坂須恵器窯址	〃	須恵器散布，窯址
67	431	〃	〃	〃	熊坂窯址群A	〃	
68	〃	〃	〃	〃	〃 B	〃	
69	〃	〃	〃	〃	〃 C	〃	
70	〃	〃	〃	〃	〃 D	〃	
71	〃	〃	〃	〃	〃 E	〃	
72	441	〃	〃	〃	福江天王池西窯址群	福江	
73	431	〃	〃	〃	福江天王池東窯址群	〃	
74	439	〃	包含地	弥生	福江前山遺跡	〃	鎌木義昌「岡山県郷内村前山の弥生式遺跡」吉備考古 80号 「弥生式土器集成」資料編
97		〃	五輪塔群	中世	尾原公民館西五輪塔群	〃	
98	437	〃	散布地	弥生	福南山遺跡	〃	石片散布
100	438	〃	包含地	〃	福林湖遺跡	福江，稗田	
101		石造	石仏	中世	熊野道の延命地蔵坐像	福江	建治二年銘あり（県指定）
102		埋蔵	寺院址	平安-中世	正面山寺跡	福江，稗田	
141		〃	散布地	弥生	稗田八幡宮遺跡	稗田	
146		〃	〃	先土器	種松山南遺跡	粒江	石器，石片散布
147	429	〃	貝塚	弥生	竹田貝塚	林	
148	433	〃	包含地	〃	向木見遺跡	木見	墳墓遺跡，高橋護「児島市向木見遺跡発見の二，三の遺物」考古学手帖 12号

第2図　曾原遺跡および曾原天王山中世墓群調査位置図（S＝1：3000）

2. 調 査 の 経 過

本州四国連絡橋の工事は昭和53年10月10日起工式を行い本格的に動き出し始めた。このルートに関わる埋蔵文化財包蔵地の分布調査は，ルートのほぼ確定した昭和51年度に約500m幅で行い，道路ルートは早島インター予定地から鷲羽山まで，鉄道ルートは彦崎周辺から鷲羽山まで約47箇所の遺跡が確認された。これをもとに文化財保護法第57条―3により本州四国連絡橋公団と協議を重ね，最終的に一般国道30号線予定地内16遺跡，本四備讃線及び道路共用予定地内14遺跡について事前の発掘調査を実施することで協議が整った。(昭和53.5.10委保第5の1275，昭和53.12.8委保第5の4654)

昭和53年度は当初から2名の調査員が本四連絡橋陸上ルート関係埋蔵文化財調査にあたることになった。最初に入ることになった遺跡は，それまでに公団との協議が進み，すでに用地買収の終了していた水島インターチェンジ内の曾原遺跡・曾原西A遺跡・曾原西B遺跡の確認調査から行うことになった。調査に先だち公団，文化課は旧地権者代表である曾原，福江，林の各部落長を訪れ，発掘調査への協力方を要請した。現地調査に着手する前日の4月8日（土）第1回の本四連絡橋陸上ルート埋蔵文化財対策委員会を現地において開催し，発掘調査工程を提示し意見を聴取した。

4月10日（月）現地作業に入る前に作業を手伝ってもらう地元の人達に，課からのあいさつ，作業内容等の説明を行い，グリット場所の選定を行う。以降5月末日までに，約50数箇所のボーリングおよびトレンチを設定して確認を行った。途中4月28日（金），第2回対策委員会を現地において開催し，現状ではこれ以上に掘り広げても，遺跡の広がりはみられないのではなかろうかという提案を行ったが，もう少しグリット，トレンチを入れ入念に確認を行った上で結論を出そうという事になり，トレンチ，グリットを数箇所増し，又，曾原中世墓近くの谷すじの包含層を何箇所か掘り広げ遺物採集および，実測，写真の終了したものから埋め戻し作業を併行して行った。

5月25日からは，五輪塔火輪部等が散乱していた中世墓と思われる場所の孟宗竹，松，雑木等の伐採を行い，10m方眼の割り付けを業者に委託して行う。伐採に非常に手間取り，調査に入れたのは6月27日からであった。これも，孟宗竹の根，松の切株などの根抜き作業に多くを費した。7月初め南側斜面の第2トレンチの周辺から遺物が見られ，土師器，備前焼等の骨蔵器が検出され始めたので，周辺を拡張した。

7月13日（木）第3回対策委員会を開催，以降10月31日まで，倉敷市遺跡地図に記載された天王山山頂の荒神古墳推定地と山麓の古墳とおぼしきものも含め，10月31日まで現地で調査を行い，以後整理作業にたずさわった。

表2　曾原地区53年度調査工程表

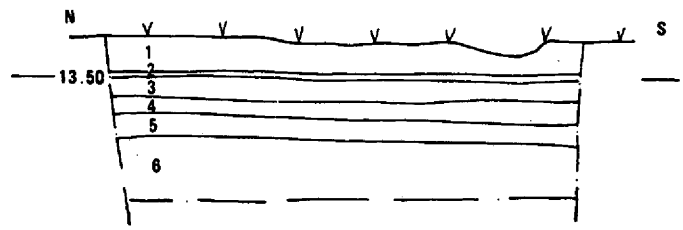
遺跡＼年月	53年4月	5　月	6　月	7　月	8　月	9　月	10　月
第1次確認調査	――	――					
曾原中世墓		トレンチ調査	伐採		発掘	調査	

3. 第一次確認調査

曾原遺跡・曾原西A遺跡・曾原西B散布地

曾原遺跡は，郷内盆地北側山麓部の低台地上に位置している。かつて弥生時代前期の土器が紡績工場の寮建設時に採集され遺跡として周知されてきたが，その範囲等もはっきりしたものではなく，倉敷市遺跡地図においても遺物が出土した地点を中心に大きく示されているだけであった。昭和51年度に行った本四関係の分布調査時においては，弥生時代の散布に見られなかったが，奈良時代前後の須恵器，時代ははっきりしないが中世と思われる遺物を，インター予定地ほぼ全域で採集することができた。このため公団との協議において，遺跡が全面に広がれば，最低2年以上の発掘調査期間がかかり，早期に用地買収を行い予備調査に入れる様要望してきたのである。公団は昭和52年度において一部作付を行う予定地以外を除いてほぼ買収を終了したため，昭和53年4月から現地調査が実施できる様になった。

調査は，分布調査時において県道岡山～水島線と県道岡山～児島線に挟まれた地区を曾原遺跡の延長部分と考え，又，県道岡山～水島線以北を曾原西A・西B遺跡として大きくとらえていた。調査着手以後は大きく曾原遺跡として扱い，この24万㎡以上の広大な所に約60箇所近くの試掘溝を入れ確認を行った。以下はその概略である。



第3図　No.-12トレンチ断面土層図（S＝1/40）

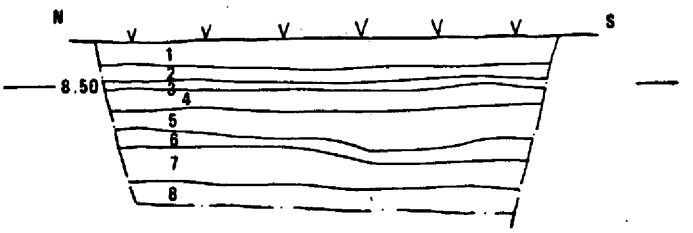
1. 耕作土層　2. 灰色砂層　3. 灰色砂層（鉄分を含む）　4. 灰色砂層（マンガンを含む）　5. 灰白色砂層（マンガンを含む）　6. 灰色砂層（地山？）

県道北側に入れた No.-1～7・No.-60 トレンチおよび北西の谷あいから流れる小川を挟んで No.-8～12トレンチは，小川の西側地山面が高く，東側へ行く程低くなる傾向が見られる。東側は，北および西側からの堆積砂層が中心をなす。遺物も表面採集の方が多い位であった。

県道南側に入れた No.-18～26トレンチも基本的には砂質土層を中心にした堆積土層であり，南東側に行く程深くなって行く様である。又，福江にあたる No.-27～38トレンチは，東側部分と少し様相を異にしている。No.-29，34 は，耕作土層以下，何層かをはさんで30㎝程でこぶし大～人頭大の礫層となって南に下がる。南西および西方向からの流路と考えられる。他のトレンチも No.-29，34よりは少し高くなり，礫層は見られないが，地山層は北あるいは西方向から，南あるいは東に下がる傾向が見られ，遺物類も全く見られなかった。

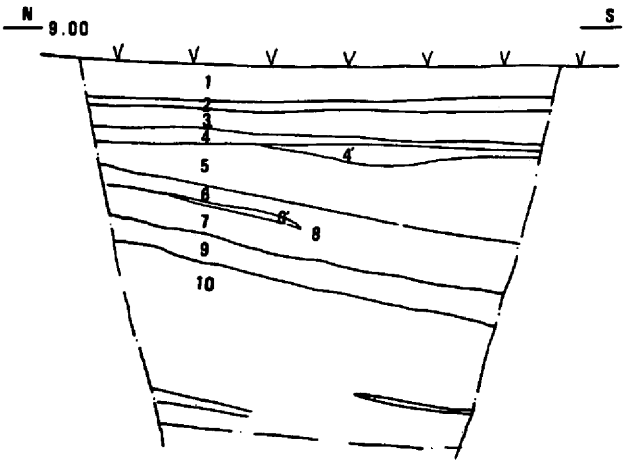
北西部の No.-13トレンチを中心にしては，弥生時代中期～中世にかけての遺物包含層が見られ，部分的に拡張を行ったが遺溝面は見られず，遺物採集を行って終了した。出土遺物については後述する。

1. 耕作土層
2. 灰色砂質土層
3. 黄褐色層（鉄分を含む）
4. 暗灰褐色土層（マンガンを含む）
5. 灰褐色砂質土層（粗い）
6. 赤～暗赤褐色砂層（赤褐色を呈するのは鉄分の沈殿したものか）
7. 青灰色砂質土層（粗い）
8. 青灰色粘土層



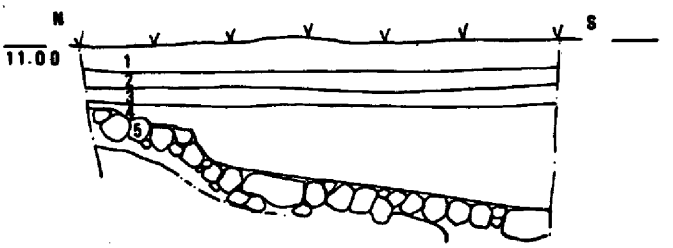
No.-23　トレンチ土層断面図

1. 耕作土層
2. 灰色砂層
3. 明黄褐色土層
4. 茶褐色砂土層
4′. 灰色砂質（マンガンを含む）
5. 灰黄色砂層
6. 茶灰褐色砂質土層
6. 砂層
7. 明茶褐色砂質土層
8. 黒灰色粘土層（鉄分を含む）
9. 明黄褐色砂質土層
10. 灰色砂層（鉄分を含む）



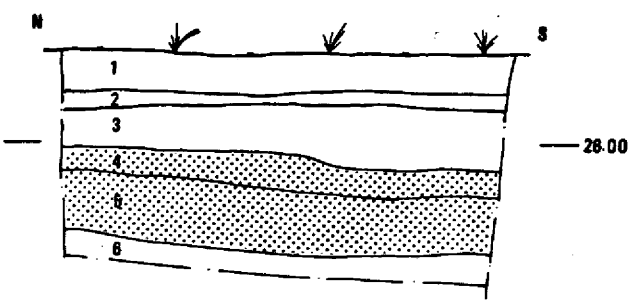
No.-25　トレンチ土層断面図

1. 耕作土層
2. 黄灰色土層（鉄分を含む）
3. 灰褐色砂層（マンガンを含む）
4. 暗灰色粘土層
5. 礫層



No.-29　トレンチ土層断面図

1. 耕作土層
2. 灰褐色土層
3. 茶褐色砂質土層(マンガンを含む)
4. 黒茶褐色土層（マンガンを含む）
5. 暗褐色砂質土層
6. 褐色砂層



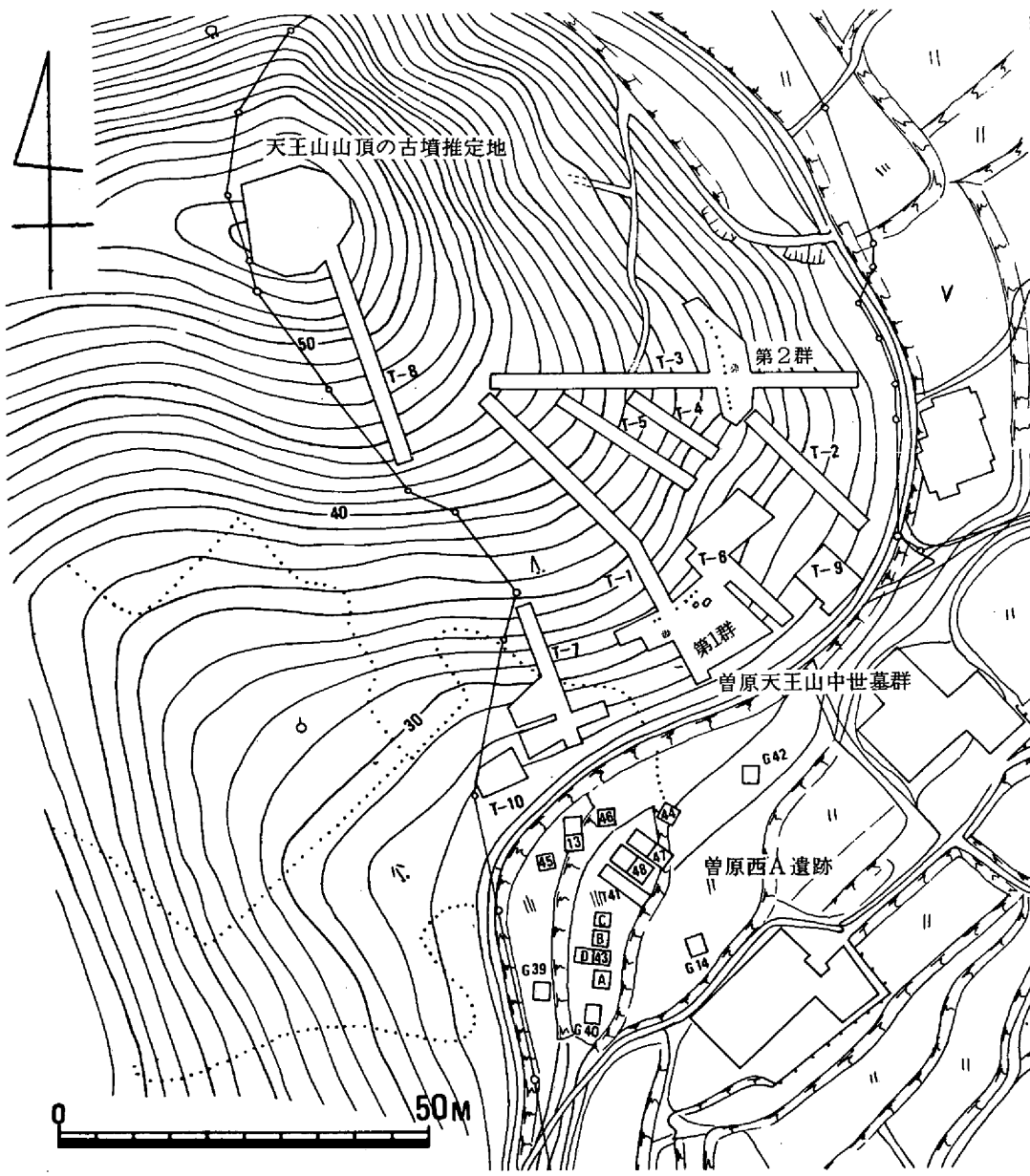
No.-13　トレンチ土層断面図

第4図　各トレンチ土層断面図（S＝1/40）

4.　曾原天王山中世墓群の調査

A.　調 査 の 概 要

遺跡は，倉敷市曾原天王山麓に位置している。天王山は曾原部落西方にあり，児島西北端の種松山を最高所（260m）として複雑に混み入った山塊の南側に存する標高 55m 程の低山塊である。



第 5 図　曾原天王山中世墓群調査位置図（S＝1/1000）

東南に広がる広大な水田は，古くは児島湾につながり近世の児島湾開墾に先だって陸地化していったものと思われる。縁辺部には弥生時代前期～後期の遺跡も点在する。この平野の西北部24 haの水田が水島インターチェンジ用地にあたる。本四・瀬戸大橋陸上ルート本線は天王山の頂部を削り取って南は児島方面に，北は粒江につづく予定路線が発表された。路線内の分布調査時に於て天王山山麓の竹藪，雑木林内から五輪塔の火輪部などが散乱していた。

発掘調査は，倉敷市遺跡地図に記載されている天王山山頂の古墳および天王山山麓部の古墳とおぼしきものも含めて，昭和53年7月1日～10月31日まで実動約90日を持って行った。竹，雑木，下草刈りにほぼ1箇月を要し，当初南向き斜面に南北のトレンチを入れた所，備前焼の壺を利用した骨蔵器が見られ，すぐ周辺にも羽釜を利用した骨蔵器などが検出されたため南西部，南東部を拡張した結果，備前焼の壺を利用した骨蔵器4箇所，羽釜と利用した骨蔵器3箇所，亀山焼の壺を利用したと思われる土壙，人骨を伴う小型の長方形土壙など合計9箇所の墓群を検出し，他に灰・炭の混じる土層などが見られ，これを第1群とした。

又，東斜面に入れたトレンチからは石組，中世土器片が見られ，ここも南北に拡張し石組内に骨片が混ったり，備前焼の骨蔵器など11箇所以上の墓群を検出しこれを第2群とした。この他にも，第1群の東部（T－9）東南部（T－6）などを拡張したが，五輪塔火輪部1箇，水輪部1箇，地輪部6箇，中世土器片を堆積土内から検出したが，遺構は検出できなかった。

B. 第1群の調査（第6・7・8図，図版5・6）

天王山南山麓斜面の標高35 m付近で検出した骨蔵器を中心とした9箇所以上からなる中世墓群である。

〔第1号骨蔵器〕

備前焼の壺を利用した骨蔵器で出土位置は確認できていないが，2号墓より西側から口縁部と底部がトレンチ内より分離して出土している。備前焼は青灰色を呈し良く焼きしまっている。口縁部は1 cm程たちあがり丸くおさめている。底部から五段程は輪積みの痕跡がよく残っている。

〔第2号骨蔵器〕

土師質の羽釜を利用した骨蔵器で内部に骨片が多く見られた。淡褐色を呈し口径20 cm，高さ17.6 cmを測る。左右に一対の耳がつき，ほぼ中央に幅2 cm，厚5 mmのつばがつく。つば部の径は33cmを測る。つばより上部は摩滅が著しいが，荒い板状工具で調整後なで仕上げを行う。下部は全体に縦方向の板状工具によるかき目を行い，4 cm下から底部までは横方向に荒い板状工具によるかき目を残す。部分的にすすが付着する。内面は細い板状工具によるかき目で調整を行う。

〔第3号骨蔵器〕

2号骨蔵器のすぐ東に同じく瓦質に近い感じの焼きの羽釜を利用した骨蔵器である。台石に五輪塔地輪部を利用している。灰白色を呈し口径15cm，高さ20cmを測る。左右に一対の耳がつく。全面に荒い板状工具によるかき目を残しているが，羽部より上部はなでによってほとんど消されているが，

下部はそのまま残している。内面も外面より細い板状工具により調整を行っている。

〔第4号骨蔵器〕

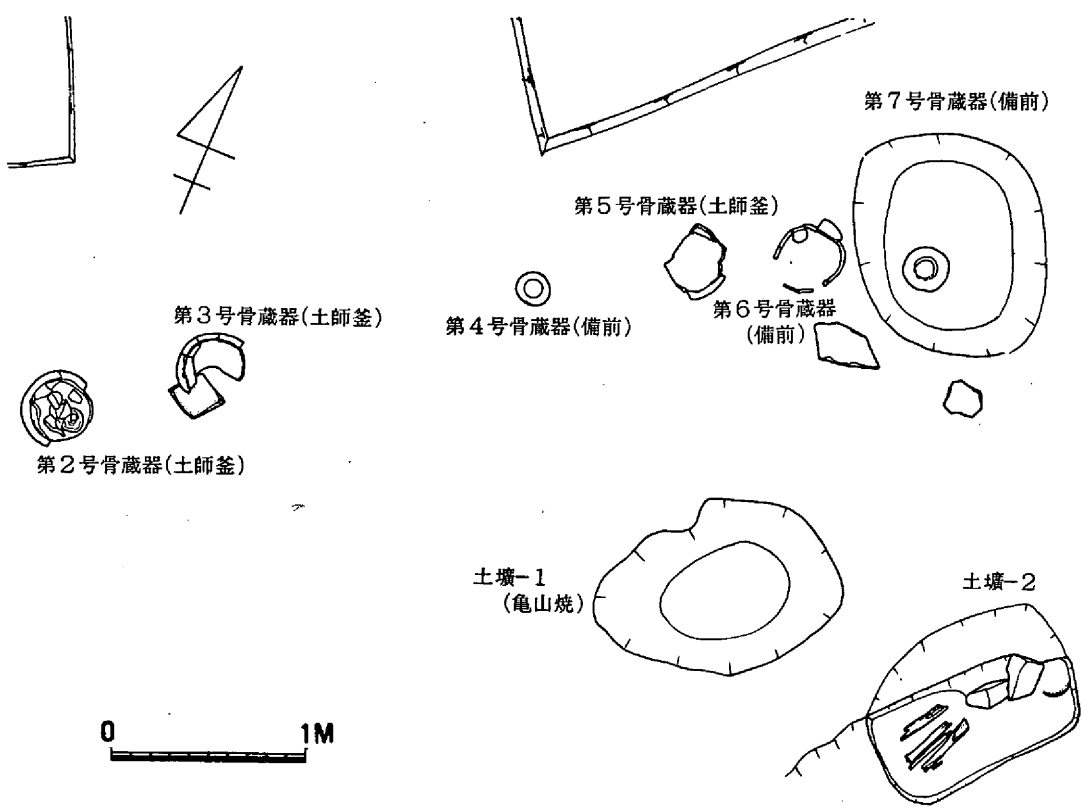
備前焼の短頸壺を利用した骨蔵器である。3号骨蔵器の1.7m東に位置する。口径11cm，高さ14.4cmを測る。茶褐紫色に良く焼きしまり口縁から肩部にかけて胡麻がかかっている。肩部に部分的に波状文，体部中央に篦状工具による半円状に6条の彫り刻み文様が見られる。底部は焼成後に打ち欠いている。内部には火葬骨が充塡していた。

〔第5号骨蔵器〕

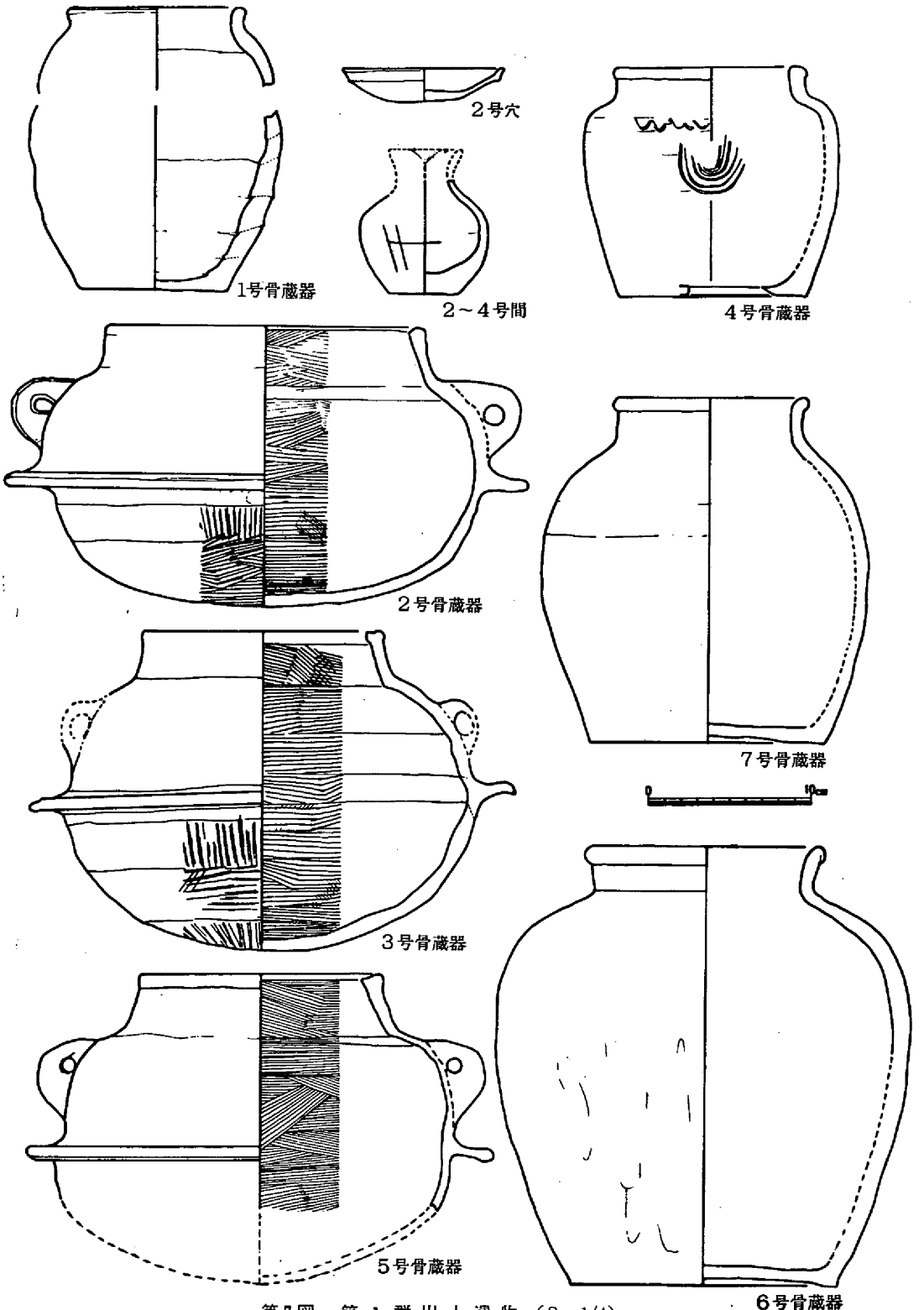
2・3号と同じく土師質の羽釜を利用した骨蔵器である。底部を欠損しているが，淡黄褐色を呈し口径15cm，2・3号とほぼ同じ位の大きさになると思われる。表面は荒い板状工具で調整後なで仕上げを行い，内面は細い板状工具により仕上げている。

〔第6号骨蔵器〕

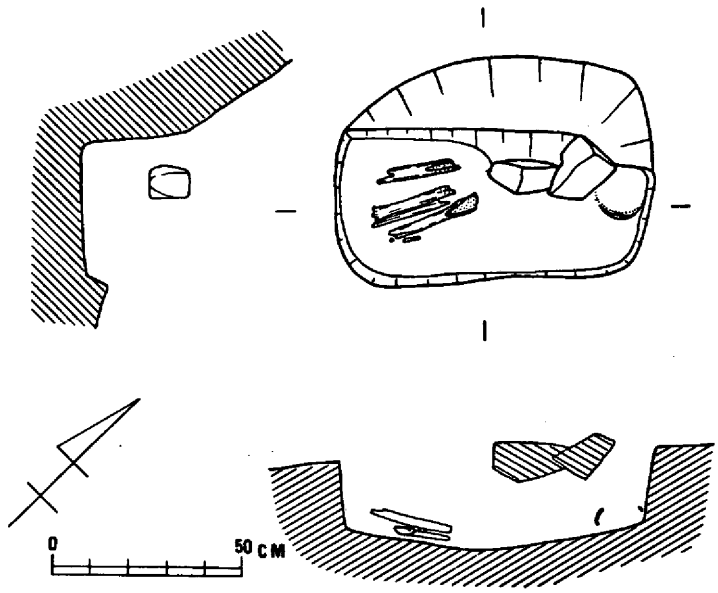
備前焼の壺を利用した骨蔵器である。卵形をなし少し肩が張る体部からやや外開きに立ち上る口縁を持つ。端部はわずかに玉縁をなす。灰色～黒紫色を呈し，口径14cm，器高27cm，胴部最大径25cmを測る。口縁部から肩にかけて胡麻がかかり，それが剝離している。底部にはゲタ痕が残る。



第6図　曾原天王山中世墓第1群（S＝1/40）



第7図　第1群出土遺物（S＝1/4）



第8図　第1群土壙2遺構図（S＝1/20）

〔第7号骨蔵器〕

備前焼の壺を利用した骨蔵器である。100×120 cm のほぼ円形をした掘り込み内に埋置している。なで肩の体部からほぼ垂直に立ち上る口縁部を持つ。端部は玉縁を成す。備前焼特有の茶褐色を呈し口径 11.5 cm，器高 21 cm，胴部最大径 20 cm を測る。口縁から肩にかけてわずかに胡麻がかかる。内部には火葬骨が充塡していた。

〔第1号土壙〕

長径 120 cm，短径 90 cm，現存深さ 30 cm の楕円形に掘り込んだ土壙で，内部より黄色を呈する亀山焼風の叩きを持つ壺の口縁部と底部が出土している。口径 26 cm，底部 20.5cm であるが相当大きなものになるが，骨蔵器であろうと思われる。

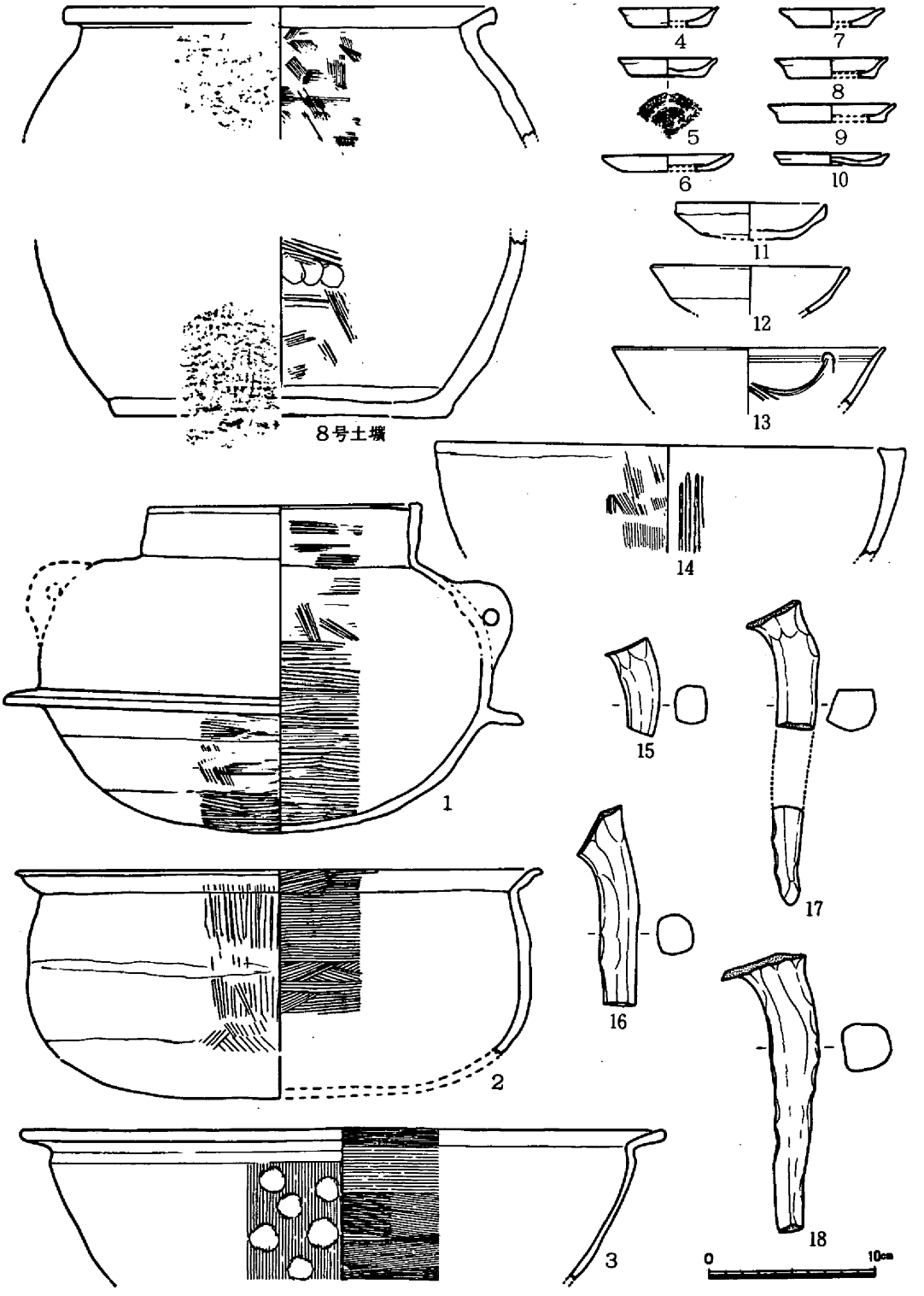
〔第2号土壙〕

長さ 110 cm，幅 60 cm，現存深さ 25 cm の長方形の土壙である。頭部および両脚部の骨が出土しているが，胸部近くに2箇の人頭大の角礫を置いている。

C.　第1群周辺出土遺物（第9・10図）

第1群周辺を拡張した時出土したもので，1は他の骨蔵器と一緒に埋置されていたものであろうが，破片で取りあげ後接合出来た瓦質に近く灰色を呈する羽釜である。口径 12 cm，高さ 20 cm を測る。2～8は土師質小皿，9,10は土師質の碗，11は青磁片で内面に描き目を持ち淡濁緑色を呈す。12は，黄白色を呈するすり鉢の破片である。亀山焼かどうかは定かでない。13, 14は，土師質の鍋で口径 32～40cm を測る。

第9図　第1群周辺出土古銭（S＝1/2）



第10図　第1群周辺出土遺物（S＝1/4）

15～18は三足鍋の脚部である。

南西部の炭灰層より出土した宋銭は天聖元寳（1023初鋳），至和元寳（1052初鋳），嘉祐元寳（1057初鋳）の3枚である。

D. 第2群の調査（第11・12図，図版8～13）

天王山東山麓斜面，標高35m付近で，南北に検出した。並ぶ石組および火葬骨を木箱に入れ埋置したと思われる石組，8箇所以上，備前焼を利用した骨蔵器2箇所と灰の混じる土層を検出した。この石組穴には数多くの五輪塔の空風輪部(3)，火輪部(3)，水輪部(1)が，石組内に7点見られた。地輪部は1点も見られなかったが，この群の南に入れた №-9・6トレンチ内からは総計5箇の地輪部が見られたが，豊島石の花崗岩製が多くここの第2群からはほとんどが大理石のものである。

〔第1号墓〕

礫周辺に骨片，土師器埦数点がみられた。1号墓と2号墓上方には五輪塔，空風輪部，水輪部1点が見られた。

〔第2号墓〕

1号墓と同じく礫内外に骨片，土師器埦が見られた。

〔第3号墓〕

石組内に土師質の大皿を伏せ内部からは骨片が数多く出土した。南側上方に五輪塔火輪部が見られた。大皿は，黄色を呈する口径35cm，器高6cmを測る。内外面とも丁寧な刷毛調整を行っている。

〔第4号墓〕

第3号墓のすぐ北側の石組内から土師質土器碗と骨片が出土している。

石組上方からも土師質埦，骨片が出土している。東側に，70×40cm楕円形の範囲内に灰，炭が5cm前後堆積している。ここで火葬したものと思われる。第1群の灰・炭が混った場所のように古銭の出土は見なかった。埦は淡褐色を呈し，口径10cm，高さ3cm前後である。底部がそりあがる特徴を持つものがある。

〔第5～9号墓〕

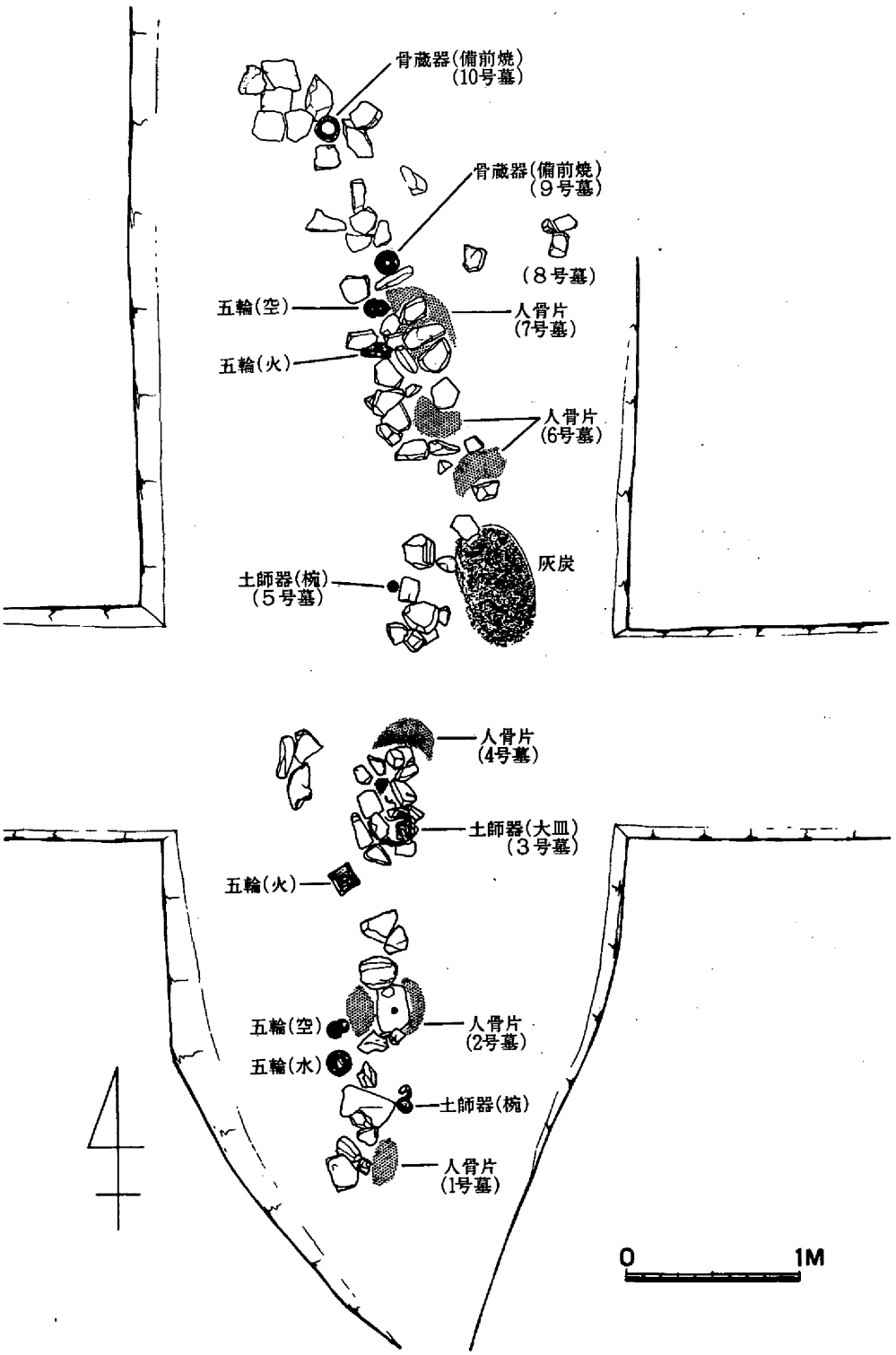
これらも石囲いした中に骨片が多く見られ，木箱を利用して埋置したものと考えられる。6号墓近くから土師質埦が5箇出土している。

〔第10号墓〕

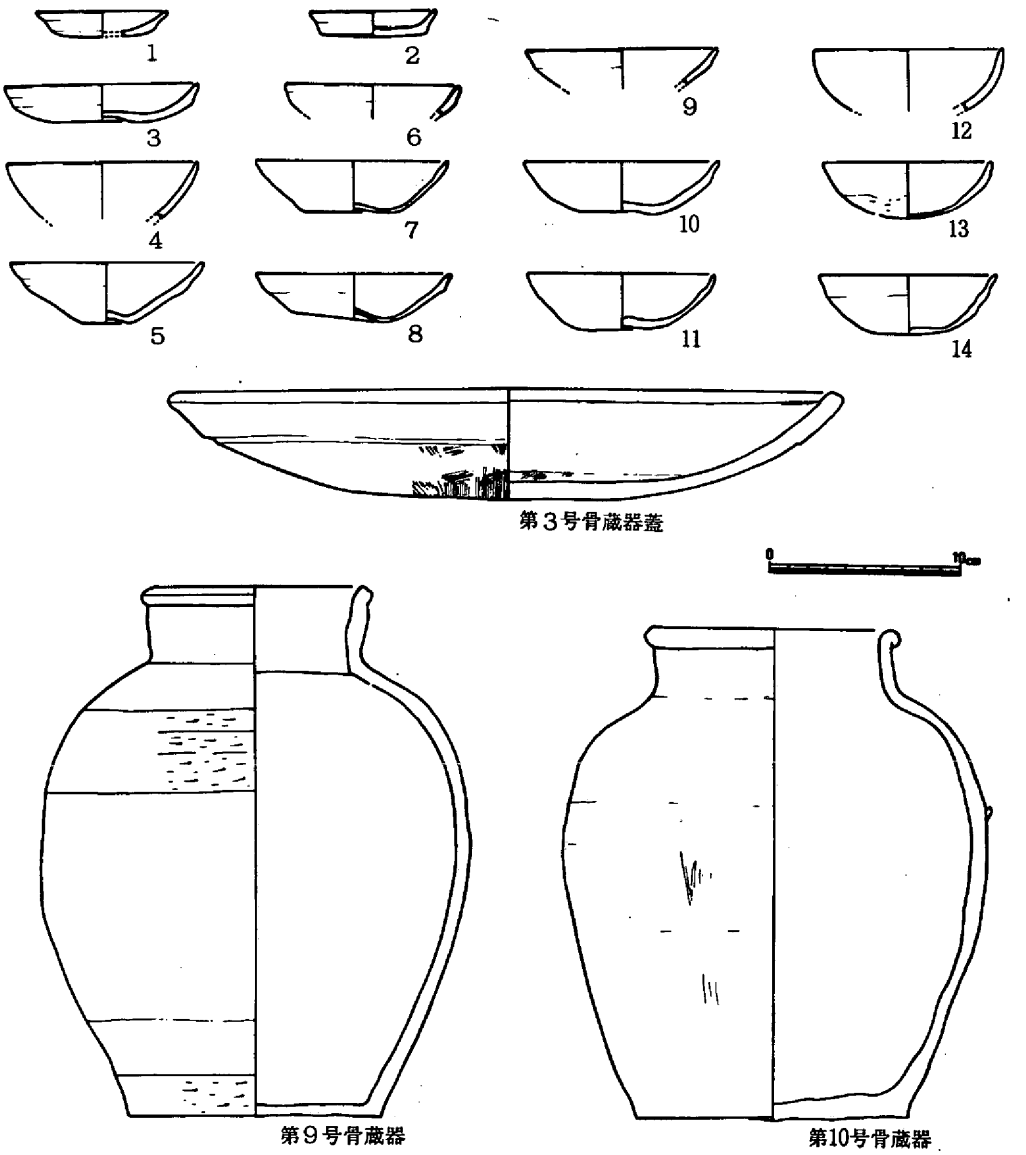
石組を行い中に備前焼の壺を骨蔵器として埋置している。備前焼は卵形をなし，余り肩が張らない。口縁部はやや外に開いて長くたちあがる。端部はわずかに玉縁状になる。備前焼特有の茶褐色を呈し，肩に薄い胡麻がかかる。口径11cm，器高28cm，胴部最大幅22cmを測る。胎土内には0.5～1cm前後の小礫が入る。壺内には火葬骨が充塡していた。

〔第11号墓〕

10号墓と同じく石組内に備前焼の壺の骨蔵器を埋置している。体部は卵形を成し，口縁部はほぼ垂



第11図　曾原天王山中世墓第2群（S＝1/40）

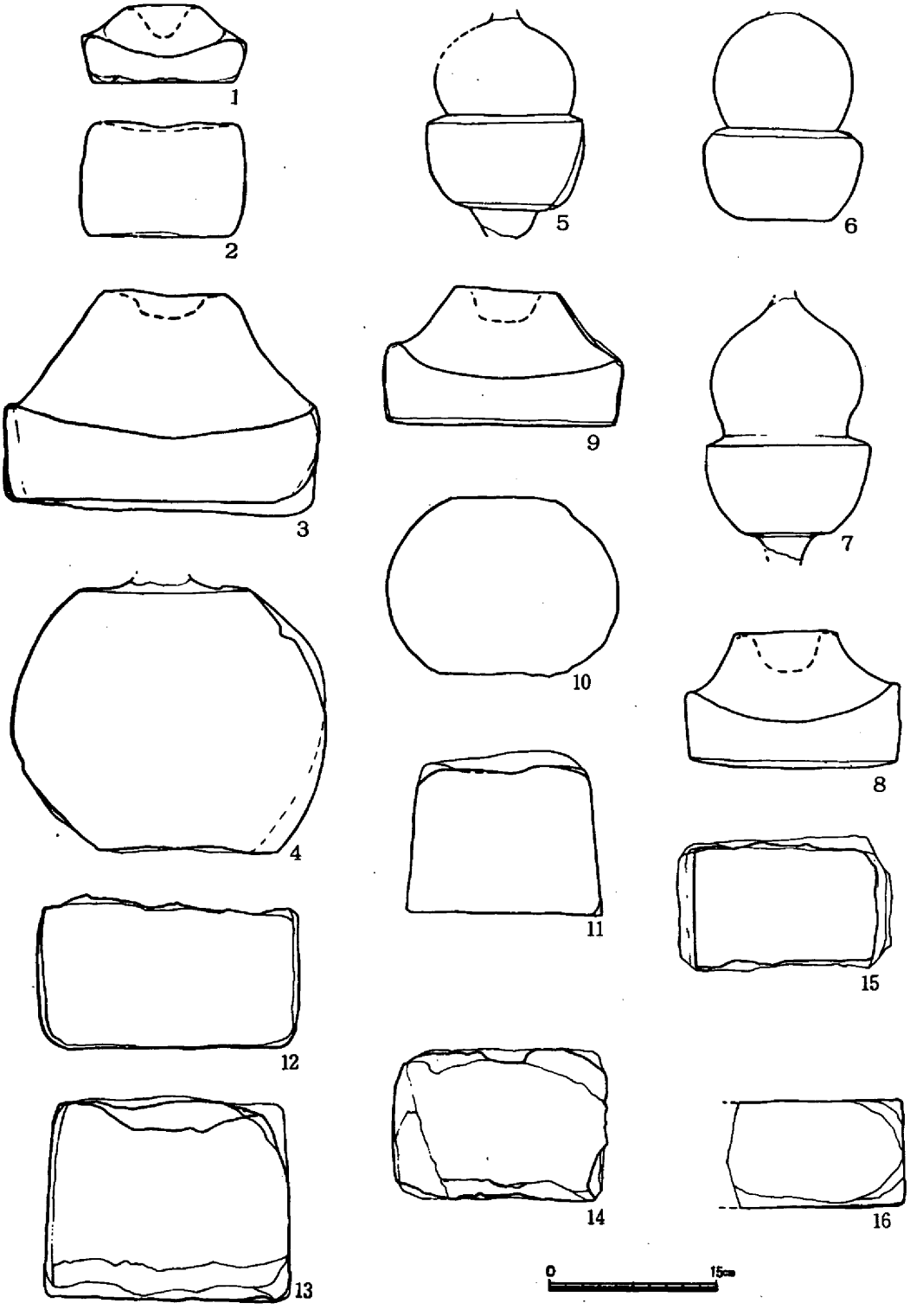


第12図　第 2 群 出 土 遺 物（S＝1/4）

直にたちあがり，端部は玉縁をなす。茶褐紫色を呈し良く焼けている。肩から体部の一部に胡麻がかかる。口径 13 cm，器高 26 cm，胴部最大径 22 cm を測る。壺内には火葬骨が充塡していた。

E. 包含層出土の土器（第14・15・16・17・18・19図）

中世墓とは別に谷部の包含層および第1次調査における谷部グリッド出土遺物を概観しておきたい。この谷部は基本的に同一層序を示し，上部から流れ込んだ堆積層で各グリッドを含め弥生〜中世，上層では一部江戸時代初期まで混在している。T-10・T-13からは，弥生時代の土器，サヌカ



第 13 図　中世墓および周辺出土五輪塔（S＝1/6）

表3　五　輪　塔　観　察　表

番号	五輪部分	形　　態	石　材	出土場所	備　考
1	火輪部	偏平で軒先はゆるやかにそり返る。隅はわずかに外に開いてたちあがる。	コゴメ石（結晶質石灰岩）	第1群周辺表採（T-9）	室町時代後半？
2	地輪部	たて10×よこ15cmの方形をなし，上部にわずかに凹みを持つ。	〃	第1群第3号墓台石	室町時代後半？
3	火輪部	大形で軒先はわずかに反り，隅はほぼ垂直になる。	花崗岩	第1群T-6上段にて表採	
4	水輪部	大形で上部にのみ突出部を持つが欠損している。	〃	T-6	風化著しい
5	空風部	宝珠はほぼ球形を呈し，請花は逆台形で丸味を持つ。下部に突出部を持つ。	コゴメ石	第2群第2・3号墓上	室町時代中頃？
6	空風部	5とほぼ同じ形を成すが，下部に突出部を持たず平らである。	花崗岩	第2群第3号墓上方	
7	空風部	5と形状は似ているが，少し大形である。下部に突出部を持つ。	こごめ石	第2群第9～10号墓の間	
8	空風部	軒先は弧状をえがき，隅はほぼ垂直にたちあがる。	〃	第2群9号墓内	欠損
9	火輪部	軒先はわずかに反り，隅はほぼ垂直にたちあがる。	〃	第2群9号墓内	
10	水輪部	直径21cmの球形の上部と下部を水平にしている。	〃	第2群第2号墓上方	
11	地輪部	下部18cm，上部15cmの台形をなす。上面は凸凹が著しい。	〃	？	
12	地輪部	たて12×よこ24cmの長方形をなす。	石灰岩	T-6	
13	地輪部	たて18×よこ22（上部で21）cmの台形を呈す。	〃	T-6	
14	地輪部	たて12×よこ20cmの方形を呈す。	〃	T-9	風化著しい
15	地輪部	たて12×よこ18cmの方形を呈す。	〃	T-6	風化著しい
16	地輪部	たて10×よこ15cm＋αの長方形。	花崗岩	T-6	
	空風部	風化著しく原形不明	豊島石		
	火輪部	小破片2	花崗岩		

イト剝片，奈良・平安時代の須恵器，瓦片，緑釉片，中世の土師質壺・甕・鍋・三足鍋の脚部・埦・小皿・こね鉢・すり鉢・青磁・石製鍋などが多量に出土している。

弥生土器

弥生時代中期と考えられる甕の口縁部および底部・体部破片（第14図1～10）・サヌカイト製平基式石鏃2点・凸基式石鏃2点の4点とサヌカイト剝片が出土している。

須恵器

古墳時代の杯蓋と思われるもの。奈良～平安時代と思われる壺形土器（薬壺・長頸壺）杯身・杯蓋（第14図11～17）・甕体部破片等が出土している。

緑　　釉

口縁部と底部の破片で2片ずつ（第14図18，19）G 41・48（2）・47から出土している。杯部は埦状になり口縁端部をわずかに外に開く，底部は0.8cmの高台を有する土師質の黄白色～灰白色の胎土に緑色の釉が全面にかかる。18は温度が高すぎたのか，二次的なものか不明であるが，表裏共黒斑状の小さい斑点が見られる。19は剝離が著しい。口径復原15.4cmを測る。

瓦

G47を中心にして小破片が7点出土（第14図22，23）している。表面は布目，裏面は無文・平行叩きが見られる。22は厚さ4cmに達し内部に1cm前後の小石が混入している。

土師器

中世の土師器がほとんどで全体量としても最も多い。小皿，皿，埦，壺，甕，鍋，三足鍋の脚部などが出土している。

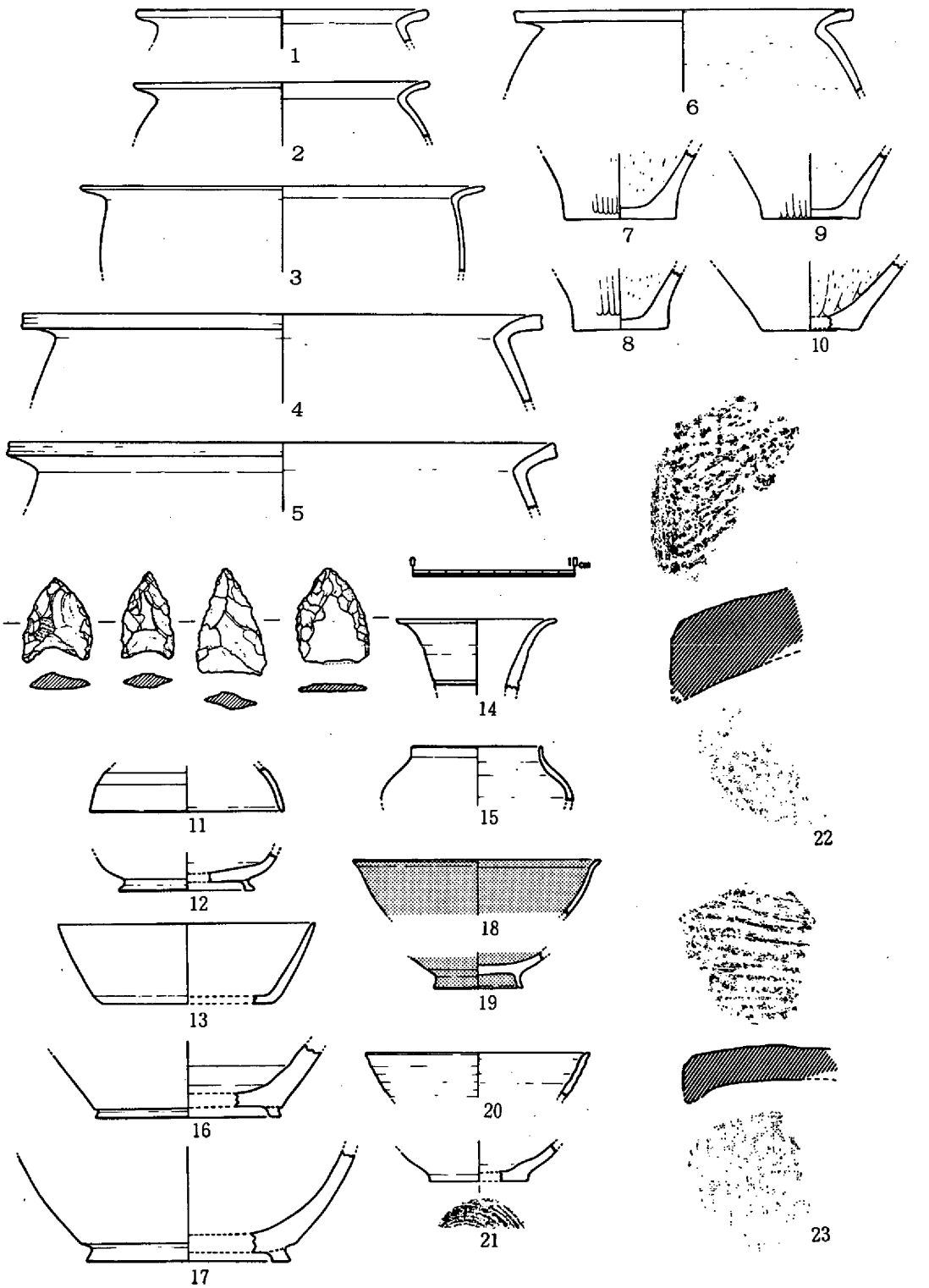
〔小皿〕（第15図）　土師質の小皿で粘土紐巻きあげにより口縁部をわずかにつまみあげているものである。形態的には，口径6cm，高さ1cm程の小型品と，口径7～10cm程になるもの，口径10cm，高さ1.5～2cmになるものなど多種のものが混在する。胎土はほとんどのものが緻密で白黄色から淡褐色を呈するものと，砂分が多く淡赤褐色を呈するものがある。底部はいずれも粘土紐巻きあげの痕跡が残されたままである。糸切り底のものは存在しない。

〔埦A〕（第16図）　灰白色を呈した埦でほとんどの口径が14～16cm以内に収まる。高さは5cm前後で高台の付くものと付かないものが存在するが，高台の付くものが圧倒的に多い。高台の付かないものは糸切り底を残さない。杯部はいわゆる埦状をなし口縁端部が軽く外に開く特徴をもつ。

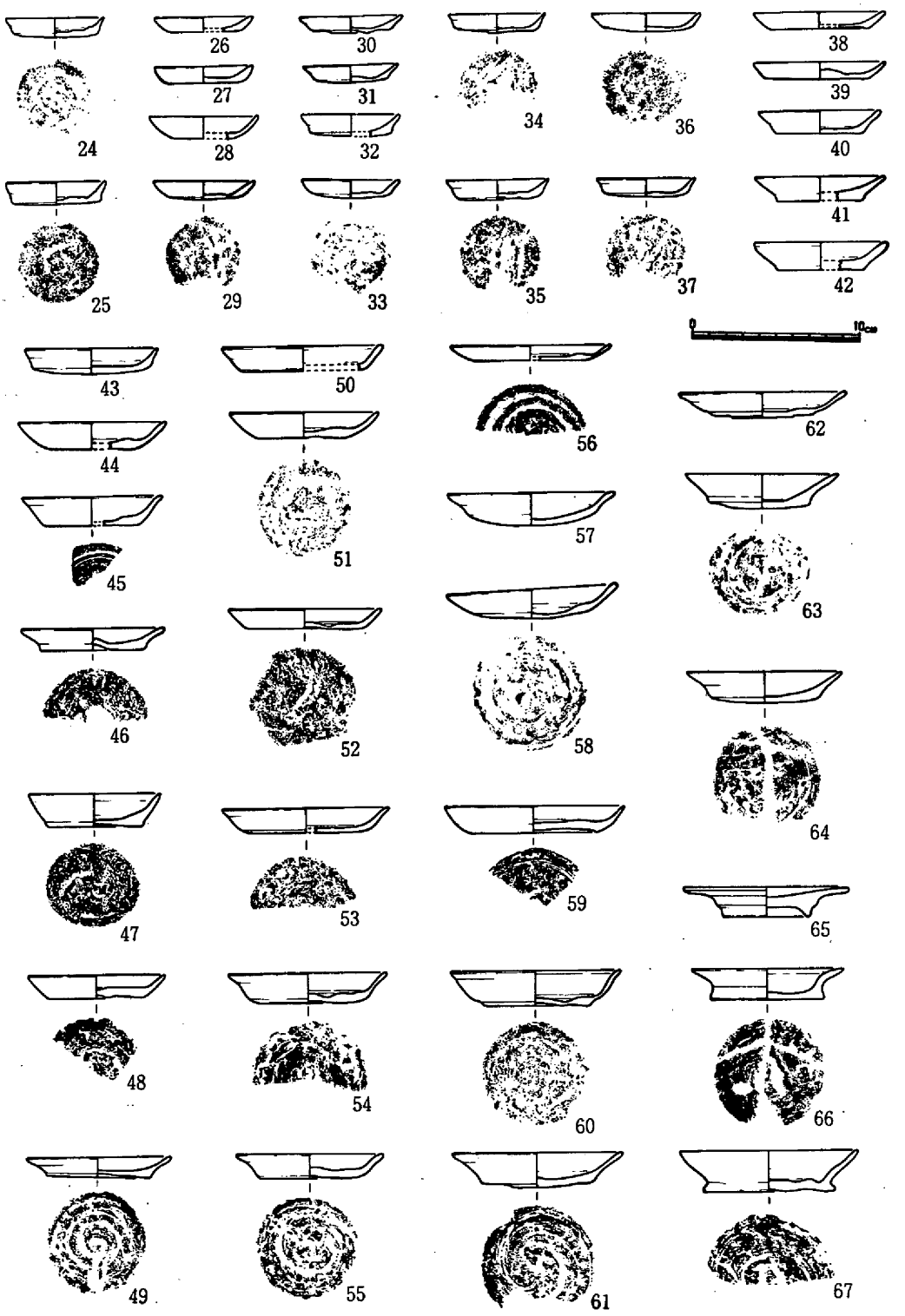
〔埦B〕（第20図151～155）　杯部は外に大きく開き，逆三角形の貼り付け高台をもつ。口径10～12cm，高さ4cm以内で造りが雑である。灰褐色～灰淡褐色を呈する。

〔埦C〕（第20図156～161）　内彎する杯部を持ち，口径9～10cm，高さ3cm前後になる。底部が盛り上る特徴を持つ。胎土は緻密で，明褐色を呈する。

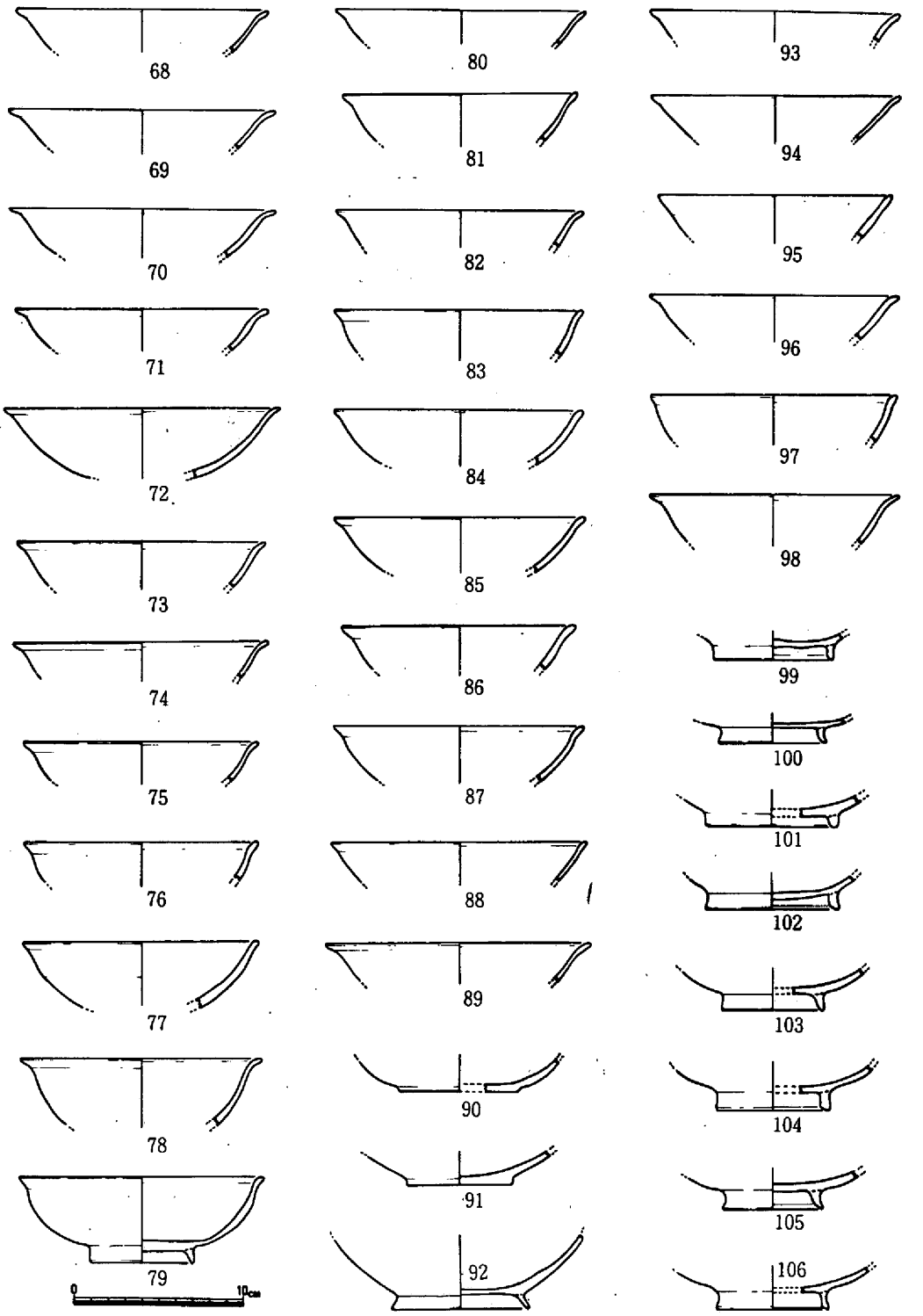
〔壺〕　110，111は亀山焼風の瓦質に近いもので口縁部と体部破片が多く甕になるかもわからない。112は底部で少し大きな目の格子目叩きを持つ。他にG43の一括遺物の中に見られるが（113），これは瓦質というより土師質に近いものである。体部破片の中では須恵質に近いものから，瓦質から土師質に近いものがある。表面の格子目叩きも荒いものから111のように細いもの，また内面は青海



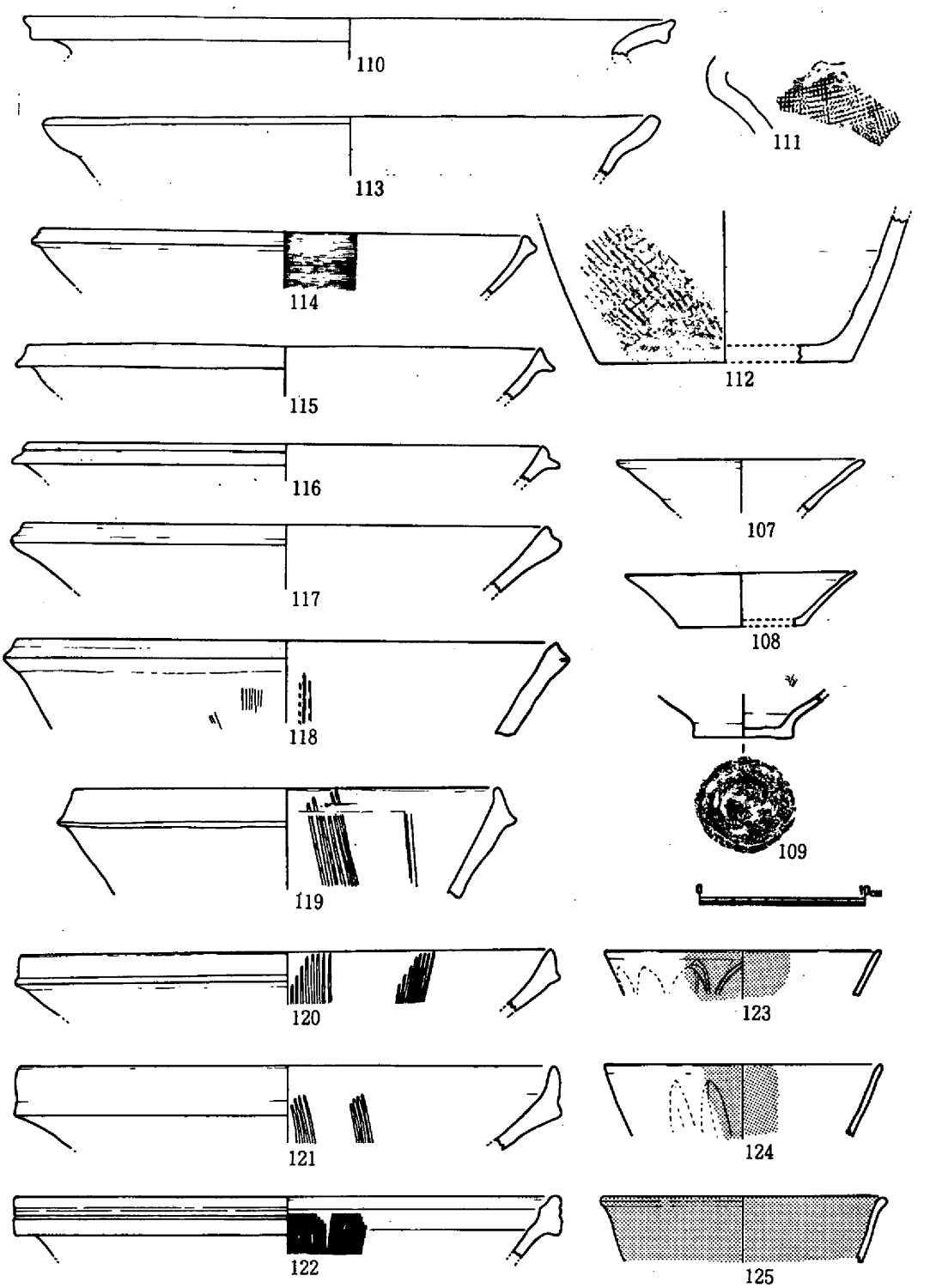
第14図　包含層出土遺物（1）（S＝1/4）



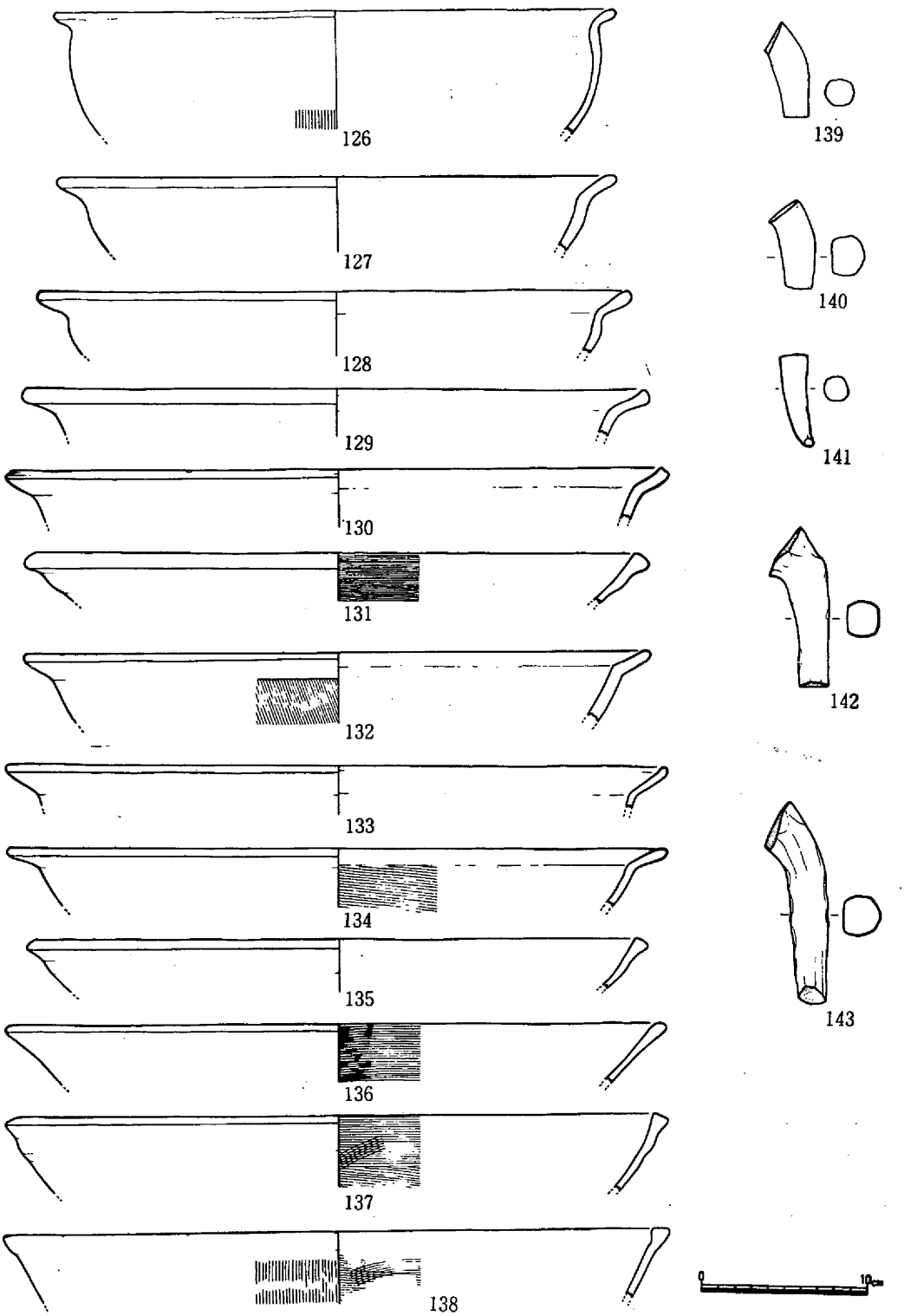
第15図　包含層出土遺物（2）（S＝1/4）



第16図　包含層出土遺物（3）（S＝1/4）



第17図　包含層出土遺物（4）（S＝1/4）

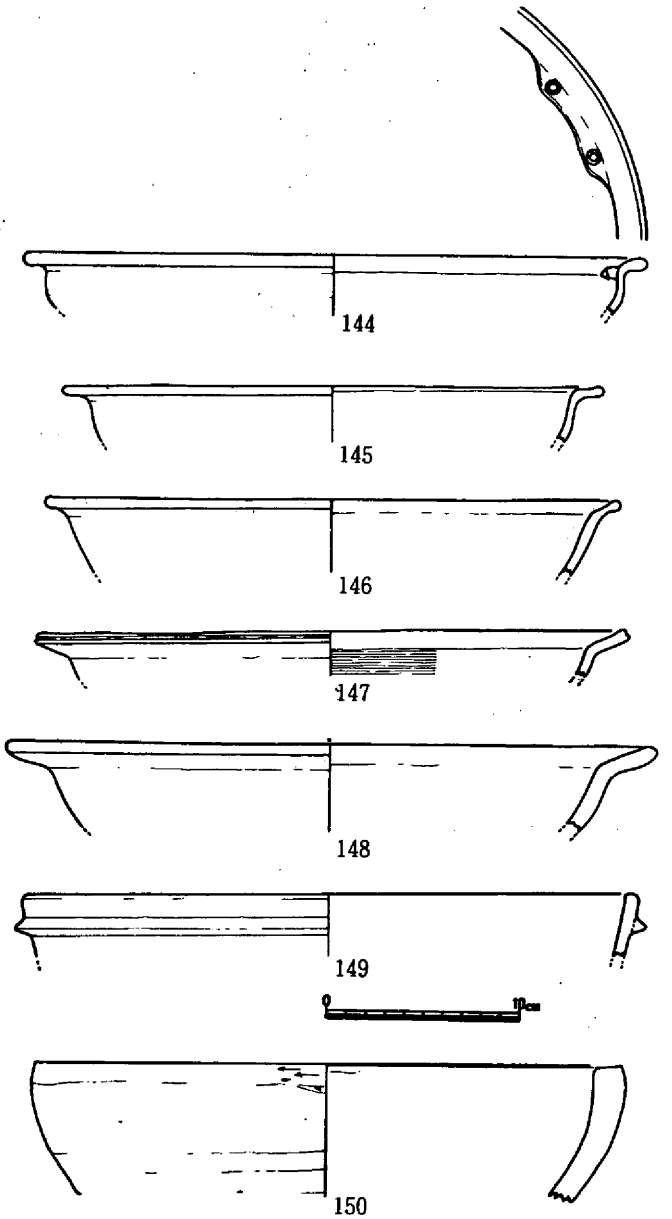


第18図　包含層出土遺物（5）（S＝1/4）

波文を施した後強い板状工具で消しているものがある。

〔鉢〕（第17図114～122）　いわゆる内部に条線を施さないこね鉢と条線を施すすり鉢で，こね鉢は瓦質のものが多い。口縁端部をわずかに上下に拡張，あるいは肥厚させている。すり鉢は，黄白色を呈し土師質に近い，119以降はすべて備前焼である。これは室町時代から江戸時代初頭にかけてのものである。

〔鍋・三足鍋〕（第18，19図）ボウル状の体部からゆるく外反する口縁部を持つものがほとんどで，口径が30㎝前後のものと，40㎝近くに達するものがある。内外面とも板状工具により調整が行われている。ほとんどの体部にはすすが付着している。棒状の脚部が見られ，三本の足が付く鼎状になるものが存在する。149のように，口縁部が外反せず，そのままの鉢状になるもの，内側に耳を持つ鍋（144）も見られ多種のものが混在している。



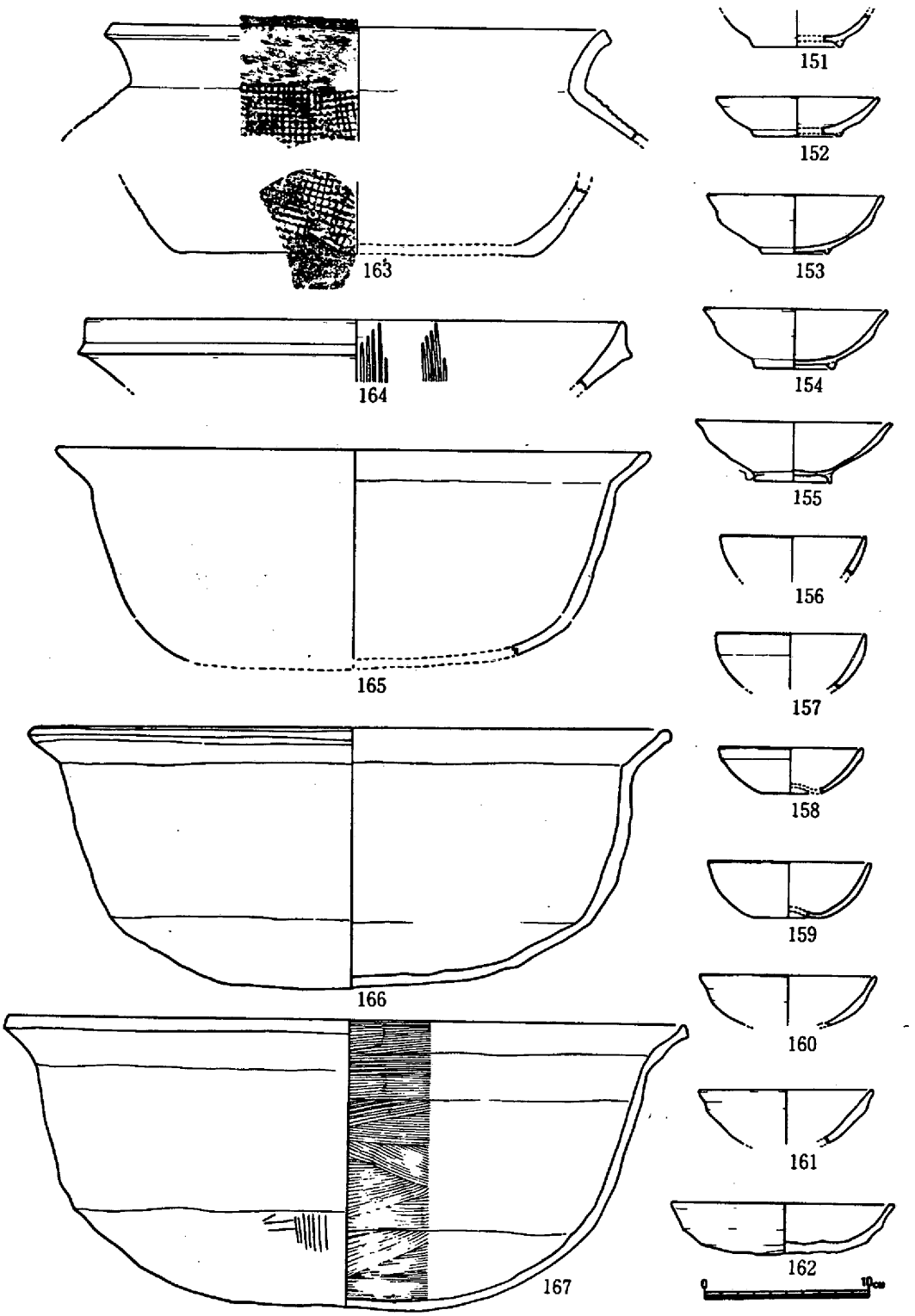
第19図　包含層出土遺物（6）（S＝1/4）

中国製輸入陶磁

埦の口縁部破片（第17図123～125）で，鎬目文を持つ黄緑色123，濁緑色のもの124で，龍泉窯系の13世紀後半に属するものと考えられる。125は，明緑色を呈した明青磁と考えられるものである。

石　鍋

石鍋の小破片（第19図150）が1点出土している。体部はボウル状を成し，口径復原30㎝前後になる。口縁は水平にのこぎりで切られ，その痕跡が残る。体部外面は打痕，削り痕が残る。内面は使用により摩耗しているが，線状の痕が残る。石材は滑石製である。把手はつかない。



第20図　包含層出土遺物（7）—No.43トレンチ一括他—（S＝1/4）

5. 小　結

曾原遺跡は，南面する低台地上に位置し，分布調査時には奈良時代以降の須恵器片，中世と思われる土師器片など多数を表面採集した。しかしトレンチ調査において谷部の弥生～中世の包含層以外は見るべき遺構，遺物は検出されなかった。このため次年度以降に予定していた曾原天王山山麓の中世墓および，天王山山頂の古墳の調査を行った。曾原天王山山麓の中世墓は五輪塔が露出していたが，調査の結果２群からなり，第１群からは，土師質羽釜，備前焼等を利用した骨蔵器と土壙２を検出し，第２群からは，第１群と異なり礫群を伴い備前焼の骨蔵器が２点と木箱に収めたと思われる状態で人骨片が多く出土した。１群の五輪塔は表土層，あるいは羽釜の台石にしていたり，２群からは礫群穴の石組から出土しており，墓石として立っていたものを転用している可能性もある。これまでの中世墓の多くは宝篋印塔，五輪塔などが知られているが発掘調査された例はほとんどない。火葬骨を木箱埋葬する方法は実際に検出した例は今の所見聞していない。骨蔵器を多量に伴う例としては真庭郡勝山町若代から，数十基の五輪塔の改葬工事によって備前焼18点，亀山焼甕，瀬戸焼瓶子の各１点が出土しているのをはじめ，上房郡賀陽町妙本寺境内，久米郡久米南町全間などからも備前焼を主とした骨蔵器が数多く出土しているが，宝篋印塔，五輪塔との相関関係がはっきりしていない。日常用器を転用した骨蔵器は，玉野市槌ケ原から備前焼などの骨蔵器とともに土鍋が３例知られており，第１群から出土した羽釜とは少し形態を異にしている。この槌ケ原遺跡からは五輪塔が二基伴っている。これらは同時に出土した備前焼骨蔵器から鎌倉時代末～室町時代初期に位置付けられている(註1)。

第１群出土の備前焼骨蔵器はⅢ期からⅣ期にわたるものであるが，その中心はⅣ期後半に属するものが多い(註2)。第２群も備前焼の骨蔵器から見ればその中心はⅣ期後半に含まれるものであり，同時に供献されたと思われる土師質の底部中央が上方に突出する特徴ある小皿が出土している。これは平安京内の各地点から出土し通称ヘソ皿と呼ばれているものであり，平安京内では他の陶磁器類とともに一括で出土しており，鎌倉末～室町時代にかけて出現するものとされてている(註3)。地域差等も考えられるが，この地方における中世土師器編年の時期決定の一助となるであろう。また包含層から出土している中世の遺物も弥生時代から奈良時代を含み中世まで層位的に出土しておらず今後の課題として図示しておくにとどめた。

註１　藤田憲司「岡山県玉野市槌ケ原出土の中世骨蔵器」倉敷考古館研究集報　第９号　1974年

註２　間壁忠彦，間壁葭子「備前焼研究ノート１～３」倉敷考古館研究集報　第１号・第２号・第５号　1966年，1966年，1968年

註３　田辺昭三編「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊一」平安京調査会，1975年
泉　拓良編「京都大学構内遺跡調査研究年報」1977年
鈴木重治，松藤和人「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」同志社大学校地学術調査委員会　1978年

(1) 曽原遺跡遠景（天王山頂から南東を望む）

(2) 曽原遺跡遠景（清田八幡神社裏山から南を望む）

図版 2

(1) 曽原地区第１次調査No.−8トレンチ（南から）

(2) 曽原地区第１次調査No−60トレンチ（北から）

(1) 曽原地区第１次調査No.−43トレンチ遺物出土状況（東から）

(2) 曽原地区第１次調査No.−43トレンチ遺物出土状況（東から）

図版 4

(1) 曽原天王山中世墓群を望む（南から）

(2) 曽原天王山中世墓第1群調査前近景（南から）

(1) 曽原天王山中世墓第1群骨蔵器出土状況（東から）

(2) 曽原天王山中世墓第1群2号(左)、3号(右)骨蔵器出土状況（南から）

(3) 曽原天王山中世墓第1群4号(左)、5号(右)、6号（左一部）骨蔵器出土状況（南から）

(4) 曽原天王山中世墓第1群5号(左)、6号(中)、7号(左)骨蔵器出土状況（南から）

図版 6

(1) 第1群2号骨蔵器出土状況

(3) 第1群4号骨蔵器出土状況

(2) 第1群3号骨蔵器・五輪塔地輪部出土状況（南から）

(4) 第1群骨蔵器出土状況（北から）　（左−4号、3号、2号）（右−7号、6号、5号）

(1) 曽原天王山中世墓第1群土壙－2 人骨出土状況（南から）

(2) 曽原天王山中世墓第2群土壙－2 人骨取り上げ後（南から）

図版 8

(1) 曽原天王山中世墓第2群南半部（西から）

(2) 曽原天王山中世墓第2群南半部（北から）

(1) 曽原天王山中世墓第2群第3号墓（東から）

(2) 曽原天王山中世墓第2群第3号墓（西から）

図版10

（1）曽原天王山中世墓第2群11号(左)～8号墓（西から）

（2）曽原天王山中世墓第2群11号(左)、10号(右)骨蔵器（西から）

（3）曽原天王山中世墓第2群10号(左)、11号(右)骨蔵器（東から）

(2) 曽原天王山中世墓第2群10号骨蔵器出土状況（北から）

(1) 曽原天王山中世墓第2群（北から）

図版11

(2) 曽原天王山中世墓第2群11号(上)、10号(下)骨蔵器出土状況（南から）

(1) 曽原天王山中世墓第2群10号(上)、11号(下)骨蔵器出土状況（北から）

（1）曽原天王山中世墓第2群10号骨蔵器出土状況（東から）

（2）曽原天王山中世墓第2群11号骨蔵器出土状況（東から）

図版14

(1) 天王山山頂の古墳推定地 調査前（西から）

(2) 天王山山頂の古墳推定地 調査後（東から）

1号骨蔵器

2号骨蔵器

4号骨蔵器

3号骨蔵器

6号骨蔵器

5号骨蔵器

7号骨蔵器

（1）曽原天王山中世墓第1群出土骨蔵器他

（1）曽原天王山中世墓第2群および包含層出土遺物

2. 昭和54年度調査

―曾原西A遺跡・新池の古墳推定地―

1. 調査の契機と経過

昭和53年度，曾原遺跡の確認調査中に公団と行った協議において，曾原地区の工事用道路の件がもちあがった。この道路は，倉敷市が計画している市道倉敷児島線を利用して，曾原から粒江までほぼ本四陸上ルート（一般国道30号）と併行して計画されているものであった。公団ではすでに市の企画部と市道を利用した工事用道路計画について協議を重ねてきており，文化財についても県教委の意見を聴取してきたのであった。曾原地区の市道予定路線には，本四陸上ルートの分布調査時に確認している曾原西A遺跡の西端部がかかっており，用地もすでに買収されている部分もあることから，県教委としても何らかの対策を打つ必要があった。

8月24日，倉敷市教育委員会，同企画部，同土木部，県教育委員会文化課の4者で市道ルート上の文化財について協議を行った。この協議では，公団が市道を工事用道路として使用する場合には公団と市の問題ではないのか，またルート上の文化財の取り扱いをどの様にするのか，さらに調査費用をどうするのか等が協議された。しかし調査を行うにしても倉敷市教育委員会は調査スタッフを擁しておらず，県教育委員会で調査を続けて行ってほしいという要請が出された。その日には結論は出なかったが，県教育委員会としては市と公団で協議を進めてほしいという要望を出したのである。その後，公団と市において工事用道路の協定書の締結の協議がなされてはいたが合意が得られず，昭和53年度中には着工できないと公団からの連絡があった。

昭和54年度に至り，県教育委員会は，年度計画として琴海1号墳の調査終了に引き続いて，7月中旬頃から市道路線の発掘調査を行う計画を立てていた。

昭和54年6月11日，本四公団第2建設局で行った協議では，公団と倉敷市との協定書の締結が，6月倉敷市議会の承諾を得た後に行える状況であった。さらにこの協定締結後に公団と倉敷市と県教育委員会の3者による文化財の具体的な取り扱いを協議することとなった。

昭和54年6月21日，本四公団倉敷工事事務所にて，公団，倉敷市（土木，企画，教育委員会），県教育委員会の3者による具体的な協議を行った。この協議では，事前の発掘調査を公団の費用負担で県教育委員会が実施することを確認した。また調査の範囲を公団は，工事用道路幅のみを考えているが，県教育委員会としては，市道幅での調査を行うことを要望したのであった。

その後，昭和54年6月28日，公団から文化財保護法第57条の3による工事用道路幅部分の協議申請が提出され，7月21日から第1次の確認調査を開始した。

調査対象地域は，起点から北側4km間の，公団が工事用道路として使用する市道の約半分の道路幅に限定された部分である。調査は，この間に点在する2箇所の散布地と1箇所の古墳を対象とした。

曽　原　地　区

この3箇所のうち，第1地点は，本州四国連絡橋陸上ルート建設予定地内の埋蔵文化財分布調査の結果，水島インター予定付近の広範囲な場所に，弥生時代から平安時代にわたる土器片の散布が確認され，曽原西A遺跡と呼称した西端にあたっている。

第2地点は，第1地点より1.5km北側の南東に開析する谷の奥部にあたる。この谷の入口付近は第1地点と同様に曽原西A遺跡に含まれ，前年度の本線敷の調査によって，中世を主体とする包含層を確認した。このため，曽原西A遺跡の範囲に含まれていなかった谷奥部一帯にも遺跡の広がりが想定され新たに調査対象地区に追加した地点である。

第3地点は，第2地点から尾根1つ越えた北側の新池付近に，古墳の石材らしきものが露出している地点である。倉敷市遺跡地図に新池古墳と記載されているのがこれに該当する。

いずれの地点も遺跡の状況が不明瞭なため，各地点にトレンチを設定し，その状況により第2次調査を行う計画を立て，約3箇月間の予定で7月より調査に着手した。

約1箇月間のトレンチ調査の結果，第2・3地点ではいずれも遺構は確認できず，若干の遺物が出土したのみであった。第1地点では，トレンチ南端に遺物包含層や遺構を確認したため，引き続き南端部約600㎡を第2次の本調査として全面調査を行った。

日　誌　抄

6月19日　遺跡発掘調査に先立って，遺跡周辺の住民へ挨拶を行い，発掘調査の作業員を依頼する。

7月20日　発掘調査を実施する地点を，南側から第1地点，第2地点，第3地点とする。

7月21日　発掘調査に必要な器材の点検を行う。第1地点の調査開始前遠景写真を撮影する。

7月23日　作業員の参加を得て，曽原遺跡工事用道路部分の発掘調査に着手する。第1地点に休憩小屋テントを設置する。本四公団倉敷工事事務所へ，発掘調査範囲を確認する。

7月24日　第1地点に，幅2m・長さ58mのトレンチを設定する。本四公団倉敷工事事務所と，第2地点の雑木の伐採について協議する。

7月25日　第1地点に設定したトレンチの掘開を始める。

7月30日　第1地点の南端部分で，中世の土器片が伴う柱穴群を検出する。

7月31日　第1地点で掘開したトレンチを清掃して，土層断面の写真撮影を行う。土層断面を実測する準備として，レベルポイントに水糸を張る。第3地点の下草刈りを行う。

8月1日　第3地点の調査開始前遠景写真を撮影する。第3地点に，幅1m・長さ10mのトレンチを設定して調査を行う。第3地点は古墳ではなくて，自然石が露出したものであることが判明する。調査完了後の状況写真を撮影する。

8月2日　第1地点から第2地点へ，休憩小屋テントを移転する。第2地点の雑木の伐採を始める。

8月3日　第1地点のトレンチの土層断面を実測する。第2地点に，幅2mのトレンチを設定する。

曽　原　地　区

8月4日　第1地点の土層断面を写真撮影する。第2地点で設定したトレンチの掘開を始める。

8月10日　第2地点南端部分で，中世の土師質土器片が多量に出土する。

8月11日　中世の土器片が伴う柱穴群を検出した第1地点南端部分を拡張して，全面調査を実施することが決定する。

8月17日　第1地点拡張部分の下草刈りを始める。

8月18日　第2地点で掘開したトレンチの清掃を行う。中世の土師質土器片が多量に出土した第2地点南端部分を拡張して，さらに調査を継続することが決定する。

8月20日　第1地点拡張部分で，ユンボとブルドーザーを使用して，表土除去作業を始める。第2地点拡張部分の雑木の伐採を始める。第2地点で掘開したトレンチの写真撮影を行う。

8月21日　第2地点から第1地点へ，休憩小屋テントを移転する。

8月23日　第1地点拡張部分でユンボとブルドーザーを使用した表土除去作業が終了する。

8月24日　第1地点拡張部分の調査を始める。

8月25日　第1地点拡張部分で，南北方向に走る浅い溝を検出する。

8月27日　本四公団児島工事事務所と，今後の発掘調査計画について協議する。

9月7日　第1地点拡張部分の調査を継続する。

9月21日　第1地点拡張部分の写真撮影を行う。

9月22日　保護対策委員会を開催する。

9月25日　第1地点拡張部分の平板測量を行う。

9月26日　第1地点拡張部分の実測に着手する準備として割り付けを行う。

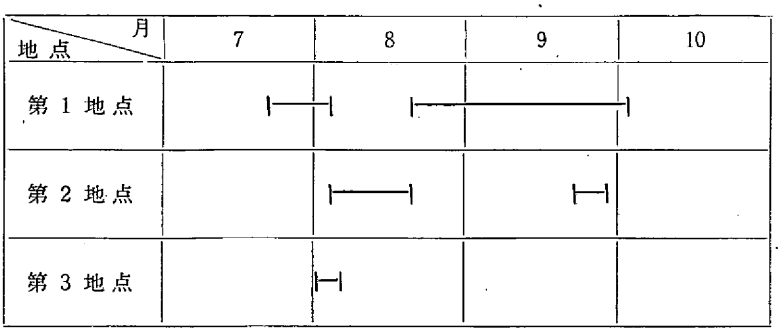
9月27日　第1地点拡張部分の実測を始める。第2地点拡張部分の調査を始める。

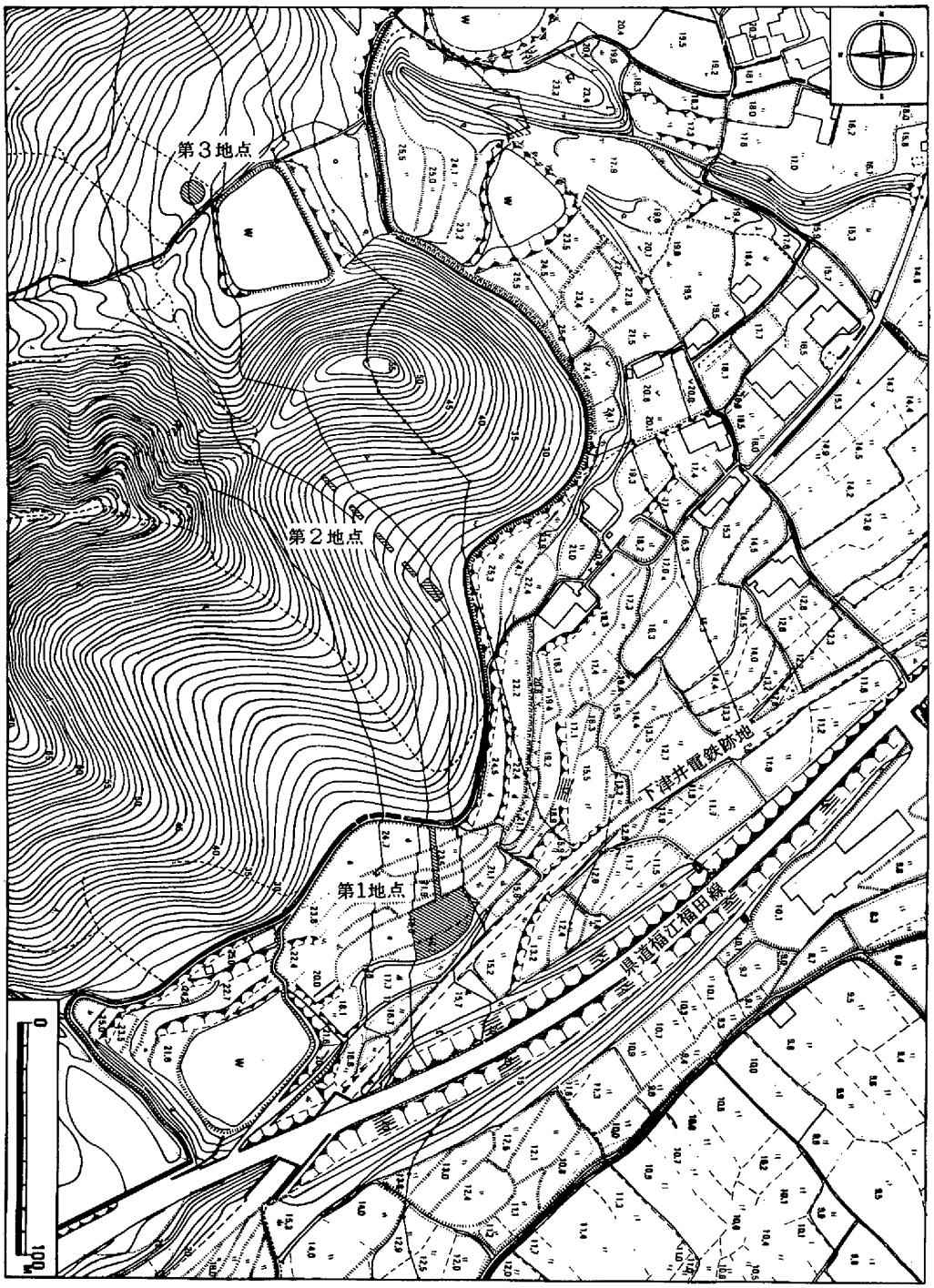
9月28日　第2地点拡張部分の写真撮影を行う。現場事務所に増設していた作業小屋を解体する。発掘調査に使用した器材を整理して，運搬の準備を行う。

9月29日　発掘調査に使用した器材を，文化課分室へ運搬する。曽原遺跡周辺の住民へ，発掘調査終了の挨拶を行う。

10月1日　現地で実測図の補足を行い，曽原遺跡工事用道路部分の現場発掘調査作業を完了する。

表1　曽原地区，昭和54年度調査工程表





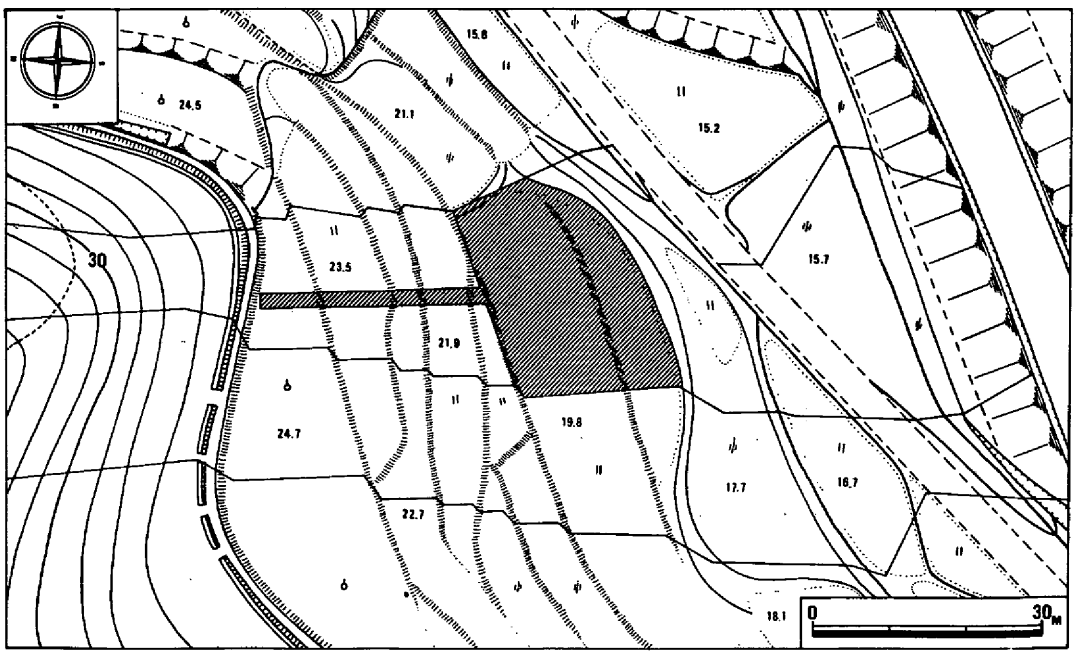
第１図　曾原工事用道路敷調査区位置図（S＝1/3000）

2.　曾原西A遺跡　第1地点

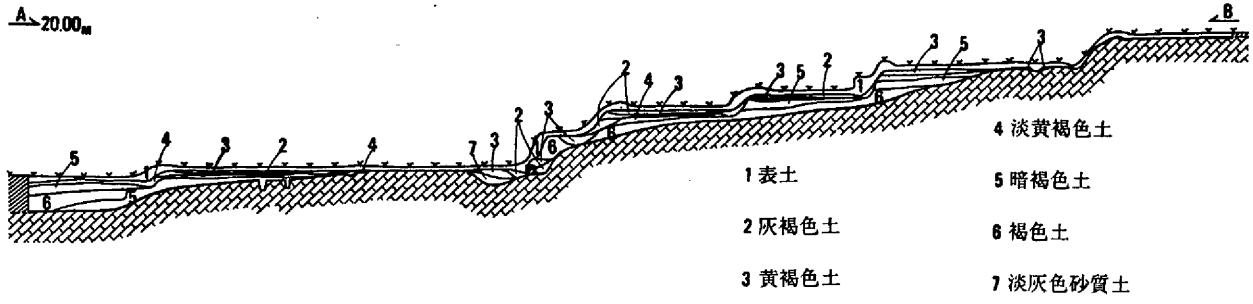
この調査区は，県道福江・福田線と下津井電鉄の路線跡地を転用した市道が交叉する地点の北側に位置する。日当りの良い南に面した緩斜面で，発掘調査を開始した当初には水田または水田を利用した果樹園になっていた。調査に着手する以前から下草刈りがすでに行われていたこともあって，今回の工事用道路敷内の発掘調査で，最初に調査を実施した調査区である。調査開始前の全景写真を撮影した後に，調査区の中央部分を縦貫する幅2m，長さ58mを測るトレンチを設定して，北端の地点から調査を進めた。その結果，南端に位置する平坦な水田部分から，中世に属すると推定される土器片（第17・18・19・20・21図）とともに井戸状遺構（第9図）や多数の柱穴を検出した。この地点には，建物群を主体にした中世の集落跡が想定されたため，トレンチを拡張して約20m×30mを測る平坦な水田部分の全面調査を行うことにした。

掘開したトレンチの土層断面を写真撮影や実測して，第2地点や第3地点における遺構の確認調査が終了した後に，井戸状遺構や多数の柱穴を検出したトレンチの土層断面を参考にして，ブルドーザーとユンボによる表土の除去を始め，拡張部分の調査に着手した。

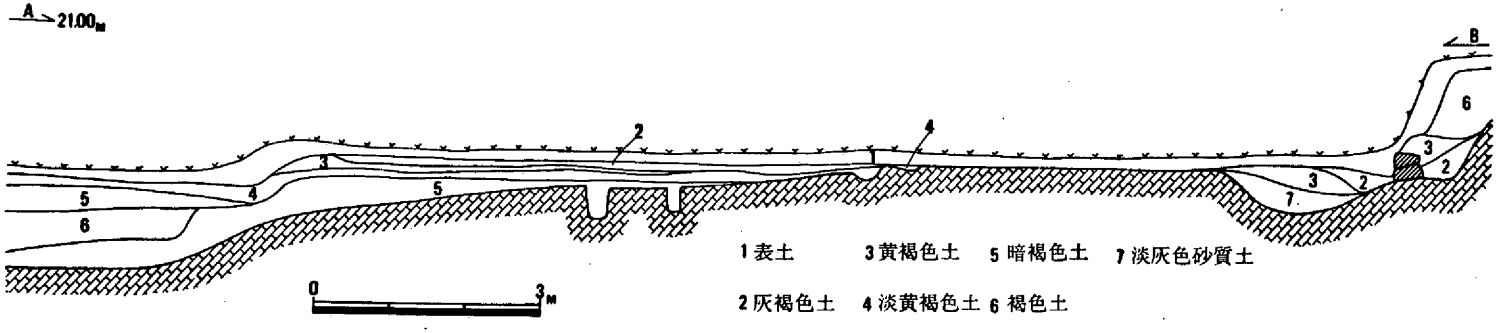
拡張部分の北側に位置する地形の高い所は大きくカットして平坦面を形成しているが，南側の地形の低い所は後世に著しく削平されて急斜面になっていた。平坦面には多数の柱穴や土壙を検出したが，検出した多数の柱穴を精査したにもかかわらず建物としてまとまらなかった。柱穴の径は20cm～30cmを測る小規模で円形を呈するものが一般的で，検出面からの深さは30cm～50cmのものが多い。



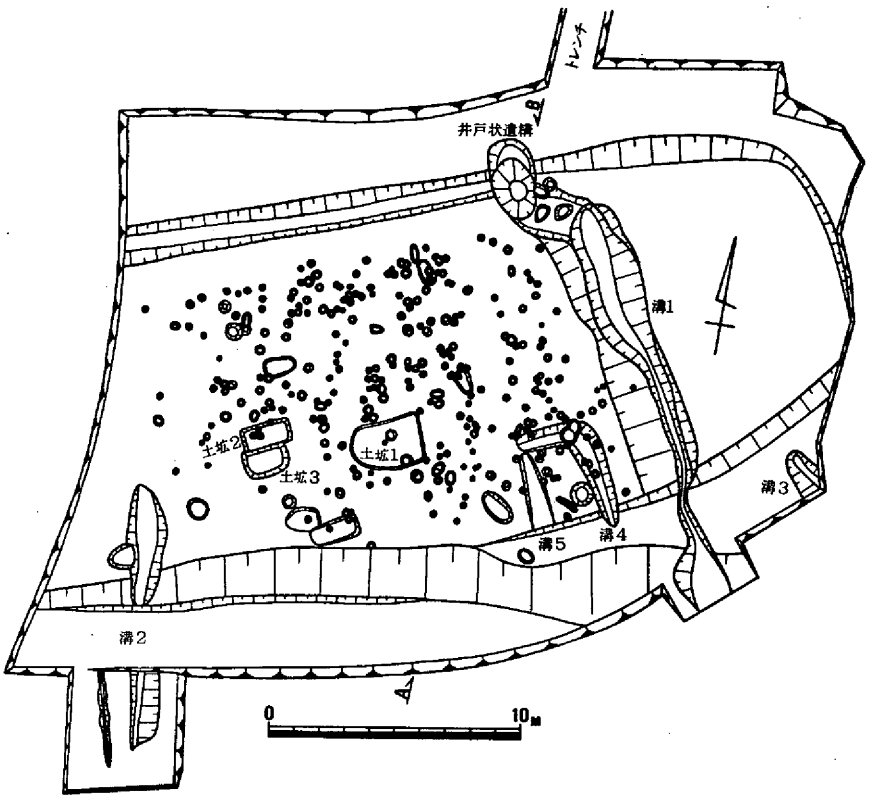
第2図　曾原西A遺跡第1地点調査範囲図（S＝1/1000）



第3図　第1地点断面図（S＝1/300）



第4図　第1地点拡張部断面図（S＝1/100）



第5図　第1地点遺構配置図（S＝1/300）

柱穴内には褐色土や灰褐色土を含み，柱根の痕跡を有するものも認められた。柱根の痕跡から推定して，柱には直径が10 cm～15 cmを測る丸太を使用したと考えられる。検出した土壙には，柱穴の規模をやや大きくした形態のものや平面形が隅丸長方形を呈するものなどが認められたが，検出面からの深さはいずれも極めて浅くなっていた。なお柱穴や土壙の内部からは，中世に属すると推定される土器片（第16図）がわずかに出土している。この調査区の東側には，井戸状遺構と連続した幅が広くてほぼ南北方向に走る溝（第7図）を検出した。この溝のさらに東側は，西側に比してわずかにレベルが高くなり，全く柱穴が存在しなかった。また西側に位置する調査区の境界部分には，南側で枝分れしてほぼ南北方向に走る溝（第10図）を検出したので，さらに調査区を南に拡張して追跡調査を行った。この溝を境にして，西側には柱穴が存在しないようである。このように，東西両側で確認したほぼ南北方向に走る2本の溝は，平坦面で検出した多数の柱穴や土壙を取り囲むようになっていたのである。なおこの2本の溝内からも土器片（第8・9・11図）が出土している。

井戸状遺構（第6・7図，図版4-1・5-1）

多数の柱穴や土壙を検出した平坦面の北東端に存在する。この地点は，平坦面を形成するためにカットした岸の法面にあたる。発掘調査を開始した当初に掘開したトレンチによって検出したもの

で，平面形は南北方向に長い楕円形を呈している。地形の高い北側部分には，彎曲した段が認められる。中心部の地山面での規模は，長軸 2.35 m，短軸 1.63 m を測る。断面は浅い「U」字形を呈し，最も深い地点で約 50 cm を測る。底部には淡灰色砂質土が存在した。

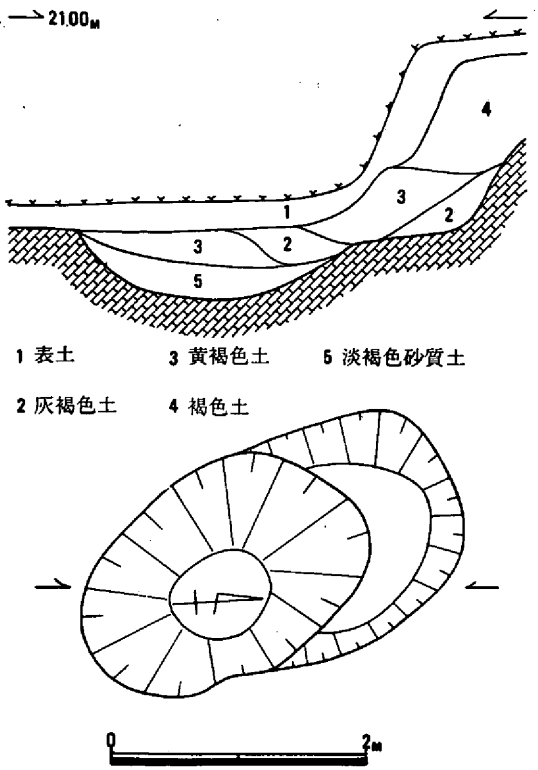
発掘調査を実施したのが夏期の炎天下であったため，この井戸状遺構内には水が認められなかった。ところが，ひとたび雨が降ると遺構内は満水となり，後述する溝 1 方向へ流れるのである。したがって，雨が降った後の発掘調査では，井戸状遺構内の排水を行うのが日課となり，煩わしい作業に感じられた。このような調査中の経験から推察して，使用されていた当時より井戸状遺構の底部からの湧水はなかったと考え，周辺の地下水を集めるのが目的であったと判断した。

溝　1（第 7 図，図版 4）

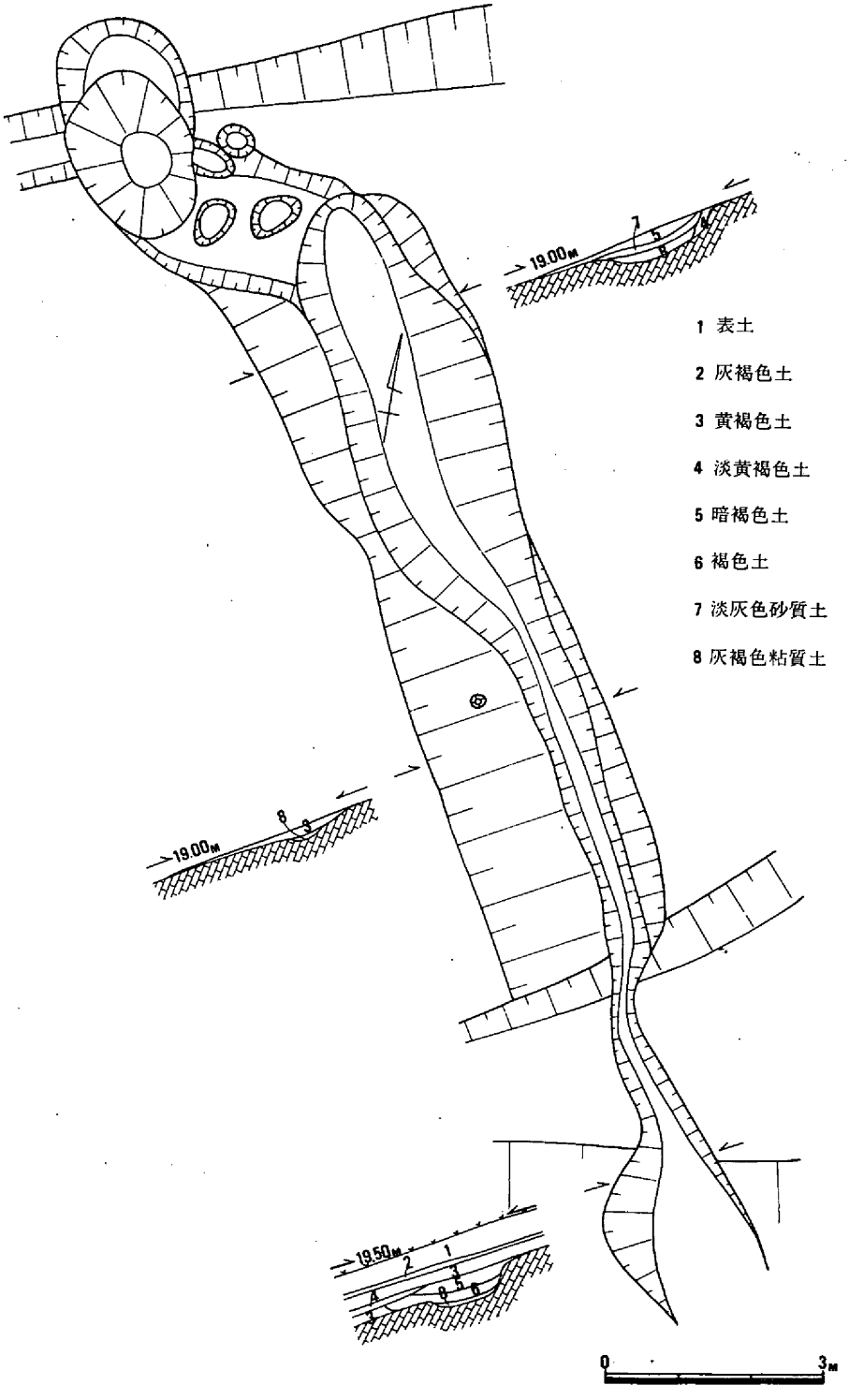
多数の柱穴や土壙を検出した平坦面の東側に存在する。ほぼ南北方向に走る幅の広い溝で，井戸状遺構と連続していた。南端部分は，削平されて部分的に不明である。井戸状遺構に近接した地点の断面は，極めて浅い「U」字形を呈するが，C−D 断面と E−F 断面の地点は，溝内が 2 段になって重なった帯状の土層が認められる。G−H 断面の地点は，土層観察用の畦を残して調査を行ったが，西側法面の立ち上がりが明瞭に把握できなかった。C−D 断面の地点における底部のレベルは，両脇に位置する井戸状遺構に近接した地点や E−F 断面の地点より約 20 cm も低く，中心部分の底部の幅が，E−F 断面の地点で急激に狭くなっている。ところが，G−H 断面の地点へ移行すると，中心部分の底部の幅は再び広くなり，南端では溝そのものの痕跡が不明瞭になる。この溝内の底部には，全体にグライ化した灰褐色粘質土が存在するが，C−D 断面の地点では，灰褐色粘質土の上位に淡灰色砂質土が認められる。

このような状況から判断して，井戸状遺構からオーバーフローした水や周辺の水は，まず C−D 断面の地点に流れ込み，この部分が満水になった後に，さらに地形の低い南端方向へ流れるようになっていたと考える。したがって，C−D 断面の地点には水が絶えず溜っていたことが推定され，底部に堆積した土層の状況からもうなずけることである。

この溝のさらに東側は，多数の柱穴や土壙を検出した西側の平坦面に比してわずかに



第 6 図　井戸状遺構（S＝1/60）



第7図　井戸状遺構・溝1（S＝1/100）

レベルが高くなり，全く柱穴や土壙が存在しなかった。この状況は，この溝自体が集落を隔絶する東側の境界になっていたと考えられるのである。なおこの溝内からは，中世に属すると推定される多量の土器片（第8・9図）が出土している。

出土遺物（第8・9図）

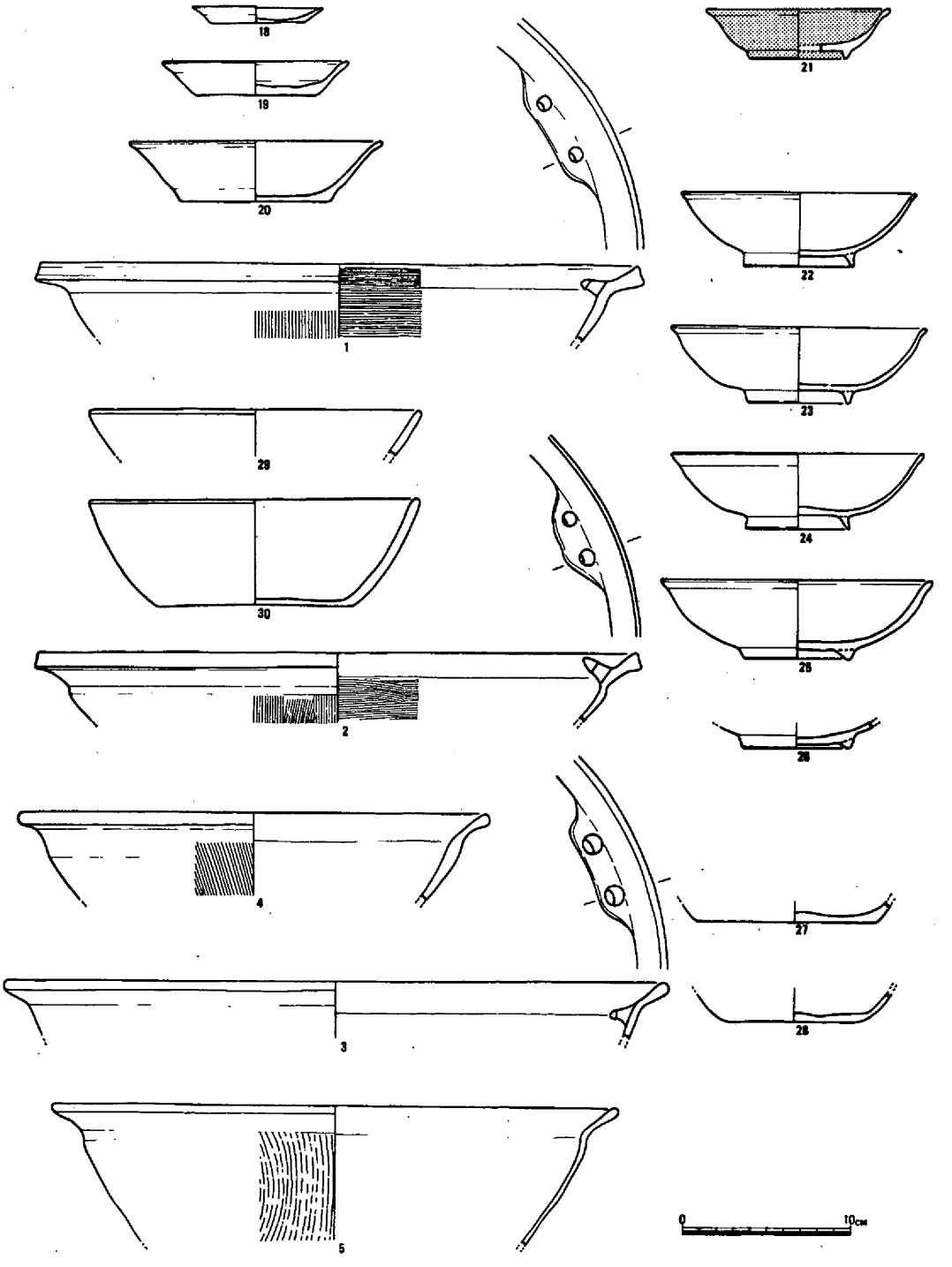
1から3は，内耳を有する比較的口径の大きな土鍋の口縁部破片である。内耳には，口縁端部から胴部方向に向けて刺突した円孔2が対になって存在する。円孔の周囲には，さげづるが着装されていたと推定される痕跡が認められる。胴部は内彎して立ち上がり，頸部で屈曲して口縁端部へ移行する。口縁部の形態には，わずかに拡張して外面に浅い窪みが認められるもの（1・2）と，肥厚して丸く仕上げているもの（3）が存在する。前者の内面には，横方向の細い櫛目が施され，外面には，頸部直下に縦方向の粗い櫛目が認められる。後者は，内外面とも全体になで仕上げを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色または黒褐色を呈している。3の外面には，全体に煤の付着が認められる。

4から9は，土鍋の口縁から胴部の破片である。口縁部や胴部の形態は，前述した内耳を有する土鍋とほとんど同じである。内面の仕上げ手法には，横なでを行っているもの（4～7）と細い櫛目を施しているもの（8・9）が認められる。外面には，いずれも粗い縦または斜め方向の櫛目が存在する。内面の色調は褐色または赤褐色を呈するが，外面には煤の付着が認められ，黒褐色または黒色に変色している。

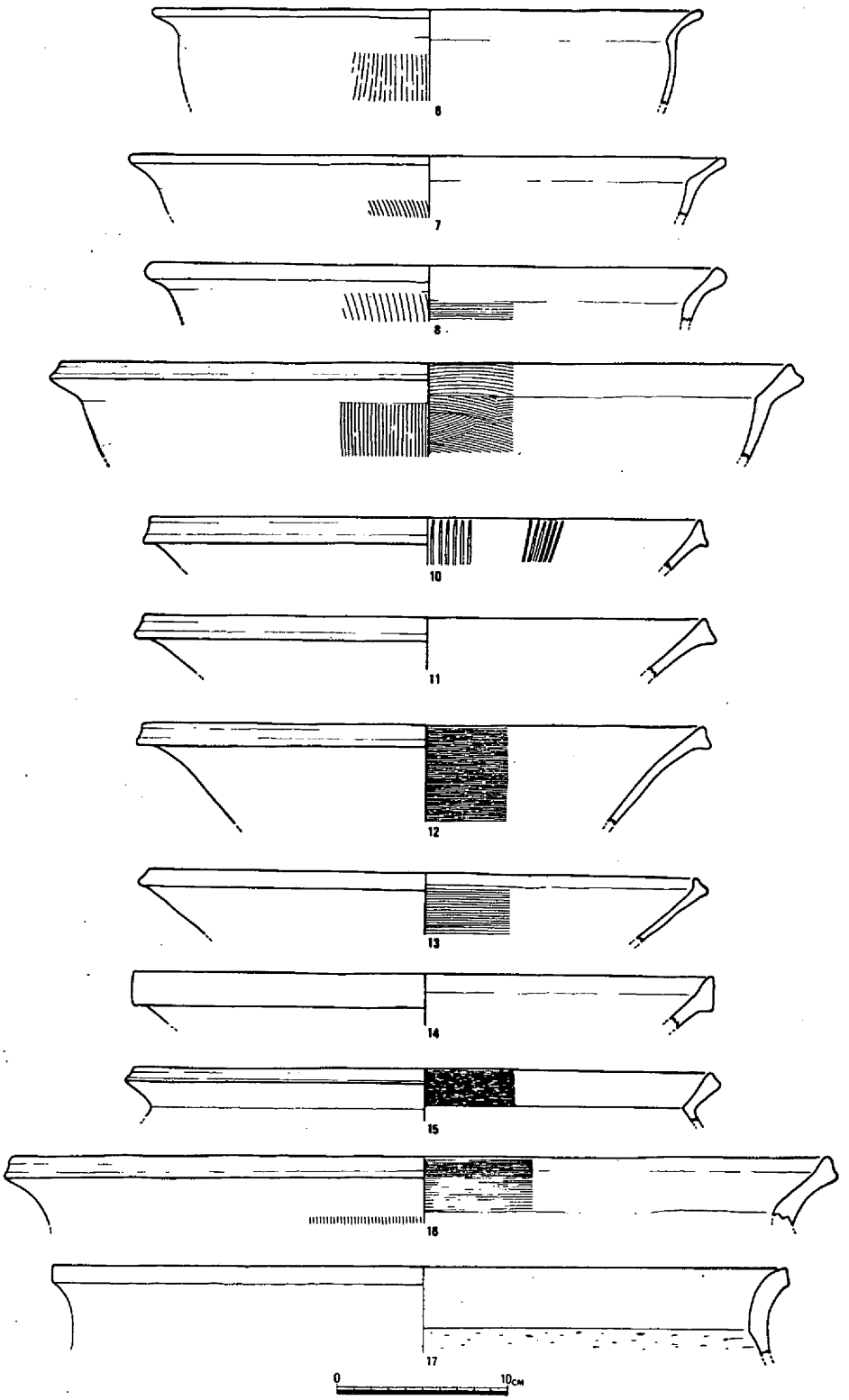
10から14は，鉢形土器の口縁から胴部の破片である。胴部から口縁部にかけて内彎するものが多いが，緩やかに外彎して斜め上方へ立ち上がるもの（12）も認められる。口縁端部はいずれも拡張して，外面に浅い窪みが認められるものが多い。内面には，6条を単位にした条線が放射状に存在するもの（10），なで仕上げのみを行っているもの（11・14），横方向に櫛目を施しているもの（12・13）が認められる。外面は，いずれもなで仕上げを行い，土師質のもの（10）と瓦質のもの（11～14）が存在する。前者は淡褐色を呈するが，後者は瓦質土器特有の灰黒色になっている。

15から17は，甕形土器の口縁部破片である。土鍋や鉢よりも口径が大きく，器壁も厚くなっている。頸部から口縁部の形態には，「く」字状に外反するもの（15）と緩やかに外彎するもの（16・17）がある。胴部や底部は，いずれも欠損して不明である。口縁端部の形態には，わずかに拡張して外面に浅い窪みが認められるもの（15・16）と拡張せずに平坦な面を有するもの（17）が存在する。内面の仕上げ手法には，細い櫛目を施しているもの（15・16）と頸部直下に横方向の篦削りを行っているもの（17）があり，外面は縦方向の粗い櫛目を施しているもの（15・17）と横なでを行っているもの（16）が認められる。この甕形土器の胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で黒褐色または灰黒色を呈している。15の外面全体には，煤の付着が認められる。

18は，土師質の小皿である。全体に歪んだ器形を呈し，最大口径7.8cm・最大器高1.0cmを測る。口縁部は斜め上方へ彎曲して短く立ち上がり，端部の器壁を薄くして丸く仕上げている。内外面とも全体に横なでを施し，底部は回転篦切りを行った後になでている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で淡黄白色を呈している。



第８図　井戸状遺構・溝１出土遺物（１）（S＝1/4）



第9図　井戸状遺構・溝1出土遺物（2）（S＝1/4）

19は，推定口径 11.2 cm・推定器高 2.0 cm を測る土師質の皿である。前述した小皿を全体に大きくした形態になっている。器壁は比較的厚く，内面の底部には凹凸が認められる。成形の手法や胎土・焼成・色調は 18 の小皿と同じである。

20 は，土師質の杯であろう。推定口径 15.2 cm・推定器高 3.6 cm を測る。全体の器形から判断して，皿とすべきかもしれない形態を呈している。口縁端部は，外彎して丸く仕上げている。口縁部や底部の器壁は極めて薄く，横なでを施している。外面の底部には，回転篦切りの痕跡が認められる。胎土・焼成・色調は，前述した 18 と 19 の皿に著しく酷似している。

21 は，白磁の小型高台付碗である。全体の約半分の個体が存在し，口径 10.8 cm・器高 3.0 cm を測る。底部から胴部にかけては器壁が徐々に薄くなりながら内彎して立ち上がり，さらに緩やかに外彎して口縁端部へ移行する。口縁端部は，わずかに肥厚して丸く仕上げている。高台は高さ 0.5cm で，断面が丸みを持った三角形を呈している。器表面は，内外面とも全体に光沢を有するガラス質になっている。胎土には砂粒の少ない良質の粘土を使用し，焼成は良好で灰白色を呈している。

22 から 26 は，土師質の高台を有する椀である。いずれも完形品が存在しないために復元して作図したものであるが，22 の口径 14.0 cm・器高 4.4 cm が最も小さく，25 の口径 16.2 cm・器高 4.7 cm が最も大きくて器壁が厚い。底部から胴部にかけて内彎して立ち上がり，口縁端部はわずかに外彎して丸く仕上げている。高台はいずれも貼り付けたもので，断面が三角形を呈して低いもの（25・26）と薄く仕上げて「ハ」字状に張り出したもの（22・24）が認められる。内外面とも全体に横なでを施し，内面の底部には重ね焼の痕跡が認められる。胎土中には大きな砂粒が少なく，焼成は良好で淡黄白色を呈している。

27 と 28 は，土師質の杯または皿の底部である。内面には凹凸が認められ，外面の底部は回転篦切りを行った後になで仕上げを施している。胎土・焼成・色調は，前述した土師質の高台を有する椀と同じである。

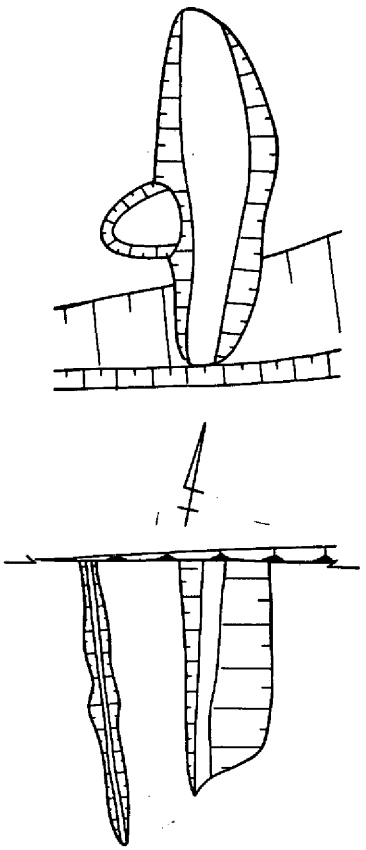
29 と 30 は，瓦質の杯である。30 の杯の計測値は，口径 20.0 cm・器高 6.4 cm を測る。底部の器壁は，口縁から胴部に比して薄くなっている。胴部から口縁部にかけて緩やかに内彎して立ち上がり，口縁端部は丸く仕上げている。内外面とも全体に横なでを施し，焼成は良好である。胎土中には細かい砂粒を多く含み，内面は褐色を呈するが，外面は瓦質土器特有の灰黒色になっている。

溝　2　（第10図，図版 3）

第 1 地点調査区の南西端に存在する。地形の低い南側地点の状況が不明であったため，調査区を約 4.50 m × 5.00 m の範囲だけ拡張して調査を行った。この溝の北側と中央部分は著しく削平されて不明であるが，南側の拡張地点では 2 本の溝に枝分れしている。溝の方向はほぼ南北方向に走り，前述した溝 1 の方向と平行している。検出面での最大幅は 1.60 m を測るが，枝分れした西側の溝は極めて狭くなっている。断面観察用の畦を残して調査を行った結果，断面が「U」字形を呈する溝内には褐色土が認められ，溝の上位には黄褐色土と灰褐色土が堆積していた。

この溝のさらに西側には柱穴が存在しないようである。しかも，多数の柱穴や土壙を検出した東側

の平坦面に比して，溝より西側のレベルが高くなっている。この溝は平坦面の東側に位置する溝1と同様に，集落を隔絶する西側の境界になっていたと考えられる。なお溝内からは，中世に属すると推定される土器片（第11図）がわずかに出土している。



1 表土　　3 黄褐色土

2 灰褐色土　　4 褐色土

0　3m

第10図　溝2（S＝1/100）

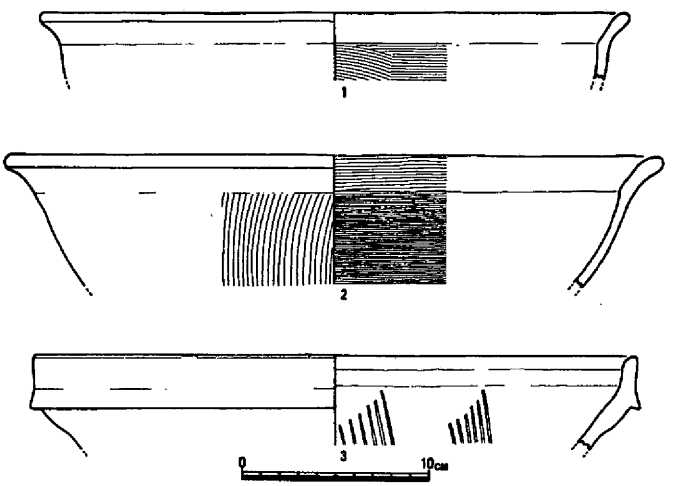
出土遺物（第11図）

1と2は，土鍋の口縁から胴部の破片である。斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は，肥厚して丸く仕上げている。内面には横方向に施した櫛目が認められるが，2の頸部直下では極めて細くなっている。1の外面はなで仕上げを行っているが，2の外面には縦方向の粗い櫛目が存在する。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で黒色または黒褐色を呈している。2の外面には全体に煤の付着が認められ，黒色または黒褐色に変色している。

3は，備前焼の擂鉢である。口縁端部は上下に拡張して横なでを施している。内面には，6条を単位にした条線が放射状に認められる。胎土中には砂粒を含むが量は少なく，焼成は良好で備前焼特有の光沢を有する赤褐色を呈している。

溝　3（第12図）

調査区の南東端に存在する。南側は急斜面になっているため，調査ができなかった。地形の高い北側は，削平されて不



第11図　溝2出土遺物（S＝1/4）

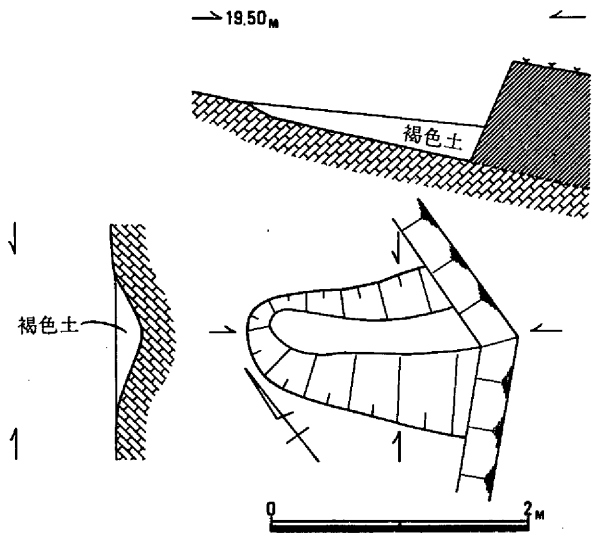
明である。底面が地形と同じように南側へ傾斜しているため，この遺構は溝であると判断した。断面は浅い「U」字形を呈し，内部には褐色土が認められた。内部を精査したが，遺物は検出できなかった。

溝 4（第13図）

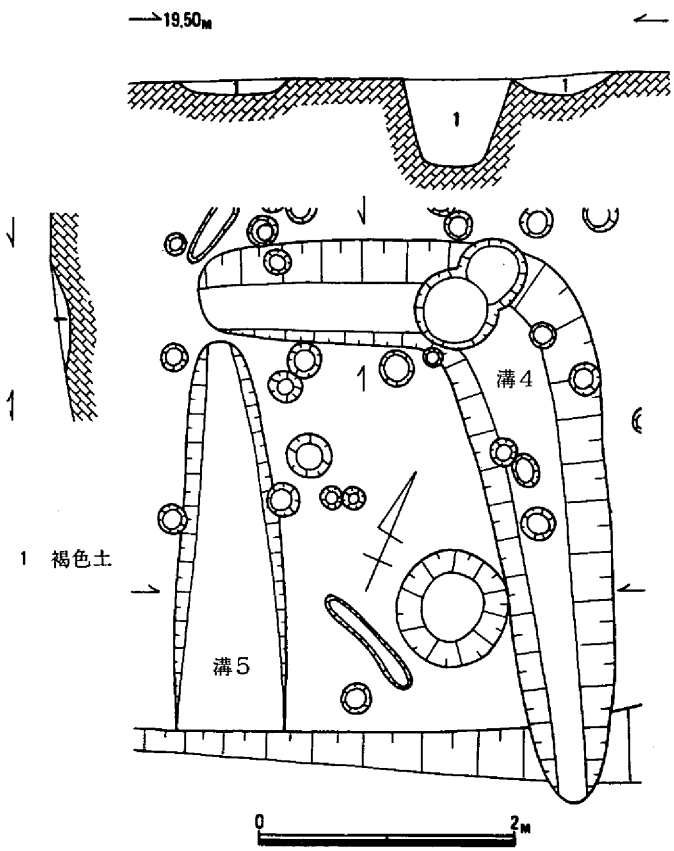
溝1の西側に多数の柱穴と重複して存在する溝で，平面形は「L」字状を呈している。西側と地形の低い南側は，削平されて不明である。検出面での最大幅は，屈曲地点で計測した1.18 m である。断面は極めて浅い「U」字形を呈し，内部に褐色土が認められた。平面形が屈曲した「L」字状を呈していることから，この溝は建物の雨落溝であった可能性が強い。重複した柱穴には，この溝より古い時期のものと新しい時期のものが存在した。

溝 5（第13図）

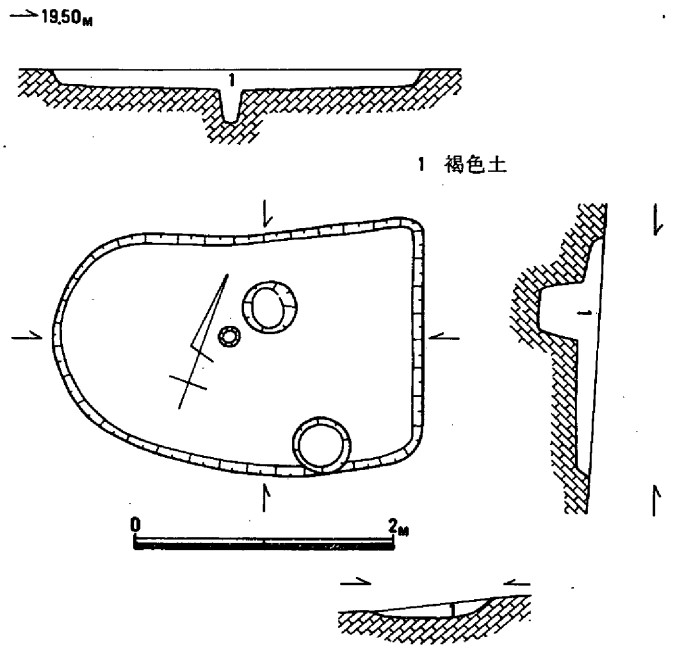
溝1と平行する方向に存在する溝で，北端部分が溝4と接している。残存している総延長は約3 mを測り，地形の低い南側へ移行するにしたがって底部の幅が広くなっている。断面は浅い「U」字形を呈し，内部に褐色土が認められた。この溝は残



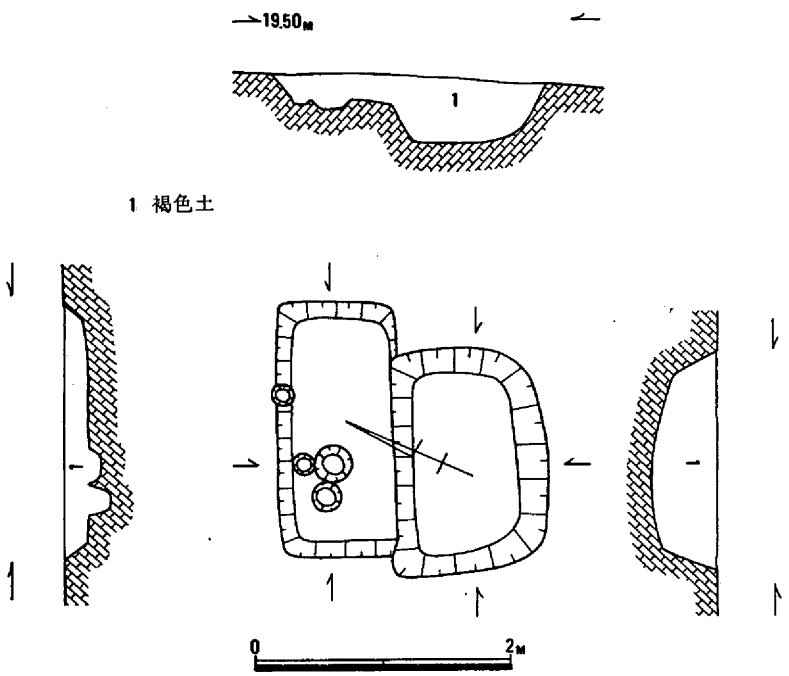
第12図　溝3（S＝1/60）



第13図　溝4・溝5（S＝1/60）



第14図　土壙1（S＝1/60）



第15図　土壙2・土壙3（S＝1/60）

存状態が極めて悪いこともあって，性格等は不明である。

土 壙 1

（第14図，図版3）

調査区のほぼ中央に存在する比較的大きな土壙である。北側と東側の壁面は直線状になっているが，南側から西側にかけては彎曲した円孤を描いている。検出面での計測値は，長軸方向2.85m・短軸方向1.85mを測る。検出面から底面までは，最も深い地点で17cmと極めて浅くなっている。底面の3箇所には柱穴が認められたが，この土壙に伴うものではない。内部からは中世に属すると推定される土器片が出土しているが，小破片であるために図化することができなかった。この土壙は，規模が大きいにもかかわらず底面まで非常に浅く，性格等は不明である。

土　壙　2　（第15図，図版３・5-2）

土壙１と溝２の中間に存在する。平面形は隅丸長方形を呈し，検出面で長軸2.02m・短軸0.90ｍを測る。検出面から底面までの深さは最も深い地点で18㎝を測り，底面はほぼ水平になっている。底面と壁面の４箇所には柱穴が存在するが，この土壙に伴うものではない。内部を精査したが，遺物は検出できなかった。この土壙の性格等は不明である。

土　壙　3　（第15図，図版３・5-2）

土壙２の南側に接して存在する土壙である。平面形は，土壙２と同様に隅丸長方形を呈している。検出面での計測値は，長軸1.75ｍ・短軸1.20ｍを測る。底面までの深さは最も深い地点で50㎝を測り，土壙１や土壙２よりも深くなっている。この土壙は，土壙２の南側に位置する壁面を切っているから，土壙２よりも後につくられたものである。土壙の内部からは，中世に属すると推定される土鍋の口縁部破片（第16図３）が出土している。この土壙の性格等は不明である。

以上に説明した土壙以外にも小規模な土壙状のものが存在するが，柱穴をやや大きくした形態を呈するものや自然にできた窪みである可能性が強いものが多いため，説明を加えるのを省略した。なお多数の柱穴や説明を加えなかった土壙からも土器片（第16図）が出土したので，次に掲載したい。

出土遺物　（第16図）

１から６は，土鍋の口縁から胴部の破片である。胴部は内彎して立ち上がり，頸部で屈曲して口縁端部へ移行する。口縁端部の形態には，肥厚して丸く仕上げるもの（１～４）と外面に浅い窪みが認められるもの（５・６）が存在する。内面の仕上げ手法として，櫛目が施されているもの（１・４～６）と横なでを行っているもの（２・３）が認められる。外面の仕上げ方法として，頸部直下に縦方向の櫛目が施されているもの（４・６）となで仕上げを行っているもの（１～３・５）が存在する。４の胴部外面には指頭圧痕が認められ，器表面が凸凹になっている。胎土中には細かい砂粒を多く含んで焼成は良好であるが，土師質のもの（１・２・５・６）と瓦質のもの（３・４）が存在している。これらの土鍋の外面には，全体に煤の付着が認められるものが比較的多い。

７は，鉢形土器の口縁から胴部にかけての破片である。内彎しながら斜め上方へ立ち上がった口縁端部は，わずかに拡張して外面に浅い窪みが認められる。内面には細い櫛目を施した後に，６条を単位にした条線を放射状に巡らせている。外面の頸部直下には，粗い縦方向の櫛目を施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で黒褐色を呈している。

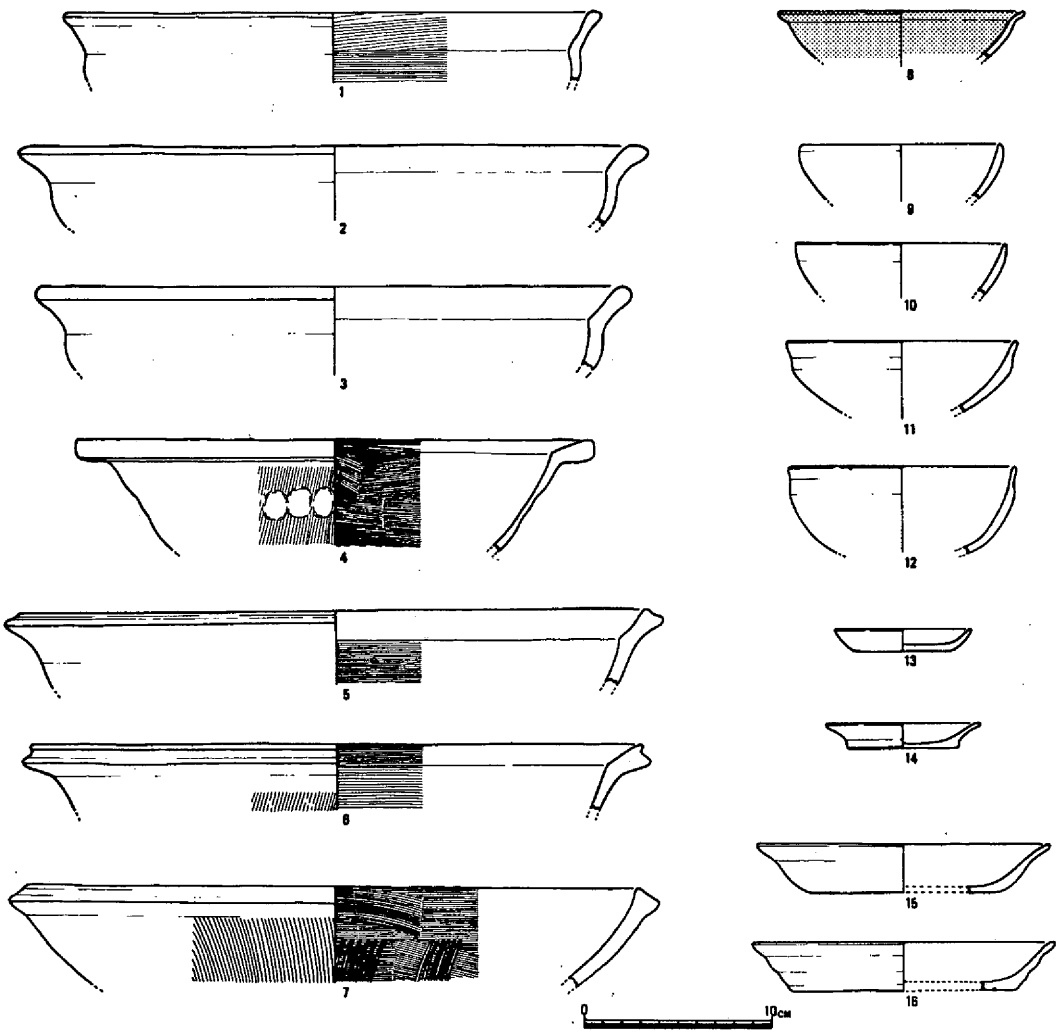
８は，白磁の高台付碗の破片である。口縁は外彎して斜め上方へ立ち上がり，端部を丸く仕上げている。器表面は，内外面とも全体に光沢を有するガラス質になっている。胎土には砂粒の少ない良質の粘土を使用している。焼成は良好で淡黄白色を呈している。

９から12は，高台を有しない土師質の椀であるが，いずれも底部を欠損している。この椀の器形は，底部を大きく窪ませた畿内で出土している「へそ皿」と呼ばれるものに類似するであろう。胴部から口縁部にかけては内彎して立ち上がるが，口縁端部は肥厚するもの（９）と器壁が著しく薄くな

るもの（11・12）が存在する。いずれも内外面とも横なでを施し，全体に淡黄白色を呈している。胎土中には砂粒が少なく，焼成は極めて良好である。

13と14は，土師質の小皿である。前者の口縁部は内彎して短く立ち上がるが，後者は端部の器壁が著しく薄くなって大きく外彎している。両者とも全体に横なでを施し，底部は回転篦切りを行っている。胎土中には細かい砂粒を比較的多く含み，焼成は良好であるが，前者は赤褐色を呈し，後者は淡黄白色になっている。

15と16は，底部を欠損した口径の大きい土師質の皿である。口縁部は端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなり，外彎して斜め上方へ立ち上がる。内外面とも全体に横なでを施し，16の外面には横なでによって生じた凹凸が認められる。どちらも胎土中には砂粒が少なく，焼成は良好で淡黄白色を呈している。



第16図　柱穴・土壙出土遺物（S＝1/4）

遺構に伴わない出土遺物（第17・18・19・20・21図）

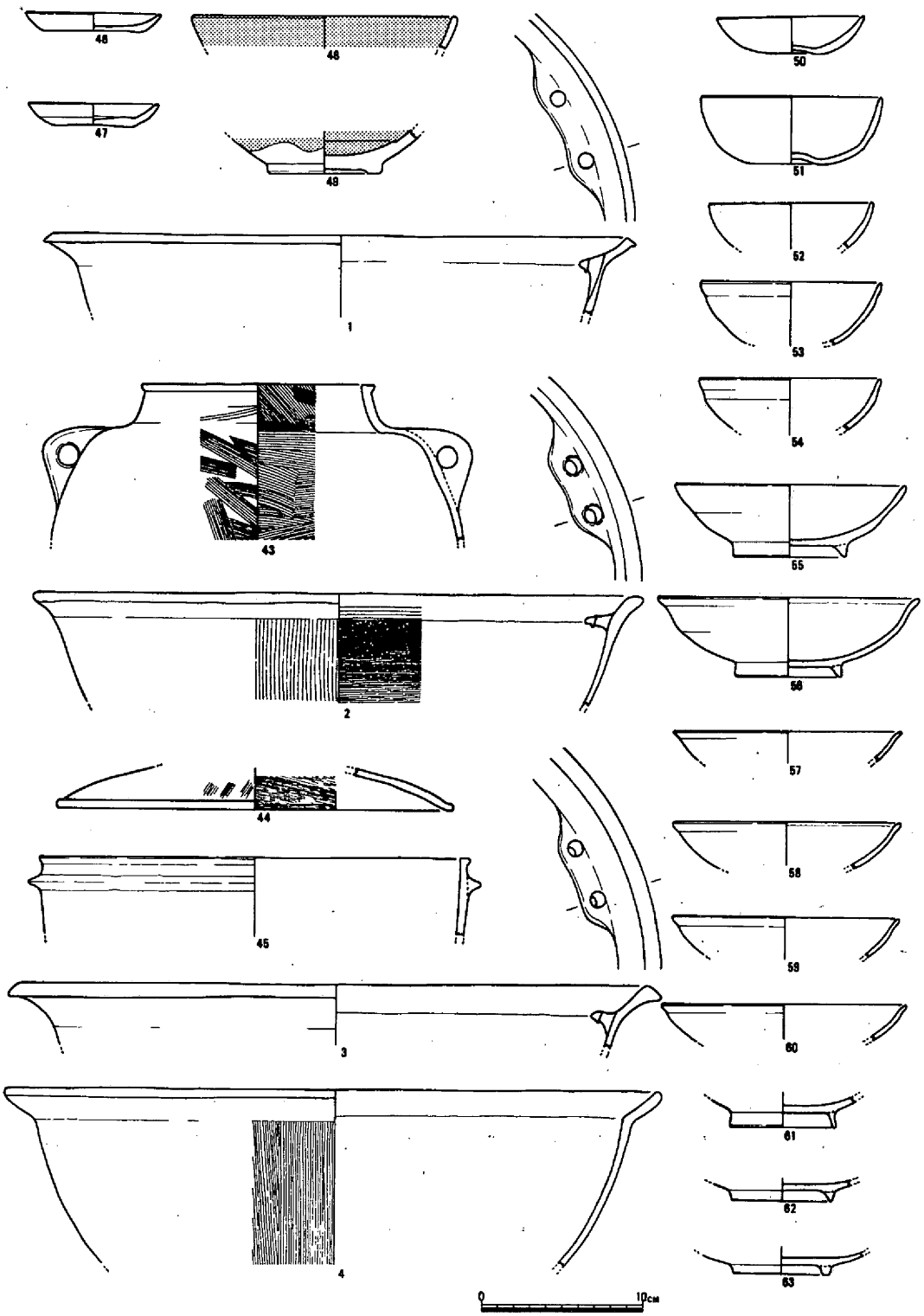
1から3は，内耳を有する比較的口径が大きな土鍋の口縁から胴部の破片である。内耳は頸部内面の屈曲部分に貼り付けたもので，口縁端部から胴部方向へ刺突した対になる円孔が存在する。円孔の周囲には磨滅した痕跡が認められ，さげづるが着装されていたことが想起される。胴部は肥厚しながら内彎して立ち上がり，頸部で屈曲して口縁端部へ移行する。口縁端部の形態には，わずかに拡張して外面に平坦な面を有するもの（1・3）と肥厚して丸く仕上げているもの（2）が存在する。前者は内外面ともなで仕上げを行っているが，後者の内面には横方向の細い櫛目を施し，外面には頸部直下に縦方向の粗い櫛目が認められる。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。この3個体の土鍋は，内面に有機物の付着が認められ，外面に煤が存在するから，食物の煮炊に使用されたことがうかがわれ，全体の色調が黒色または黒褐色に変色している。

4から30は，土鍋の口縁から胴部の破片である。口縁部や胴部の形態は，前述した内耳を有する土鍋に酷似し，ほとんど変化が認められない。胴部は内彎して立ち上がり，頸部で屈曲して口縁端部へ移行する。口縁端部の形態には，内彎して端部を丸く仕上げているもの（4～13），頸部からほぼ直線的に斜め上方へ張り出して端部を丸く仕上げているもの（14～16），斜め上方へ張り出した端部が瘤状に著しく肥厚しているもの（17・30），頸部から肥厚しながら斜め上方へ張り出した端部に丸みを持った面を有するもの（18～20），胴部に比して口縁部の器壁が厚くなって外彎するもの（22～24），屈曲した頸部から著しく肥厚しながら斜め上方へ張り出した端部が拡張して外面に浅い窪みを有するもの（28・29）が認められる。内面の仕上げ手法には，横または斜め方向の櫛目を施しているもの（4・6・8・13・14・22・28）となでを行っているものがあり，指頭圧痕が顕著に認められるもの（6・7・14）も存在する。この土鍋の胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で外面に煤の付着が認められるものが多く，褐色または黒褐色を呈している。30の土鍋は，瓦質で内外面とも灰黒色を呈している。後述する支脚（38～42）は，これらの土鍋に伴うであろう。

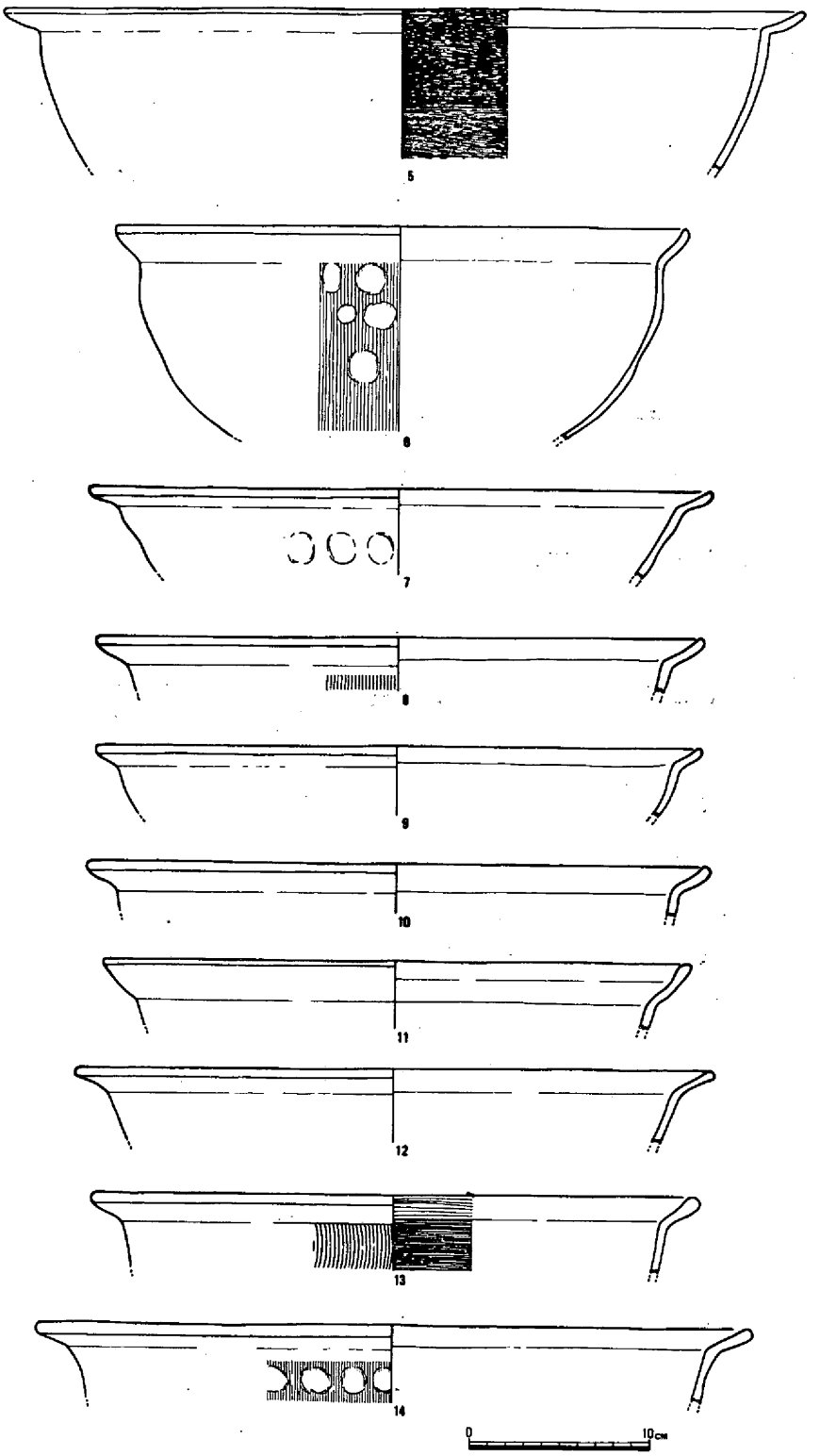
31は，大甕の口縁から胴部の破片である。胴部の器壁は肥厚しながらほぼ直立し，頸部で斜め上方へ鋭く屈曲する。口縁端部の形態は，頸部よりも器壁が薄くなって丸みを持った面を有する。口縁部は内外面とも全体に横なでを行っている。胴部の内面には頸部直下から横方向の粗い櫛目が認められるが，外面はなでを行っているだけである。

32は，口径の大きな甕または土鍋の口縁部破片である。頸部で屈曲して斜め上方へ大きく張り出した口縁端部には，拡張して外面に浅い窪みが認められる。内面の口縁部には横方向の細い櫛目を施し，外面の頸部直下には斜め方向の粗い櫛目が認められる。内面は黒褐色を呈するが，外面は煤が付着して黒色に変色している。

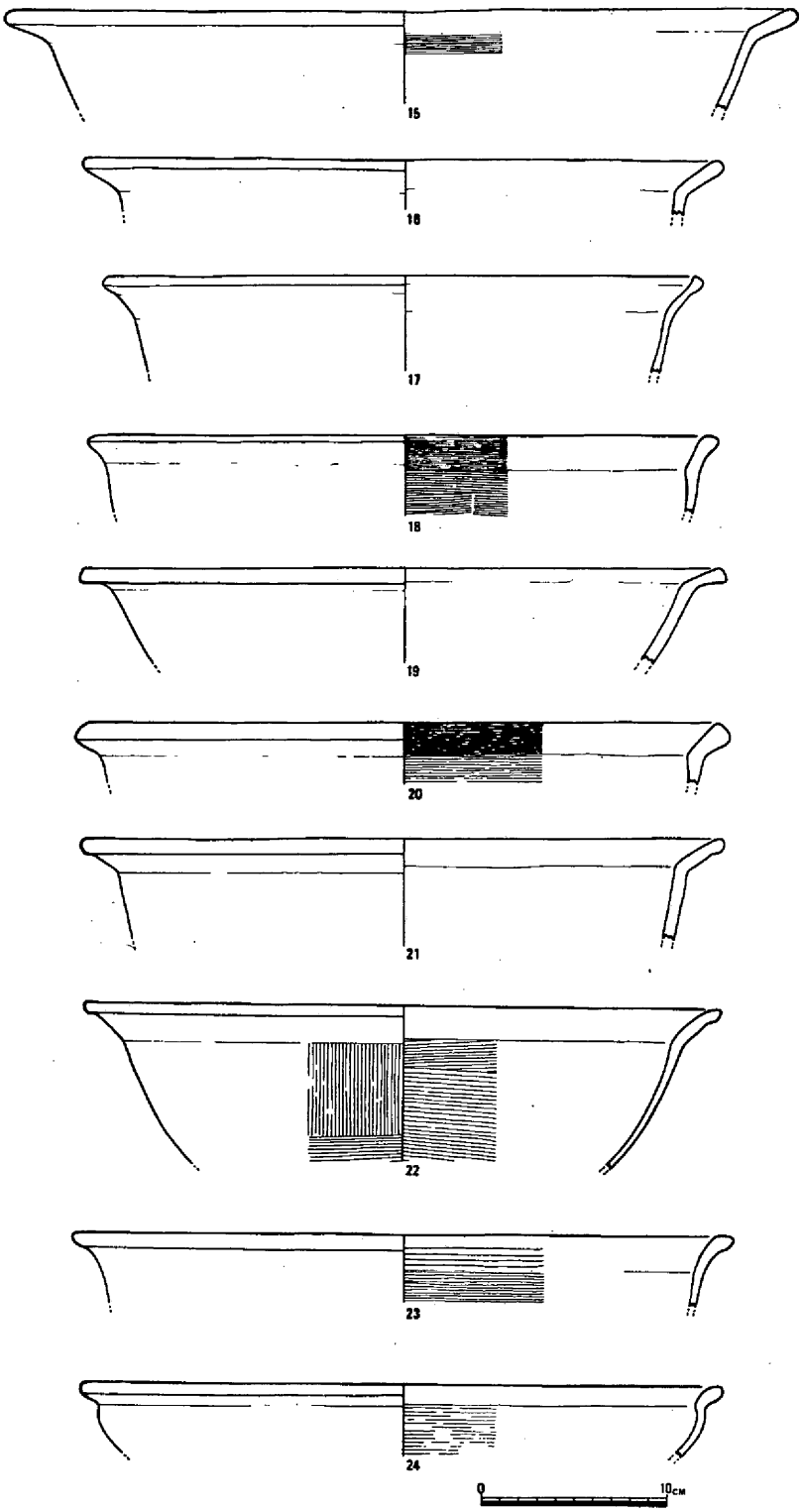
33は，口縁部の器壁が極めて厚い甕形土器の口縁から胴部の破片である。胴部は肥厚しながら内彎して立ち上がり，頸部で「く」字状に外反して口縁端部へ移行する。口縁端部は，拡張して外面に浅い窪みが認められる。口縁部と胴部の内面は横なでを行っているが，外面の頸部直下には格子目の叩き痕跡が顕著である。胎土中には砂粒が少なく，焼成は良好で全体に黒褐色を呈している。



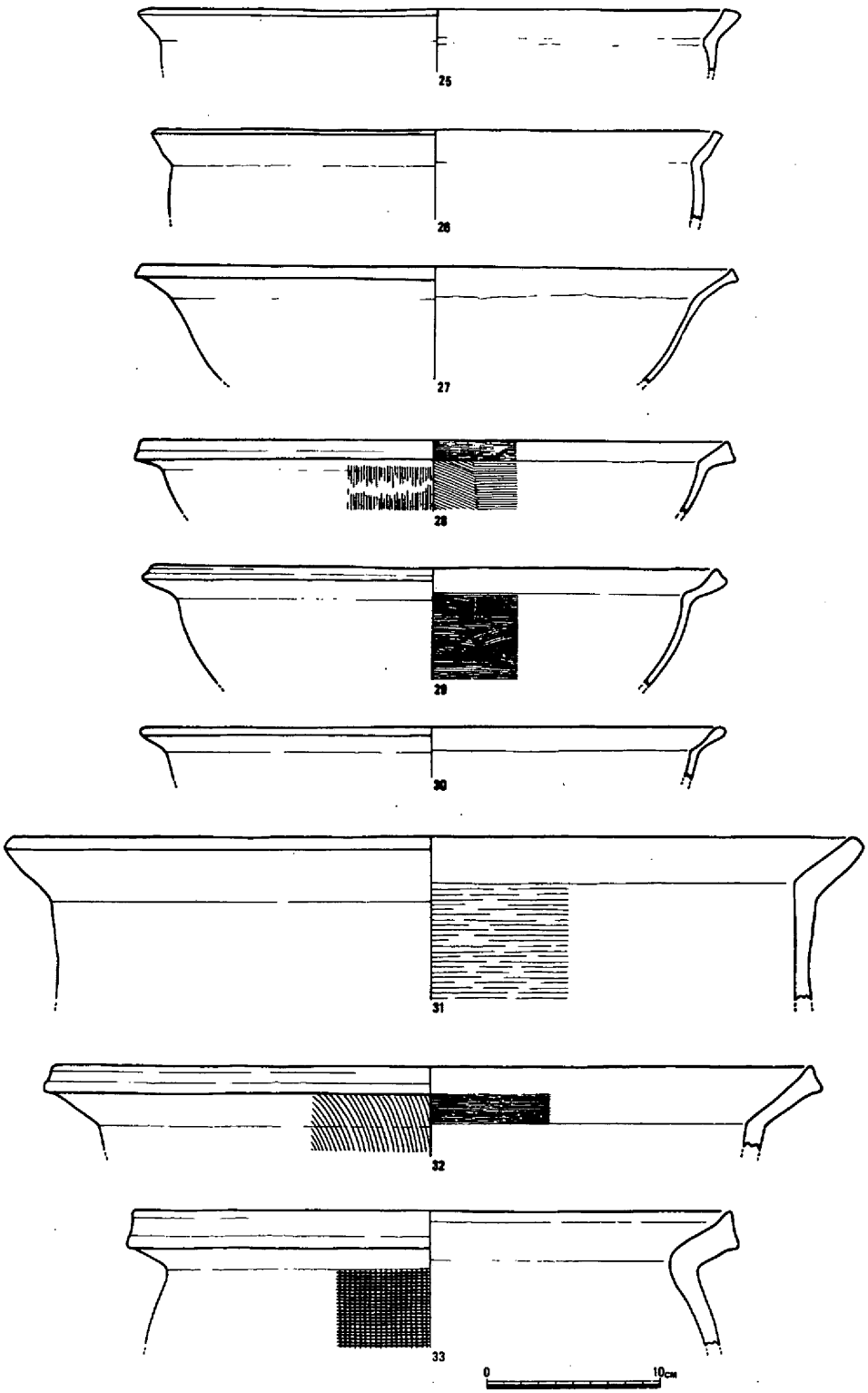
第17図　第1地点の遺構に伴わない出土遺物（1）（S＝1/4）



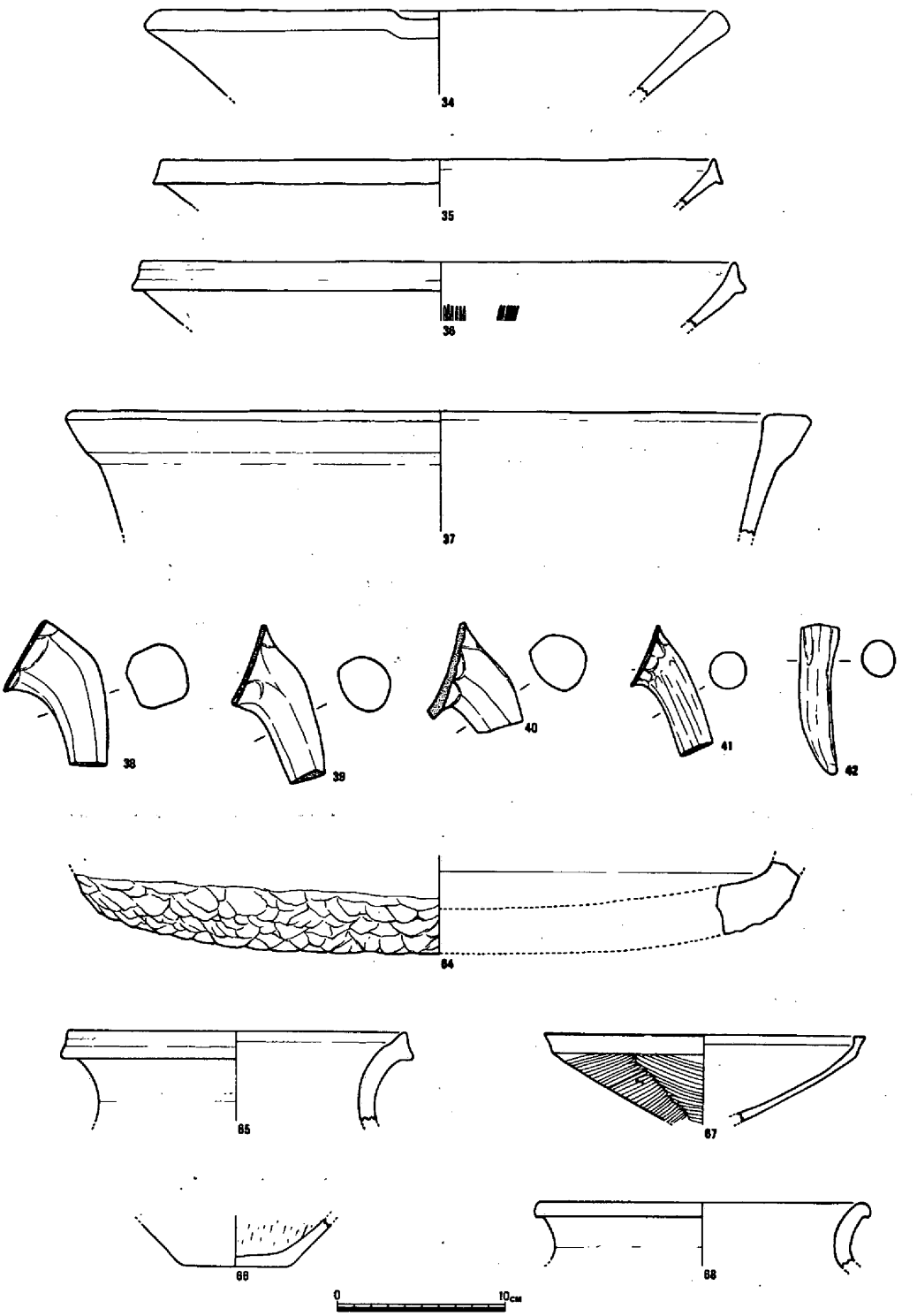
第18図　第1地点の遺構に伴わない出土遺物（2）（S＝1/4）



第19図　第1地点の遺構に伴わない出土遺物（3）（S＝1/4）



第20図　第1地点の遺構に伴わない出土遺物（4）（S＝1/4）



第21図　第1地点の遺構に伴わない出土遺物（5）（S＝1/4）

34は，鉢形土器の口縁から胴部の破片で，幅約5.0㎝を測る片口が存在する。肥厚しながら斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は，拡張せずに丸く仕上げている。内外面とも全体になで仕上げを行い，明るい褐色を呈している。

35と36も，鉢形土器の口縁から胴部の破片である。口縁端部は拡張して，外面に浅い窪みが認められる。内外面とも全体になで仕上げを行い，36の内面には6条を単位にした条線を放射状に施している。35は土師質で褐色を呈するが，36は瓦質で灰黒色になっている。どちらも胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。

37は，口径が大きくて器壁の厚い火鉢の口縁部破片である。口縁端部は外方向へ幅広く拡張して，上位に平坦な面が認められる。内外面とも全体に横なでを行い，内面の口縁部はわずかに内彎している。胎土中には比較的大きな砂粒を多量に含み，焼成は良好で赤褐色を呈している。

38から42は，土鍋の支脚である。胴部との接続部分には指頭圧痕を有し，周囲の表面が凸凹になっている（38～41）。端部はわずかに彎曲して丸く仕上げている（42）。表面全体になでを施し，鈍い稜線が認められて断面が正円形になっていない。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色または赤褐色を呈しているが，二次的な焼成で黒色に変色しているものも認められる。

43は，土師質の土釜である。底部は欠損して不明であるが，丸底であることが推定され，胴部から底部にかけて球形を呈するであろう。口縁部の器壁は胴部に比して厚く，頸部から内傾して立ち上がる。口縁端部は外方向へ拡張し，上位に平坦な面が認められる。外面の肩部には，2箇所に円孔を有する貼り付けの把手が存在する。円孔の周囲には磨滅した痕跡が認められ，さげづるが着装されていたことが想起される。外面胴部のほぼ中央部には，貼り付けの鍔がめぐらされていたらしく，剝離した痕跡が残存している。内面の全体には，粗い櫛目が顕著に認められる。外面の口縁部と把手はなでを行い，胴部には交叉する斜め方向の櫛目が施されている。胎土中には砂粒が少なく，焼成は良好で全体に黒褐色を呈している。

44は，土師質の蓋形土器の破片である。口縁端部は，屈曲して横方向に短く張り出している。内外面とも細い櫛目の上面をなでている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で淡黄白色を呈している。

45は，土師質の羽釜の口縁部破片である。口縁端部は外方向へ拡張して，上位に平坦な面を有する。口縁端部外面の下位には，断面が三角形を呈する貼り付けの鍔がめぐらされている。内外面とも全体に横なでを施し，焼成は良好である。内面は淡黄白色を呈するが，外面の鍔より下位には煤の付着が認められ，黒色に変色している。

46と47は，土師質の小皿である。前者は口径8.2㎝・器高1.1㎝を測る。後者は口径7.8㎝器高1.4㎝を測る。わずかに内彎して斜め上方へ短く立ち上がった口縁の端部は，器壁が薄くなって丸く仕上げている。内外面とも横なでを施し，底部は回転篦切りを行っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で淡黄白色を呈している。

48は，青磁碗の口縁部破片である。内彎して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は，拡張せずに丸く仕上げている。内外面とも器表面は光沢のあるガラス質になって，細かい亀甲状を呈したひび割れ

が認められる。胎土には白色の良質粘土を使用し，焼成は良好で全体に淡青色を呈している。

49は，白磁碗の底部破片である。底部には低くて厚い高台が存在する。胴部は内彎して立ち上がり，内面の下位に段状を呈する稜線が巡らされている。口縁部は欠損して不明であるが，端部には粘土を貼り付けて拡張したものが存在するであろう。内面全体と外面の胴部には，光沢のあるガラス質の釉薬が認められるが，外面の底部には存在しない。胎土には砂粒の少ない良質の粘土を使用し，焼成は良好で灰白色を呈している。

50から54は，高台を有しない土師質の椀である。底部から口縁部にかけて内彎して立ち上がり，口縁端部は丸く仕上げている。底部は大きく凹ませて畿内で出土している「へそ皿」と呼ばれるものに類似する。内外面とも横なでを施し，外面の器表面に凹凸が認められる。

55から63は，貼り付け高台を有する土師質の椀である。完形品に復原した形に作図できるものは，55と56の2個体のみである。前者は口径14.2cm・器高4.4cmを測り，比較的小型で器壁が厚い。内彎して立ち上がった口縁の端部は，わずかに肥厚して丸く仕上げている。後者は口径16.0cm・器高4.9cmを測り，前者に比して器壁が薄いにもかかわらず全体の器形が大きくなっている。底部から胴部にかけては，前者と同様に内彎して立ち上がるが，口縁端部は短く外彎して丸く仕上げている。両者とも全体に横なでを施し，焼成は良好で内面に重ね焼の痕跡が認められる。胎土中の砂粒は極めて少なく，内外面とも淡黄白色を呈している。底部が観察できる個体の貼り付け高台の形態には，断面が三角形を呈するもの（55・56・62），厚くて台形を呈するもの（63），薄くて高い張り出しを呈するもの（61）が存在する。57から60の口縁部破片は器壁が薄くて口縁の端部が短く外彎しているから，全体の器形は56の比較的口径が大きくて器高が高い形態になるであろう。

64は，材質が砂岩の石製品である。底部の小破片であるため，全体の形が不明である。内面は磨きを施して表面が滑らかになっているが，外面は整形を行った粗い剝離痕跡がそのままの状態で残存し，表面が凸凹になっている。

65は，弥生時代後期に属すると推定される壺形土器の口縁部破片である。緩やかに外彎して立ち上がった口縁の端部は，拡張して外面に浅い窪みが認められる。内外面とも全体に横なでを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で赤褐色を呈している。

66は，弥生時代後期と推定される壺形土器または甕形土器の底部破片である。内面は縦方向の箆削りを行い，外面は縦方向のなでを施している。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。外面は褐色を呈するが，内面は有機物の付着が認められて黒褐色に変色している。

67は，脚部を欠損した弥生時代後期初頭と推定される高杯形土器の破片である。斜め上方へ張り出した杯部は，屈曲して口縁端部へ移行する。口縁端部はわずかに拡張して，上位に平坦な面を有する。杯部の外面には，蜘蛛の巣状を呈した箆磨きの痕跡が顕著に認められる。口縁部は内外面とも横なでを施しているが，杯部の内面は磨滅が著しくて仕上げ手法が不明である。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で全体に褐色を呈している。

68は，須恵器の短頸壺の破片である。外彎して立ち上がった口縁の端部は，瘤状に外方向へ拡張している。内外面とも全体になで仕上げを行い，焼成は良好で青灰色を呈している。

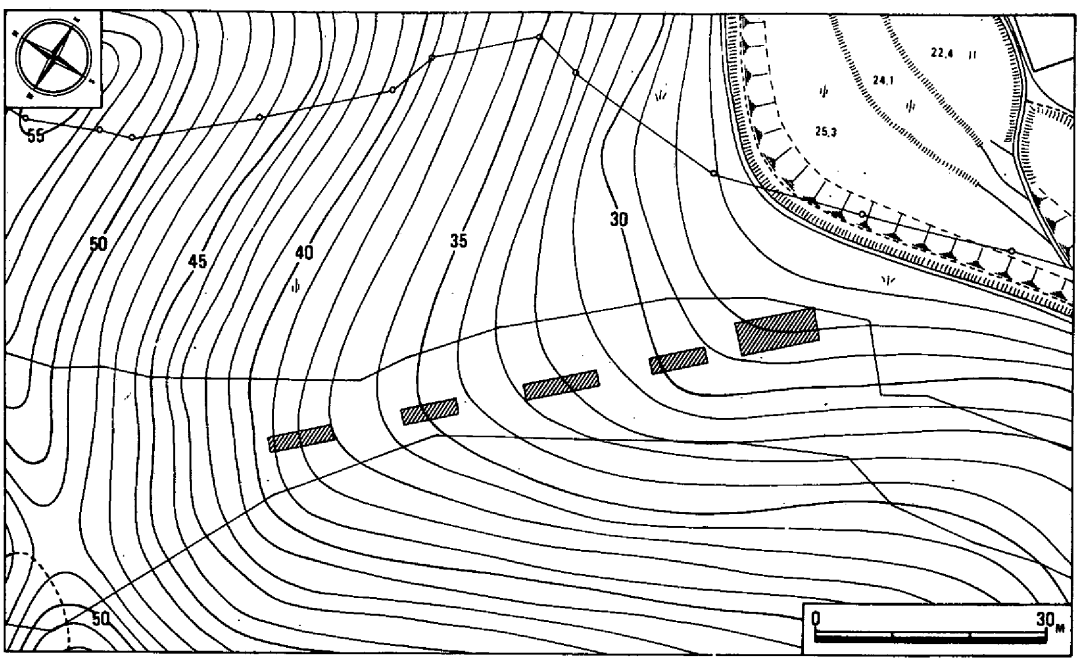
3.　曾原西Ａ遺跡　第２地点

この調査区は，昭和53年度の発掘調査で中世墓を検出した丘陵の西側に位置する。天王山と称される舌状丘陵に連なる尾根の，東に面したなだらかな緩斜面の谷部分である。調査区全体が果樹園になっていたが発掘調査を開始した当初には雑草が密集して生茂り，荒地と化していた。

第３地点の発掘調査が終了した後に，調査を実施する範囲を確認して雑草の除去作業を始めた。その後に調査開始前の全景写真を撮影して，調査区の中央部分を縦貫する幅２ｍ・長さ44ｍのトレンチを設定して，北端の地点から調査を進めた。

北側に位置するトレンチの土層断面を観察すると，一部分に果樹の肥料穴が認められたが，表土の下位に黄褐色を呈する花崗岩の風化土が自然堆積の状態で存在し，人間が手を加えた痕跡や遺物は何も確認できなかった。したがって，トレンチを連続して掘り進めることは意味がないと判断し，トレンチを５箇所の小地区に分断して作業を継続した。

その結果，南端に位置する小地区のトレンチ内から，地山面から浮いた状態で中世に属すると推定される土師質の土器片（第23図）が比較的多量に出土した。また雑誌大の板石も２箇所で検出したが，土器片と同様に地山面から浮いた状態であった。土器片が出土したこともあって，精査したにもかかわらず遺構は検出できなかった。このトレンチの土層断面を観察すると，花崗岩の風化土の間に細かい砂質の土砂が，何層にも帯状を呈して認められ，他の小地区のトレンチと土層断面が著しく異なっていた。土師質の土器片は，細かい砂質の土砂に混在して出土したもので，この地点に細かい砂



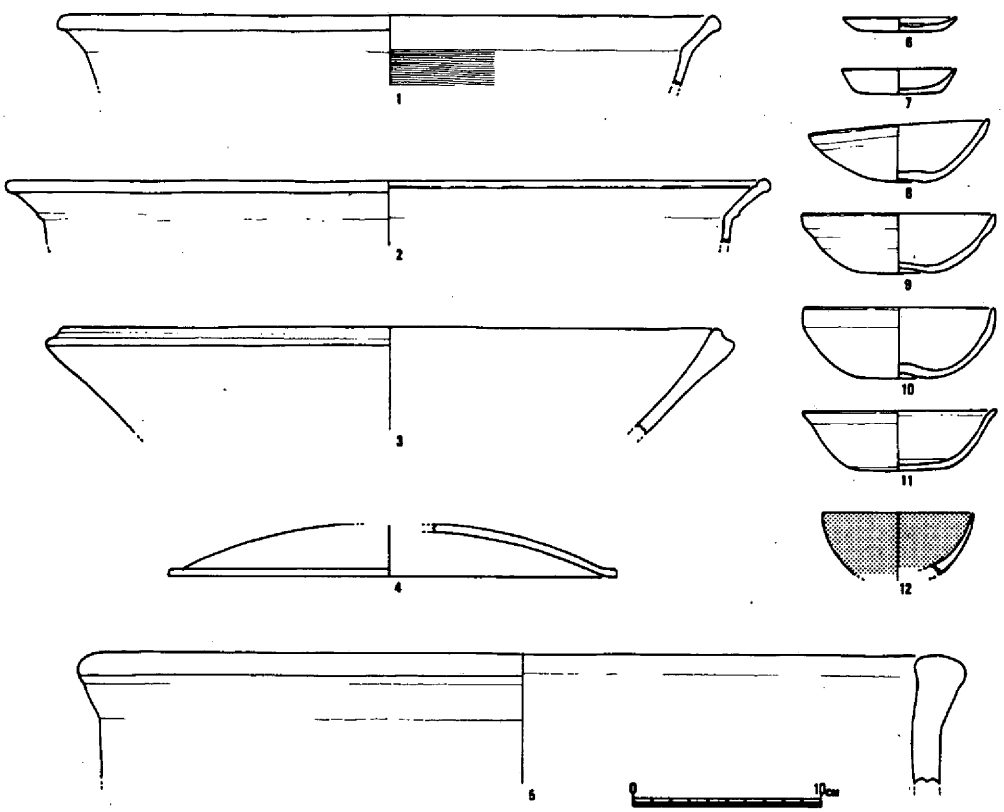
第22図　曾原西Ａ遺跡第２地点トレンチ配置図（Ｓ＝1/1000）

質の土砂とともに二次堆積したものであると判断した。5箇所に分断した小地区のトレンチを完掘した後に，各トレンチの状況写真を撮影して，柱穴群が存在する第1地点拡張部分の調査に着手した。約1箇月が経過して第1地点拡張部分の調査が終了した後に，再び南端に位置する小地区のトレンチを拡張して，土器片が出土した地点を中心に調査を行った。

トレンチの東側で，当初の調査の時と同様に中世に属すると推定される土器片（第23図）が出土したが，遺構は検出できなかった。土器片が出土したのも狭い範囲に限定されたため，わずかに2m×10mの面積を拡張したのみで作業を終了した。

出土遺物（第23図）

1と2は土鍋の口縁部破片である。器壁が極めて薄いにもかかわらず口径が大きなものである。頸部で屈曲して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は，肥厚して丸く仕上げている。2の口縁端部内面には1条の凹線が認められ，外面の頸部直上には突帯状の高まりが存在する。1の内面には横方向に施した細い櫛目が認められるが，2は内外面ともなで仕上げを行っている。どちらも胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。1は全体に淡黄白色で外面に煤の付着が認められるが，2は



第23図　第2地点出土遺物（S＝1/4）

赤褐色を呈している。

3は，鉢形土器の口縁部破片である。内彎して斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は，肥厚して外面に浅い窪みが認められる。内外面とも全体に横なでを行い，胴部の内面に条線は存在しない。内面は淡黄白色を呈するが，外面は赤褐色になっている。

4は，土師質の蓋形土器の破片である。口縁端部は，屈曲して横方向へ短く張り出している。内外面とも全体に横なでを施し，推定口径23.4㎝を測る。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で全体に淡黄白色を呈している。

5は，火鉢の口縁部破片である。器壁は極めて厚く，口径も大きい。口縁端部は肥厚して丸く仕上げているが，底部の器形は不明である。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で全体に赤褐色を呈している。

6は口径6.0㎝・器高0.7㎝を測る土師質の小皿である。内面の底部には凹凸が認められ，口縁端部へ移行するにしたがって器壁が薄くなっている。内外面とも横なでを施し，底部は回転篦切りを行っている。胎土中には砂粒が少なく，焼成は良好で全体に赤褐色を呈している。

7も土師質の小皿であるが，口径6.0㎝・器高1.3㎝と6の小皿に比して器高が高くなっている。口縁端部は器壁が薄くなって斜め上方へ立ち上がる。内外面とも横なでを施しているが，底部は著しく磨滅しているために仕上げ手法が不明である。胎土・焼成・色調は，6の小皿と極めて酷似している。

8から10は，高台を有しない土師質の椀である。この器形の特徴は，口縁部が内彎して立ち上がり，口径に比して器高が高くなって底部を大きく窪ませている。内外面とも全体に横なでを施し，8は左右が対称にならずに歪んでいる。胎土中には砂粒が極めて少なく，焼成は良好で全体に淡黄白色を呈している。この土師質の椀は，畿内で出土している「へそ皿」と呼ばれるものに類似する。

11は，土師質の杯である。口径や器高は，前述した土師質の椀に酷似するが，口縁端部が外彎して立ち上がり，底部に窪みが認められない。内外面とも横なでを施し，底部は回転篦切りを行っている。胎土中には比較的細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で淡黄白色を呈している。

12は，小型白磁碗の口縁から胴部の破片である。底部は欠損しているために不明であるが，おそらく高台を有する器形を呈するであろう。器表面は，内外面とも光沢のあるガラス質になっている。胎土には砂粒が少ない良質の粘土を使用し，全体に灰白色を呈している。焼成は極めて良好で，内外面とも胎土と同じ灰白色になっている。

これらの遺物が出土した第2地点は，昭和53年度の調査で中世墓が検出されて多量の土器片が出土した地点に近接している。ここに図示した遺物も，昭和53年度の調査で出土したものとほぼ同時期に属すると推定されるため，まとめて提示するのが適当であったとも考えられるから，前章に掲載されている多量の出土遺物も参照されたい。

昭和54年度の調査では，第2地点のトレンチをさらに拡張して追求したところ，遺構は何も検出できなかったとはいえ，昭和53年度の調査で確認されていた遺物が散布する地点の西方向に位置する範囲を把握することができたのである。

4.　新池の古墳推定地　第３地点

この調査区は，昭和50年に発行された倉敷市教育委員会の「倉敷市文化財分布図」に記載されている，遺跡番号6-55の「新池古墳」に相当する。

発掘調査に着手した時には雑草の繁茂する畑地が広がり，新池の北側に位置する岸の法面に古墳の石室の石材と思われる巨石が露出していた。

第１地点で行っていたトレンチによる遺構の確認調査を終了した後に，露出した巨石を中心に下草刈りを始めた。その後に調査開始前の遠景写真撮影を行い，幅１ｍ・長さ10ｍのトレンチを設定して調査を進めた。

トレンチの土層断面を観察すると，表土の下位に黄褐色を呈する花崗岩の風化土が自然堆積した状態で存在し，人間が手を加えた痕跡は何も確認できなかった。露出した巨石の周辺には，人頭大の石や人力では移転することができない大きな石を検出したが，いずれも表面が丸く，検出状況にも古墳に伴う石室のような規則性は認められなかった。したがって，古墳の石室の石材と思われた巨石は，自然石であると判断した。トレンチを完掘した後に状況写真を撮影して，この調査区の発掘調査を終了した。なおトレンチ内からは，中世の土器片（第24図）がわずかに出土したが，精査したにもかかわらず遺構は何も検出できなかった。

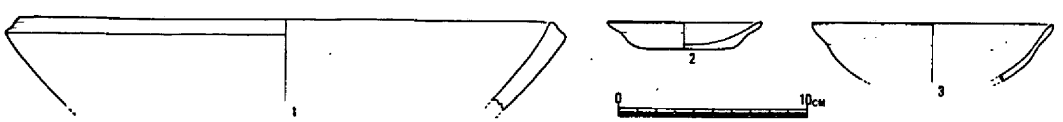
トレンチ出土遺物（第24図）

１は，鉢形土器の口縁部破片である。内彎しながら斜め上方へ立ち上がった口縁の端部は，ほとんど肥厚せずに外面に浅い窪みが認められる。口縁端部は横なでを行っているが，胴部は内外面とも縦なでを施している。胴部の内面に条線は存在しない。

２は，土師質の小皿である。復元口径8.2㎝・器高1.4㎝を測り，全体に横なでを施している。斜め上方へ張り出した口縁端部は，わずかに肥厚して丸く仕上げている。底部は磨滅が著しくて，仕上げ手法が不明である。

３は，高台を有する土師質椀の口縁部破片である。胴部は内彎して斜め上方へ立ち上がり，器壁がわずかに薄くなって口縁端部へ移行する。口縁端部は，肥厚して丸く仕上げている。内外面とも全体に横なでを施し，推定口径13.0㎝を測る。

以上に説明した第３地点出土の土器は，いずれも胎土中に細かい砂粒を多く含め，焼成は良好で明るい褐色を呈している。



第24図　第３地点トレンチ出土遺物（Ｓ＝1/4）

5. 小　結

岡山県南端に位置する児島半島は，中世以前には児島の名の如く瀬戸内海に浮ぶ一離島であった。その後，県下の三大河川の一つである高梁川や，吉備の中枢部を貫流する守足川等の河川の堆積作用と，本土との間の浅海の干拓により陸続きとなり，現在ではこの間に広大な穀倉地帯を形成している。児島半島中央部に所在する曾原は，山が海にせまり低地の少ない児島の中にあってはかなり広い盆地状の地形が広がり，条里制も残る古くより開けた地域で，中世には熊野十二所権現神領の曾原荘，林荘等の荘園が認められる。曾原盆地周辺部の丘陵上には，中世の土器片の散布地がかなり広く確認されており，これらの散布地は荘園と関連のある遺跡の可能性も考えられる。

今回の工事用道路敷の3箇所の調査区は，昭和53年度調査区に隣接する地区で，曾原盆地の西端部にあたる。このうち遺構を検出した曾原西A遺跡第1地点は，曾原天王山中世墓群から尾根一つ南側の同一丘陵上に立地していた。検出した遺構は，標高19m程の調査区南端の緩斜面をカットし，この南側に平坦部を造成して，この面に多数の柱穴，溝，土壙等を設けていた。この平坦部の北東隅には，井戸状のピットをつくり，ここより南側に走る排水状の溝も認められた。さらに西側にも南から北に走る溝を配し，北側の段状部とともに平坦部の柱穴群を区画するが如く配列していた。区画内から最も多く検出した柱穴状の小ピットは，掘立柱建物の柱穴を想定されたが，建て替えによる重複が多くてまとまりが確認できず，規模や配置等については不明瞭であった。

出土遺物は，備前焼，瓦質・土師質の鍋，皿，甕，椀等の各器種が出土している。このうち備前焼の擂鉢は，口縁部がやや肥厚したものが多く認められ，備前焼の編年に対比すればⅢ期あるいはⅣ期にあたり，鎌倉時代後半～室町時代と推定される(註1)。その他の出土遺物も亀山焼，白磁片等の中世を主体とするものが大半を占めている。

以上の様に，今回の工事用道路敷の曾原西A遺跡第1地点の調査からは，用地内の限定された調査区域にもかかわらず丘陵斜面を造成し，溝等により区画を行った中に掘立柱建物を配し，さらに井戸状の遺構を伴う等かなり企画性のある遺構であった。出土遺物が，備前焼，亀山焼等を主体とすることから推察して，検出した建物等は，鎌倉時代から室町時代にわたる中世の村落構成の一単位である農家の構造を端的に示しているものと想定された。

註1　間壁忠彦，間壁葭子「備前焼研究ノート 1～3」『倉敷考古館研究集報』第1号・第2号・第5号　倉敷考古館　1966年，1966年，1968年

(1) 曽原西Ａ遺跡 第1地点調査前全景（南から）

(2) 曽原西Ａ遺跡 第1地点調査後全景（南から）

図版 2

(1) 曽原西A遺跡 第1地点トレンチ全景（北から）

(2) 曽原西A遺跡 第1地点トレンチ土層断面（南東から）

(1) 曽原西A遺跡 第1地点全景（西から）

(2) 曽原西A遺跡 第1地点全景（北東から）

図版 4

(1) 曽原西A遺跡 第1地点東半（北から）

(2) 曽原西A遺跡 第1地点溝1土層断面（北から）

(1) 曽原西Ａ遺跡 第1地点井戸状遺構（北から）

(2) 曽原西Ａ遺跡 第1地点土壙2・3（西から）

図版 6

（1）曽原西Ａ遺跡 第2地点トレンチ全景（南から）

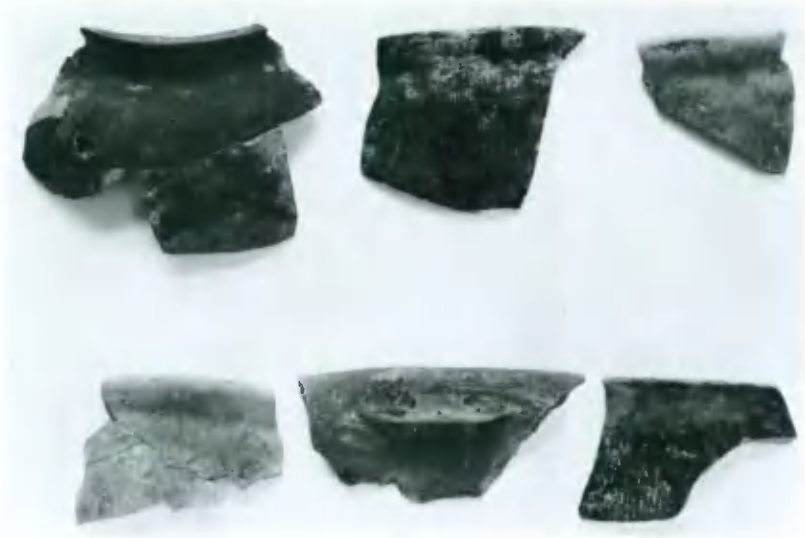
（2）曽原西Ａ遺跡 第2地点トレンチ全景（北から）

(1) 新池の古墳推定地 第3地点調査前全景（南から）

(2) 新池の古墳推定地 第3地点トレンチ状況（南から）

図版 8

(1) 曽原西A遺跡 出土土器 (1)



(2) 曽原西A遺跡 出土土器 (2)

Ⅲ 琴海1号墳

Ⅲ 琴 海 1 号 墳

1. 地理的・歴史的環境

A. 地 理 的 環 境

琴海1号墳（第1・2図）は，児島半島の南端に近い倉敷市阿津1丁目に所在する。この地域は，瀬戸内海に面した風光明媚な地形を呈している。児島の市街地を通り抜けて海岸線を約4km南下すると，著名な瀬戸内海国立公園鷲羽山である。この鷲羽山は，児島半島が瀬戸内海へ嘴状に張り出した場所に相当し，天候の良好な日には島々の間から四国の山並を望むことができる。琴海1号墳は，鷲羽山から北方向1.5kmほど離れた神道山の東麓斜面に位置する。

琴海1号墳が所在する児島半島は，現在では陸続きになっているが，古墳の被葬者たちが活躍した当時は，瀬戸内海に浮かぶ大きな島であった(註1)。風化の進んだ花崗岩質の中国山地を侵食して瀬戸内海へ流出する吉井川，旭川，高梁川の三大河川が，本土との間に存在する海域を次第に陸地化するとともに，近世になって大規模な干拓事業が施行され，現在の地形に変容したのである。また南部の沿岸地帯は，塩田の発達によって遠浅の海岸が埋められ，海岸線がわずかに前進している。

児島半島の地形は，低地に平野部が乏しい丘陵性の山地が連なり，河川としては半島東部の長谷川，中央部の加茂川，西部の郷内川に代表される小河川が認められるにすぎない。半島を形成する山地には，東部の金甲山や中央部の常山などのホルンフェルス化した古生層からなるものと，西部の種松山や龍王山などの花崗岩からなるものが存在する(註2)。花崗岩の地域は風化や侵食が著しく進み，巨岩が丘陵の高所に残存した景観が各地に見られる。

琴海1号墳の所在する地点は，児島半島西部の花崗岩地帯に属している。前面の谷部には民家が不規則に密集して存在し，古墳周辺は斜面をカットした段々畑が造成されている。眼下には瀬戸内海の海岸線が迫り，急峻な斜面地形になっている。

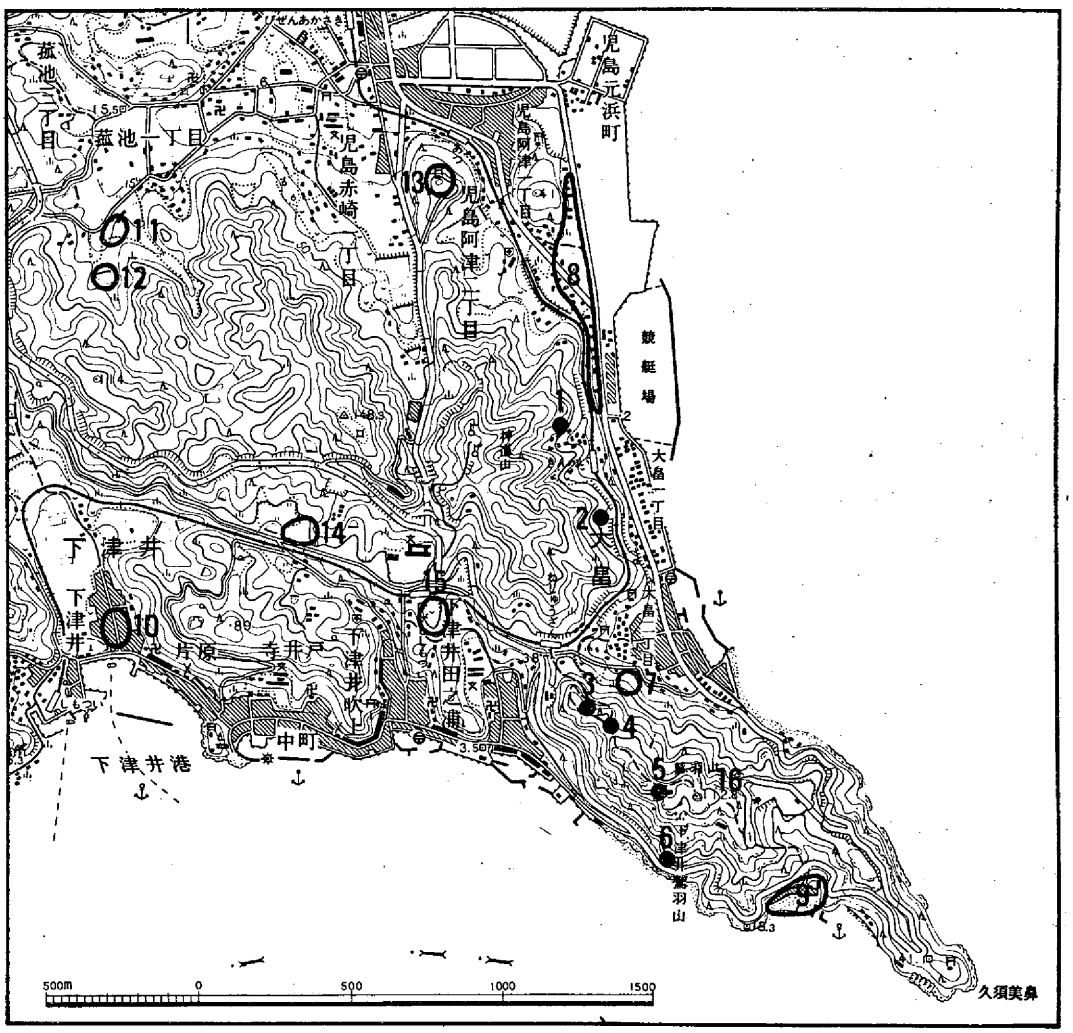
B. 歴 史 的 環 境

琴海1号墳の周辺には，多数の遺跡が分布している(註3)。中世から近世の時期に属するものが多いため，琴海1号墳に関連したものを中心に古墳時代以前の時期に属するものを抽出して記載したのが第1図である。地図の範囲に所在する遺跡を中心にして，時代別に概要を記述したい。

琴海1号墳から約300m離れた地点には，琴海2号墳（第1図2・第2図）が所在する。瀬戸内海に面して開口した横穴式石室を有する円墳であるが，墳丘の盛土や石室の入口付近が破壊されてい

る。石室の規模や立地状況は，琴海1号墳に極めて酷似している。

鷲羽山の尾根と南面する海岸部には，4基の古墳からなる鷲羽山古墳群（第1図3～6）が確認されている。尾根上に位置する1・2・3号墳は，いずれも横穴式石室を有する古墳であるが，著しく破壊されて天井石が残存しない。倉敷市立児島図書館には，出土遺物の一部が保管されている。4号墳は箱式石棺を有する古墳であるが，県道工事によって消滅したため詳細は不明である。



第1図　琴海1号墳周辺遺跡分布図（S＝1/25000）

1	**琴海1号墳**	2	琴海2号墳	3	鷲羽山1号墳	4	鷲羽山2号墳
5	鷲羽山3号墳	6	鷲羽山4号墳	7	鷲羽山東麓古墳群	8	阿津走出遺跡
9	大浜遺跡	10	古下津井遺跡	11	孤池遺跡	12	孤池越遺跡
13	赤崎新庄八幡宮遺跡	14	吹上山田遺跡	15	吹上トンコ山遺跡	16	鷲羽山遺跡

鷲羽山の東麓斜面に位置する鷲羽山東麓古墳群（第1図7）は，横穴式石室を有する古墳1基と箱式石棺を有する古墳2基が存在したという。現地を踏査した結果，横穴式石室の古墳は民家の脇に著しく破壊されて残存していたが，箱式石棺の古墳は精査したにもかかわらず確認することができなかった。したがって，2基の箱式石棺の古墳の実態は不明である。

この地域に所在する古墳には，横穴式石室を有するものと箱式石棺を有するものが多い。最も近接した地点の前方後円墳は，琴海1号墳の対岸に位置する丸山古墳(註4)である。横穴式石室の古墳は，数基が一定の地域に群をなして所在し，石室の入口は瀬戸内海に面して開口している。墳丘の盛土が削平され，石室の石材が持ち去られているものが多い。箱式石棺の古墳は，墳丘がほとんど認められない小規模なもので，遺物が副葬されないものが多い。遺跡の分布調査を実施してもなかなか所在が確認できないが，土取り作業や宅地造成によって偶然発見されたものも存在する。緩斜面に位置する民家の石垣や庭石には，明らかに古墳の石材と考えられる石が認められるから，地図に記載した地点以外にも消滅して所在が不明になった古墳が存在することが推定される。

古墳時代に属する古墳以外の遺跡は，阿津走出(はしりで)遺跡（第1図8），大浜遺跡（第1図9），古下津井遺跡（第1図10）が確認されている。いずれも海浜の入江に面した製塩遺跡である。

阿津走出遺跡は，児島競艇場の北西方向に位置する広い範囲の入江に所在する。琴海1号墳の周辺では，最も規模の大きな製塩遺跡である。現在では民家が密集しつつあるが，わずかに残された畑地には，多量の製塩土器片が散布している。下津井電鉄の路線敷と並んで走る市道の拡幅工事では，表土の直下に製塩土器の破片がぎっしり詰まった層が認められたという。

大浜遺跡は，鷲羽山展望台の正面に位置する浅い入江に所在する。下電ホテルが建設された時に，多量の製塩土器片が出土して遺跡の所在が判明したのである。下電ホテルの東方向に位置する大浜海水浴場でも，少量ながら製塩土器片が採集されている。

古下津井遺跡は，下津井の市街地に所在する遺跡である。現在では民家が密集しているために詳細は明らかではないが，かつて製塩土器片が検出されたという。

なお地図には記載していないが，大畠(おばたけ)集落の南東方向に位置する遠浅になった長浜海岸では，潮干狩の時に製塩土器片がわずかながら採集されるという。またこの地域の瀬戸内海に浮かぶ島々の海岸でも，製塩土器の破片が散布する地点が随所に確認されている。

このように，琴海1号墳周辺の海岸線には製塩遺跡が多い。古墳時代に属する古墳以外の遺跡としては，現在のところ海浜の入江に所在する製塩遺跡ばかりである。したがって，この地域で確認されている古墳の被葬者たちの当時の生活を考えるには，製塩遺跡の存在が無視できない重要な要素となるであろう。

弥生時代の遺跡としては，菰池(こもいけ)遺跡（第1図11），菰池越遺跡（第1図12），赤崎新庄八幡宮遺跡（第1図13），吹上(ふきあげ)山田遺跡（第1図14）が確認されている。

菰池遺跡は，倉敷市菰池に所在する弥生時代中期の標式遺跡である。この遺跡から出土した土器は，岡山県を代表する中期中葉に属するもので「菰池式土器」と呼ばれて広く知られている(註5)。

赤崎新庄八幡宮遺跡は，瀬戸内海に面した丘陵上に所在する弥生時代中期の遺跡である。八幡宮の

建物を建立した時にほぼ完形品の土器が単独に出土したのみで，遺跡の実態は不明である(註6)。

菰池越遺跡と吹上山田遺跡は，弥生時代と推定される遺物が採集された散布地である。前者は，土器片が極めて少ないにもかかわらずサヌカイト製の石器や剝片が多量に認められた。後者は，土器片がわずかに採集されただけである。

この地域の弥生時代の遺跡は，古くからその所在が知られていたにもかかわらず実態が不明なものが多い。近接した遺跡で遺構が検出されたものには，県立児島高校の移転に伴う発掘調査で住居址が確認された城(じょう)遺跡がある(註7)。この地域には農耕に適した良好な河川が少なく，低地に広大な平野が認められない地理的な制約があるとはいえ，瀬戸内海に面した丘陵上に多くの遺跡が存在しているという注目すべき特徴がうかがわれる。なおこの地域とはやや離れているが，貝殻山(かいがらやま)遺跡(註8)や種松山真菰谷(まこもだに)遺跡(註9)のように，高地性集落として著名な遺跡も確認されている。

旧石器時代から縄文時代の遺跡としては，吹上トンコ山遺跡（第1図15）と鷲羽山遺跡（第1図16）が確認されているが，前者はサヌカイトの剝片を採集しているだけで実態は不明である。

鷲羽山遺跡は，瀬戸内海へ嘴状に張り出した丘陵一帯の広い範囲にわたる著名な遺跡である。地元の人達には，石器が散布する所として古くから知られており，多量の石器が表面採集されていた(註10)。昭和29年に久須美鼻(くすみのはな)の地点で発掘調査が実施され，石器の型式学的研究の基礎が築かれた(註11)。現在では丘陵一帯が観光地となっているため，遺跡の遺存状態は極めて悪くなっている。

この地域の小高い丘陵や瀬戸内海に浮かぶ島々では，旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が数多く存在し，鷲羽山沖の海中からはナウマン象の化石が発見されている(註12)。

註1　間壁忠彦・間壁葭子「穴海の生活」『古代吉備王国の謎』新人物往来社　1972年
註2　石田寛他共編『岡山県の地形図』光文堂書院　1963年
註3　倉敷市教育委員会『倉敷市文化財分布図』倉敷市教育委員会　1975年
註4　葺石を有する全長約50mの前方後円墳で，瀬戸内海に面した低丘陵上に所在する。
註5　鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成本編』1　東京堂出版　1964年
註6　出石　収「児島市赤崎出土の土器について」『遺跡』25　瀬戸内考古学会　1956年
註7　伊藤　晃・山磨康平「城遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(19)　岡山県教育委員会　1977年
註8　小野　昭「岡山県貝殻山遺跡」『日本考古学年報』28（1975年版）日本考古学協会　1977年
註9　間壁忠彦「種松山真菰谷遺跡」『岡山県大百科事典』下　山陽新聞社　1980年
註10　山本慶一「鷲羽山採集の石器と土器」『倉敷考古館研究集報』第6号　倉敷考古館　1969年
註11　鎌木義昌「岡山県鷲羽山遺跡調査略報」『石器時代』第3号　石器時代文化研究会　1956年
註12　註1に同じ。

2. 調 査 の 経 過

本古墳は，昭和51年度に行った本州四国連絡橋陸上ルート建設予定路線の幅500 m範囲の埋蔵文化財分布調査の結果，予定ルート内に包摂されていた遺跡の1つである。その後，分布調査資料に基づく公団との協議の結果，古墳の位置する付近は連絡橋の橋梁部から約1.5 km北側の鉄道と道路の共用部付近にあたり，用地幅も150 mとかなり広く，古墳が完全に路線内に含まれることが判明した。工事の設計図によれば，古墳は鉄道路線西側の法面に位置し，工事による完全な破壊が想定される場所に相当していた。

発掘調査は，本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う事前調査の昭和54年度当初の調査対象遺跡として，4月より約3箇月間の予定をもって着手した。調査方法は，工事によって古墳全体が完全に破壊されることが予想されたために，石室の完全な解体を含めた全面調査を行うことを最大の目標として取り上げた。

従来の岡山県内の横穴式石室を有する古墳の行政調査に限れば，調査の時間的・経費的な制約や石材の除去作業に危険が伴う等の要因から，石室内の調査に重点が置かれ，小規模な古墳であっても，石室の構築過程や掘形の調査は軽視されがちであった。

このため，本古墳の調査では当初より完全な解体を行うことを計画し，文化財保護対策委員会のご指導とご助言を仰ぎながら，事故防止に万全の注意を払いつつ，調査を進行させた。

調査の工程は，危険防止のために石室内の掘り下げや石室の前面に存在する埋土の選別作業を先行させ，ついで墳丘の表土除去作業や周溝の検出作業を行った。石室や掘形の調査については，先ず天井石の設置面までの表土除去作業を行い，この時点での写真撮影や測量を行った後に，天井石を除去して掘形内に存在する埋土の除去作業を行う方法をとった。その後は，写真撮影・実測・石材の除去作業を順次繰り返しながら，石室の完全な解体を行った。なおこれらの解体作業のうち，天井石と奥壁等に使用されていた巨大な石材の除去については，専門業者に作業を依頼した。

日 誌 抄

4月2日　発掘調査に必要な器材の準備を始める。
4月5日　発掘調査の作業員を依頼する。
4月9日　本州四国連絡橋公団児島工事事務所によって，古墳周辺の樹木伐採作業が始まる。
4月12日　古墳周辺の地形測量を行う。
4月13日　古墳の調査開始前遠景写真を撮影する。
4月14日　発掘調査に必要な器材を点検する。
4月16日　発掘調査に必要な器材を，文化課分室から現地へ運搬する。
4月17日　休憩小屋テントと便所を設置する。古墳周辺の表土除去作業を始める。
4月18日　器材置場を設置する。休憩小屋テントの排水溝を掘開する。

4月21日　古墳被葬者の供養を行う。保護対策委員会を開催する。

4月23日　写真撮影用のパイプヤグラを，文化課分室から現地へ運搬する。

4月24日　古墳の調査開始前現状写真を撮影する。

4月26日　崩壊して散乱した石室の石材を除去する。

4月27日　散乱した石材の除去作業に並行して，崩壊した石室南端の遺物確認作業を行う。

4月28日　電灯を設置して石室内の排土作業を始める。石室の南端から平瓶の完形品が出土する。

5月1日　排土が調査範囲外へ流出しないように，パネルで防止柵を設置する。

5月2日　石室内の奥壁部分から，須恵器と土師器の完形品が出土したので，木棺痕跡検出用の畦を設定して，細かい慎重な作業へ移行する。

5月3日　石室内の慎重な作業に並行して，ふるいで石室内排土の遺物確認作業を継続する。

5月7日　須恵器と土師器の完形品以外に，ガラス小玉と鉄器が出土する。

5月9日　耳環と人骨の頭骨部が出土する。

5月10日　床面で棺台に使用した石の配列を検出する。

5月15日　木棺痕跡を精査して追求したが，どの地点でも把握できない。

5月16日　木棺痕跡検出用畦の土層断面を，写真撮影と実測する。

5月18日　石室内に設定した木棺痕跡検出用畦の除去作業を行う。須恵器や土師器の完形品以外に，大刀の鞘金具が出土する。

5月19日　石室内全体の清掃を行う。

5月21日　石室内の遺物出土状況写真を撮影する。

5月22日　遺物の出土状況を実測する。ふるいによる石室内排土の遺物確認作業を終了して，周溝検出のトレンチ調査を始める。

5月23日　味野中学校と児島高等学校の生徒多数が見学に訪れる。

5月24日　石室内の出土遺物を取り上げる。墳丘の確認作業を始める。

5月26日　床面を清掃して，排水溝を検出する。

5月28日　排水溝の調査を行う。須恵器と土師器の完形品が出土する。

5月29日　石室内の排水溝・側壁・奥壁・天井石を写真撮影する。

5月30日　石室内の実測に着手する準備として割り付けを行う。墳丘の確認作業を継続する。

5月31日　石室内の排水溝と，奥壁と側壁の根石掘形を実測する。

6月1日　石室内側壁の実測を始める。西側墳丘端部で，須恵器の大甕片が出土する。

6月5日　石室内の奥壁を実測する。

6月6日　奥壁から石室の開口部を見透した実測を行う。残存する墳丘と周溝の全容が判明する。

6月7日　石室内の断面を実測する。排土流出防止柵を増設する。

6月8日　石室内の天井石を実測する。墳丘上部の土層断面を写真撮影する。

6月9日　墳丘上部の土層断面を実測する。

6月11日　本州四国連絡橋公団児島工事事務所と，今後の遺跡発掘調査計画について協議する。

6月12日　残存する墳丘全体の測量を行う。

6月13日　墳丘上部の土層断面観察用畦を除去する。残存する墳丘全体を写真撮影し，天井石上面の盛土を除去する。

6月14日　天井石上面の上層断面を写真撮影する。

6月15日　天井石上面の墳丘盛土を除去する。

6月16日　天井石の上面を清掃して写真撮影する。天井石の実測に着手する準備として割り付けを行う。保護対策委員会を開催する。

6月17日　天井石の実測を行う。

6月18日　残存する大きな天井石3枚の間の埋石を除去する。天井石の構築状況を写真撮影する。

6月19日　天井石と奥壁に使用している巨石の除去作業について，文化課の関係者で協議する。

6月21日　本州四国連絡橋公団倉敷工事事務所と，今後の遺跡発掘調査計画について協議する。

6月23日　天井石の除去作業を始める。

6月25日　曾原遺跡の工事用道路部分の発掘調査に先立って，遺跡周辺の住民へ挨拶まわりを行い，発掘調査の作業員を依頼する。

6月26日　天井石除去後の側壁と奥壁を写真撮影する。

6月29日　大雨洪水警報が発令されたため，現場で排水作業と土砂流出防止作業を行う。

6月30日　大雨洪水警報が発令され，大雨で現場の土砂が民家へ流出しているという連絡が届いたので，作業員以外に文化課職員多数の応援を得て土袋積み作業を行う。

7月3日　天井石除去後の側壁と奥壁の実測を行う。墳丘盛土を排除して，石室掘形の検出作業を始める。

7月5日　墳丘端部の土層断面を写真撮影する。

7月6日　墳丘端部の土層断面を実測する。土層断面観察用畦を除去する。

7月7日　奥壁と側壁の上部に存在する石の除去作業を行う。奥壁部分土層断面を写真撮影する。

7月9日　奥壁部分の土層断面を実測する。奥壁や側壁の裏込め石の検出作業を行う。

7月10日　奥壁や側壁の裏込め石を，写真撮影と実測する。

7月11日　奥壁と側壁に使用された巨石の除去作業を行う。

7月12日　根石を除去した後の裏込め石の，写真撮影と実測をする。

7月13日　根石掘形の検出作業に継続して，写真撮影と実測を行う。

7月16日　石室内床面の土層断面を，写真撮影と実測する。古墳周辺の旧地形の検出作業を行う。

7月17日　本州四国連絡橋公団児島工事事務所へ，発掘調査完了後の現場管理を依頼する。

7月18日　発掘調査作業終了後の古墳周辺の地形測量を行う。発掘調査が完了した後にも，雨水で土砂が流出しないように，厳重な対策を施す。発掘調査に使用した器材を，現場から新常盤旅館の空地へ運搬する。

7月19日　使用した器材を，曾原遺跡の現場事務所と文化課分室へ運搬する。古墳周辺の住民へ発掘調査終了の挨拶まわりを行い，琴海1号墳の現場発掘調査作業を完了する。

3.　立地と調査前の概況

古墳が立地するこの地点は阿津集落と大畠集落の境界付近に位置し，眼下には児島競艇場が望まれる。本古墳は2基の古墳からなる琴海古墳群のうちの1基で，昭和50年に倉敷市教育委員会から発行された「倉敷市文化財分布図」の遺跡番号9-75に相当する（第1・2図）。

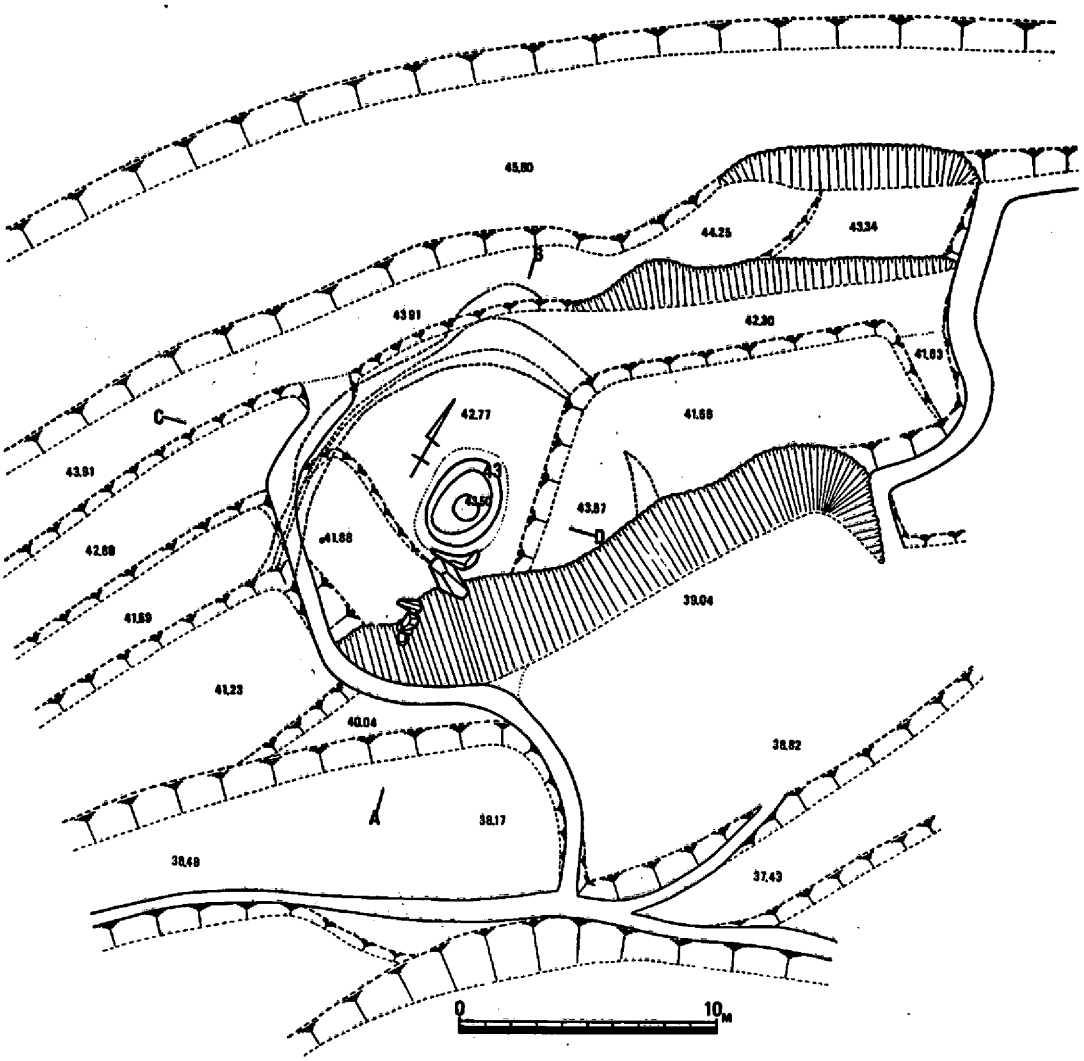
国立公園鷲羽山から約1.5㎞北方向に位置する急峻な神道山の東斜面は，山麓でなだらかな鞍部を形成し，随所に児島湾へ面した浅い谷地形が存在する。本古墳は，このような地理的状況を呈した急斜面から緩斜面へ移行する標高42mの地点に立地している（第1・2図）。

前面の谷部には20軒以上の民家が不規則に密集して存在し，鞍部を縫うように下津井電鉄の路線敷が南北に走る。琴海駅は，本古墳の南東方向約100mの地点に位置する。古墳の周辺は，戦後になって斜面を階段状にカットした段々畑が造成されたため，墳丘の盛土や石室の一部も破壊を受け，現状では雑木や細い竹が群生する荒地と化していた（第2・3図，図版1・2）。

伐採作業が終了した段階で，古墳の現状を観察した。本古墳はほぼ南方向に開口した横穴式石室を有する円墳で，石室の南端は著しく破壊され，天井石や東側に位置する側壁が残存しない。残っている天井石は，奥壁に近接した3枚のみである（第5～8図，図版7）。段々畑の急斜面になった法面には，破壊された石室南端の石材が散乱していた（第3図，図版1-2）。墳丘の盛土は，前述のように大部分が削平され，石室北側の上面に高さ約1mの半球状を呈

第2図　琴海1号墳周辺地形図（S＝1/3000）

してわずかに認められるが，部分的には天井石や側壁が露出していた（第３・４図，図版１－２・３・４－１）。石室内は天井石に接する付近まで土砂に埋まり，雑木や細い竹が繁茂していた。石室内の奥壁部分には，小さな祠が安置されていた。墳丘端部の周溝部分は畑地に造成され，地形がすっかり変容していた（第３図，図版１・２）。

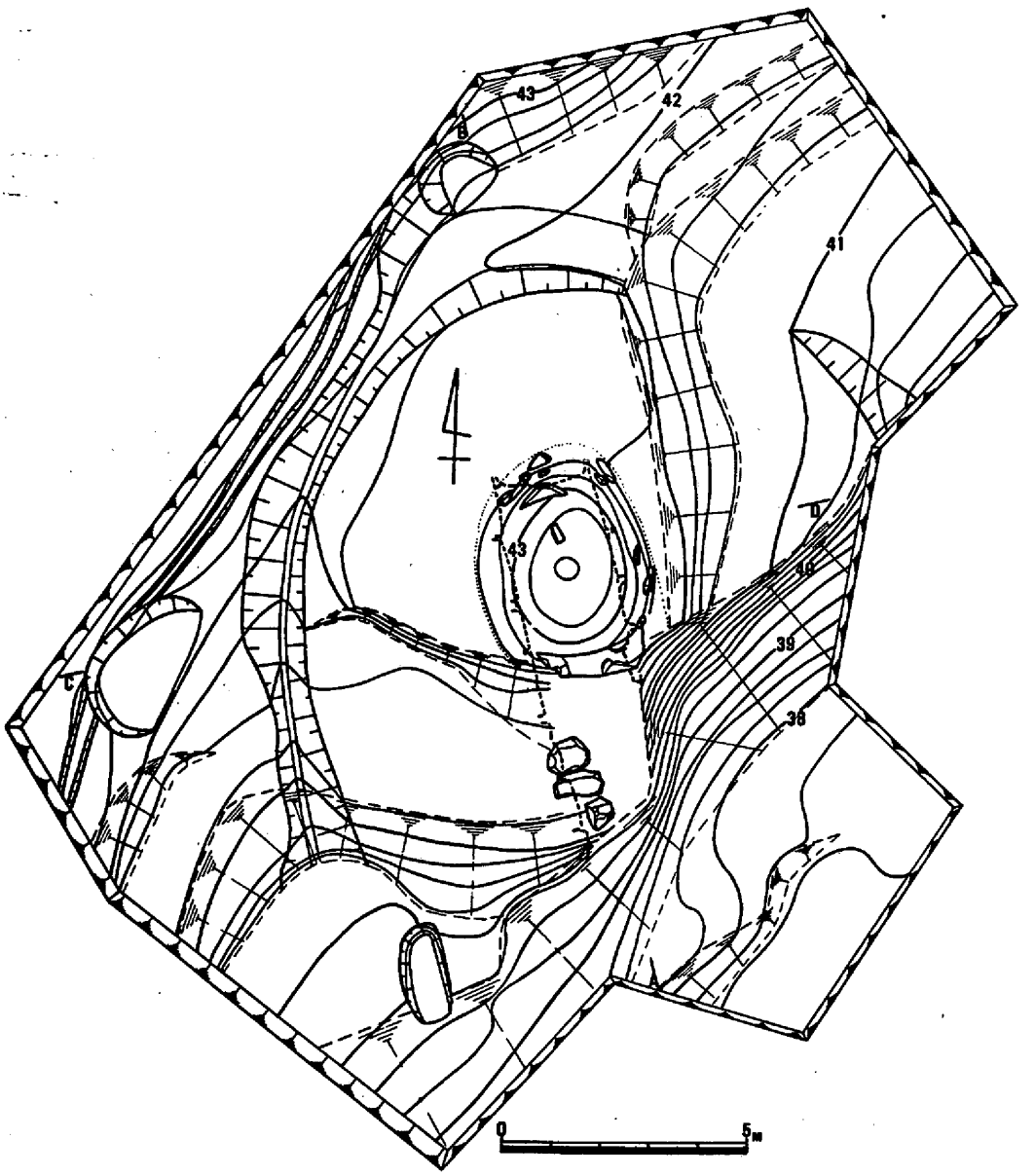


第３図　琴海１号墳調査前測量図（S＝1/300）

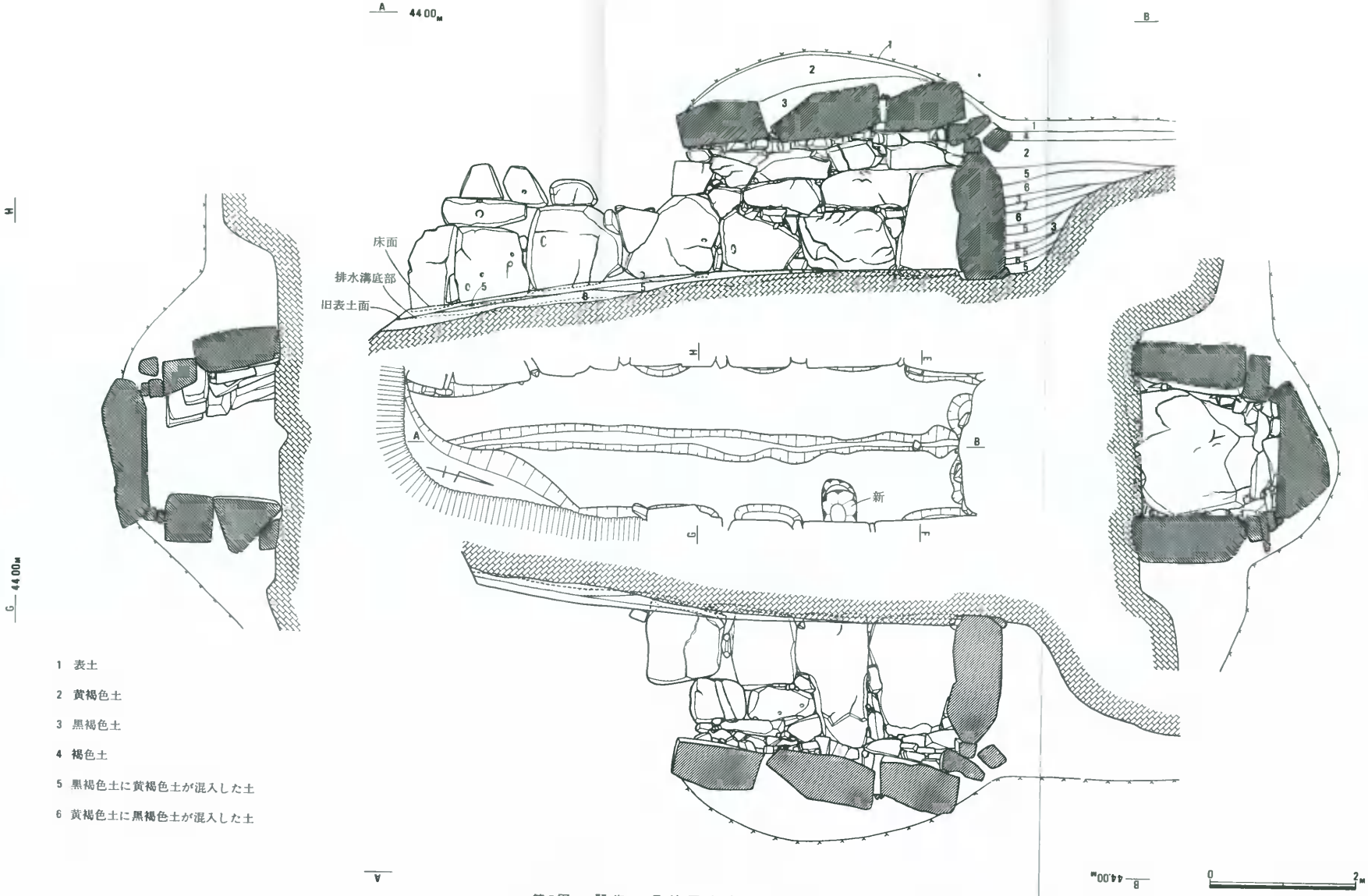
4. 調 査 の 概 要

A. 墳丘と外部施設

発掘調査開始前に観察したように，墳丘は著しく削平されて天井石や側壁の一部が露出していた。



第4図 琴海1号墳墳丘測量図（S＝1/150）



1 表土

2 黄褐色土

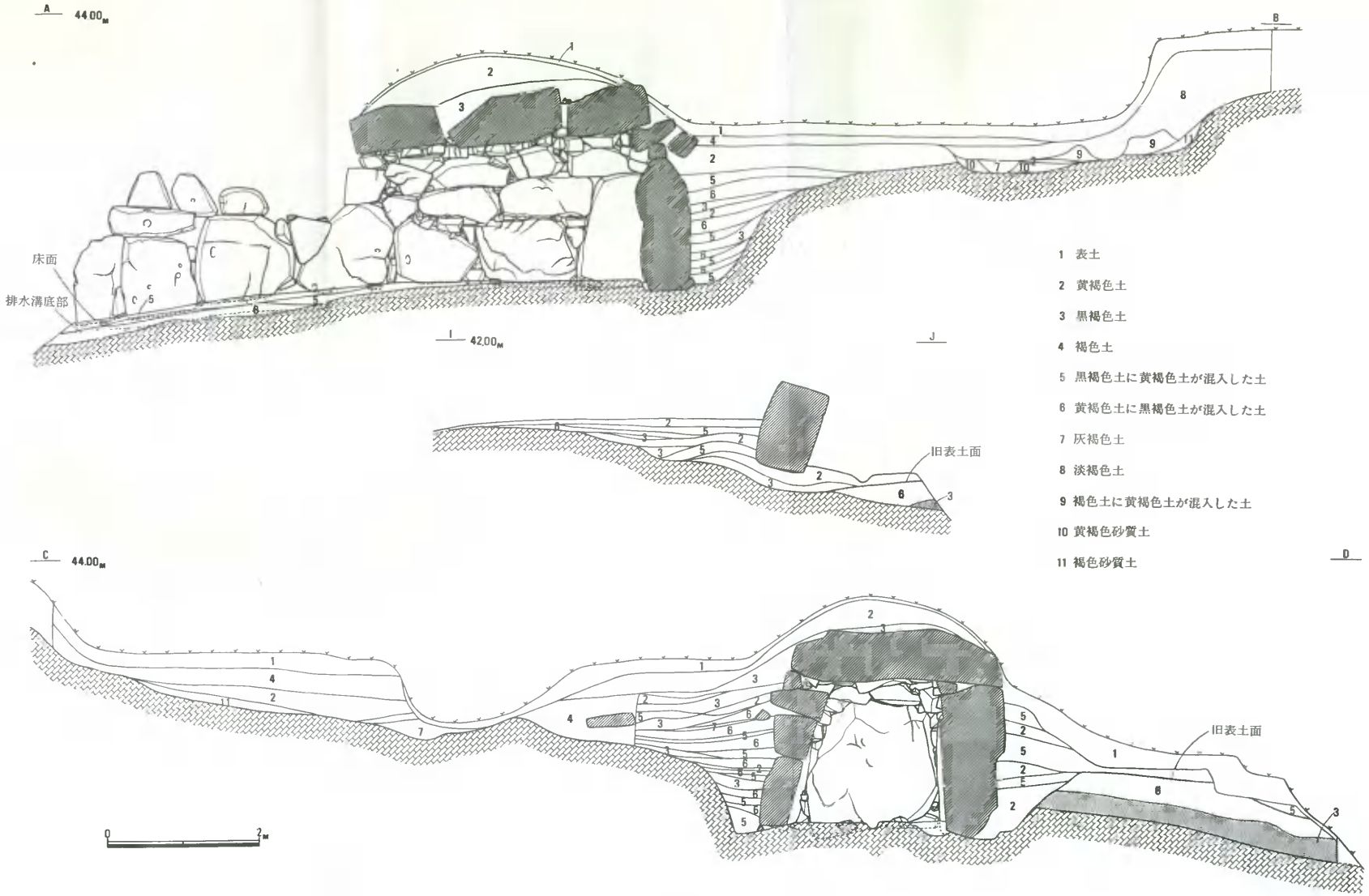
3 黒褐色土

4 褐色土

5 黒褐色土に黄褐色土が混入した土

6 黄褐色土に黒褐色土が混入した土

第5図　琴海1号墳石室実測図（S＝1/60）



第6図　琴海1号墳断面図（S＝1/60）

墳丘の中心で直交する断面を設定して，盛土の状態を調査した（図版3－2・4－1・6－1）。

天井石の上面には，表土直下に黄褐色土と黒褐色土の2層が存在するのみであるが，掘形と石室との間には，何層にも重なった版築状を呈する土層が認められた。地形の低い南側の地点では，旧表土を確認した（第5・6図，図版8・9）。石室を構築するために掘開した掘形の北東隅に位置する肩部とE－D断面の西側では，比較的大きな石を検出した（第6・8図，図版8－1）。前者は，掘形の肩部に接して5個の石が並んでいた。後者の石は1個のみであるが，重くて安定していた。断面を残して調査した結果，石の上面で版築状の土層が跡切れている（第6図，図状8－1）。したがってこれらの石は，石室を構築して残った石を盛土を行う過程で墳丘内に埋めたものと判断した。

奥壁の北側は，畑の造成によってすっかり地形が変容していた（第3図，図版1・2）が，設定した断面によって墳丘端部に存在する周溝の一部を検出した（第6図，図版9－1）。盛土の調査に並行して全体を追求したところ，地形の高い北側と西側の点地で彎曲した円弧状を呈する周溝の全容を確認した（第4図，図版3－2・4）。石室の東側は，削平されて整然としない。北側の周溝は，幅が極度に広がって浅くなる。残存する周溝の形態から推察して，本古墳の規模は直径約12mになるであろう。周溝の断面は浅い「U」字形を呈し，底部には灰褐色土や黄褐色砂質土が認められた（第6図，図版9－1）。周溝の外側に位置する北側と西側には，地形の高い部分に三日月状の低い立ち上がりを有する窪地を検出した（第4図，図版4－2）が，覆土の状態や遺物が存在しなかったことから，古墳の構築過程で生じた採土跡と推定した。

調査範囲の北西端には，前述した2箇所の窪地を結ぶ方向に走る浅い溝が存在した（第4図）が，畑の法面直下に掘開された新しい時期の排水溝と考えられる。

石室の南西には，平面形が隅丸長方形を呈する土壙を検出した（第4図）。検出面での計測値は，石室の主軸方向と平行する長軸1.96m，それに直交する短軸0.94mを測る。底部はほぼ水平で，検出面から比較的深くなっていた。内部を精査したが，遺物は検出できなかった。この土壙の性格等は不明である。地形の低い石室の南側と南東側は，急斜面を呈した畑の法面によって墳丘が著しく削平されていたため，調査することができなかった。

B．石室の掘形

掘形の平面形は，奥壁部分が短くて全体に細長い台形を呈している。奥壁部分の幅は，検出面で4.06m，床面で3.17mを測る。同様にしてC－D断面の幅が4.50mと3.80m，G－H断面では4.92mと4.36mを測る。掘形の検出面から床面までの深さは，奥壁北側とE－F断面の西側で最高値の約1mを測るが，地形の低い南側へ移行するにしたがって浅くなり，石室の入口付近では掘形そのものが不明瞭である（第8～12図，図版18）。掘形の床面は，地形の低い南側へ移行するにしたがって緩やかに下降し，奥壁部分と石室の入口付近では約60cmもの高低差が認められる（第5図）。北側に位置する掘形の断面は，逆台形を呈している（第5・6図）。

石室周辺の標高41mより低い地点では，盛土の下位に旧表土を確認した。この位置での掘形は，

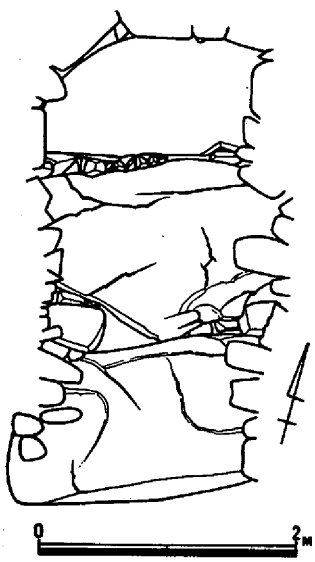
旧表土の上面から掘り込まれ，石室南端の床面は，旧表土の上面に貼床を施しているのが認められた（第5・6図）。

本古墳の石室は，掘形に対して東側に偏在して構築されていた（第8～12図，図版18）。つまり，掘形の長軸中心線と石室の主軸が約11度もずれているのである。北側や東側では，掘形の法面の方向と石室の壁面の方向が約40cmの間隔でほぼ平行しているが，西側では地形の低い南方向へ移行するにしたがって両者の間隔が開いていた。

C. 石室の構造

石室の形態は，ほぼ南方向に開口した無袖の横穴式石室である。石室の主軸方向はN-14.0°-Wを示し，掘形の東側に偏在して構築され，石室の主軸と掘形の中心線との間に約11度のずれが生じている（第8～12図，図版18）。石室の北側はほぼ原形を保って遺存していたが，地形の低い地点に相当する南側は片方の側壁の石材が全く存在しないまでに著しく破壊されていた（第3～5・8図，図版3-1・17-2・18）。奥壁に近接した北側には，3枚の巨大な天井岩が残存していた（第5～8図，図版7）。

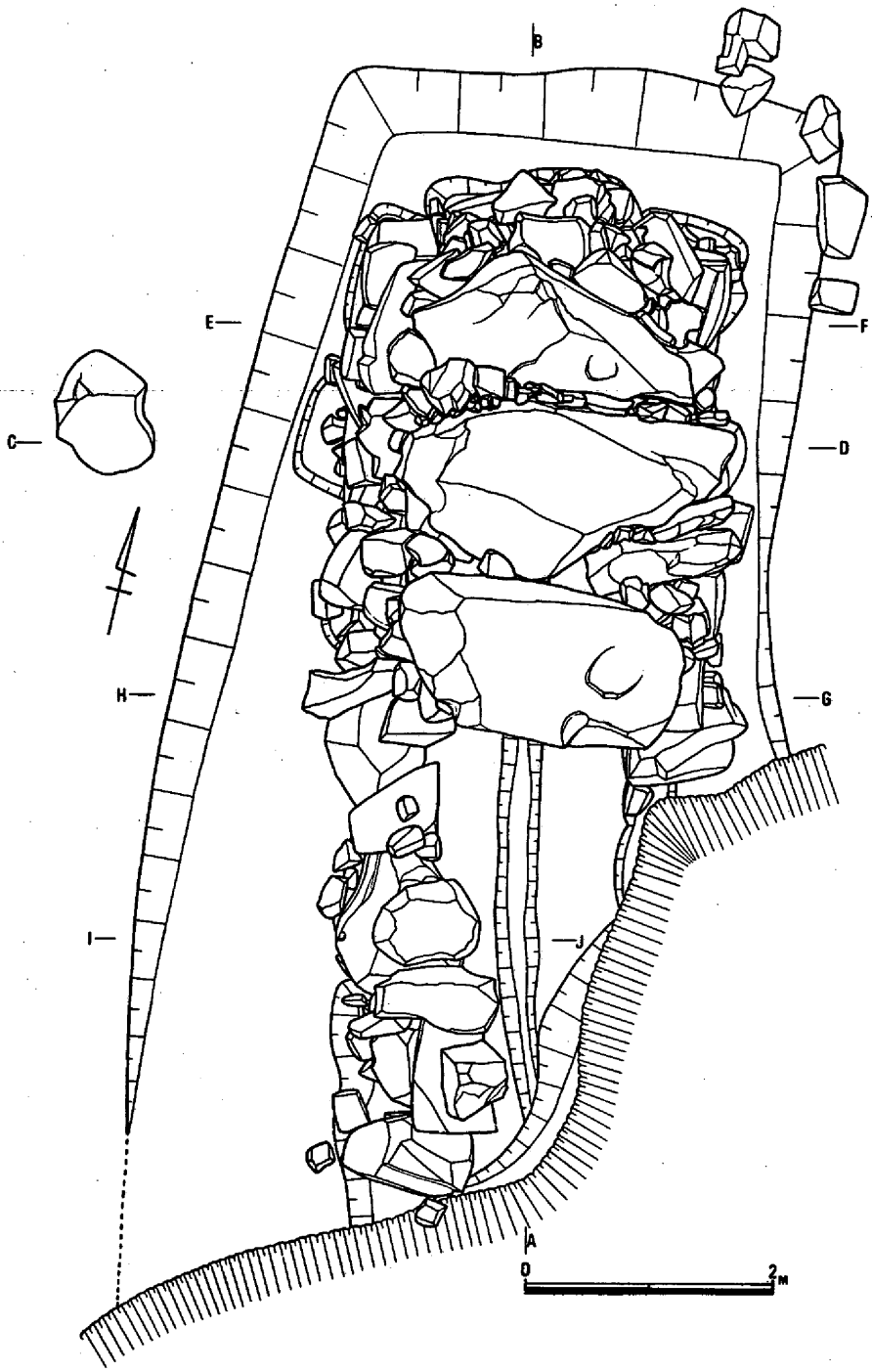
石室の構築に使用されている石材は，本古墳の周辺で産出する花崗岩の自然転石と考える。原則として奥壁や側壁の根石には大型で安定した石材を用い，上段にはやや小型の石材を使っている。石材間に生じた隙間には，花崗岩の小割り石を充塡している。側壁は，床面からわずかに内傾して立ち上がる持ち送り積みになっている（第5・6図，図版5・10・14・16・17）。壁面には，粘土等による目張りや赤色顔料の塗布等の痕跡は認められなかった。



第7図　石室内天井石
（S＝1/60）

床面を基準にして計測した石室の残存長は，遺存状態が比較的良好な西側壁で約7.40mを測る。石室の幅は奥壁付近1.90m・C-D断面付近2.10m・G-H断面付近1.85mを測り，わずかに胴張りを呈している。床面から天井石までの高さは，奥壁付近で約1.90mを測る。床面は奥壁から石室の入口方向へ移行するにしたがって徐々に下降し，奥壁付近と石室の入口では約60cmもの高低差が認められる。石室の入口付近の床面は，旧表土の上面に貼床を施している（第5・6図）。

石室の壁面に使用された石材の表面には，円形または楕円形を呈する浅い窪みが随所に認められた（第5・6図，図版12-2・16）が，自然のものなのか，あるいは石材の運搬を容易にするために穿たれた痕跡なのか，識別することができなかった。また掘形の法面と石室の壁面の間には，版築状を呈する土層が認められる（第5・6図，図版8・9-2）ものの，控え積み石は全く存在しなかった（第5・6・8～11図，図版8・9-2）。



第８図　琴海１号墳石室解体過程図（１）（S＝1/60）

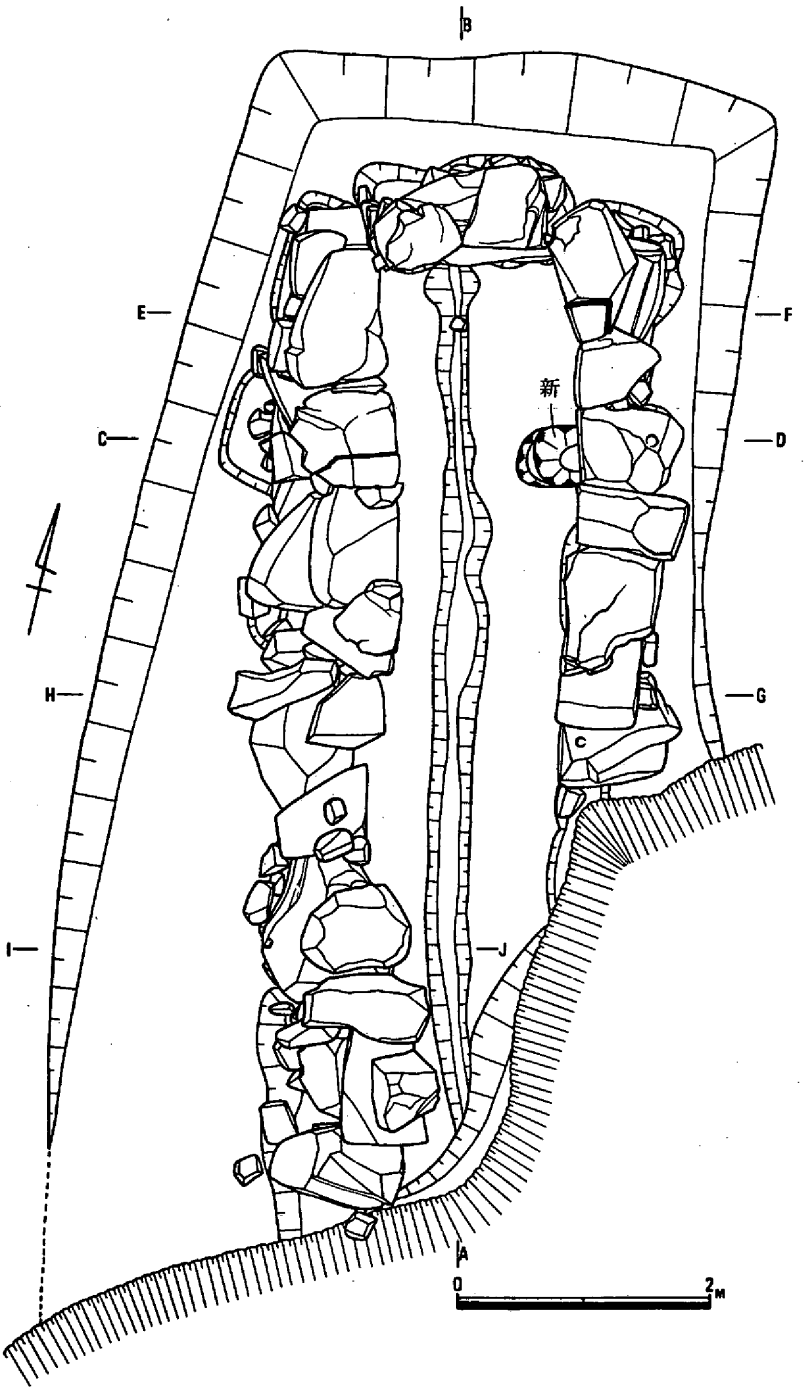
排水溝 床面の中央部に位置する主軸線上には，奥壁から石室の入口に向かう排水溝が存在した（第5・9～11図，図版5・6-2・17・18)。石室の入口付近は削平されて不明であるが，残存する総延長は約7mである。排水溝の床面での幅は18cm～43cm，床面からの深さは5cm～30cmを測り，断面が「U」字形を呈している。奥壁に近接した地点の排水溝は，堅い地山面を掘開しているために浅いが，石室の入口付近では，排水溝の底部が旧表土面に位置して比較的深く抉られている（第5・6図，図版5-2・17・18)。排水溝の底部には黄褐色砂質土が認められ，完形品の須恵器や土師器も出土した（第13図，図版11-1)。

奥壁 奥壁は石室の幅に見合うだけの巨大な1個の石材を，広口に立てて据えている。その上位は，細長い2個の石材を並べて横口積みにしている。天井石が架設された最上段の部分は，小石材を小口積みにしている。側壁との隙間は，割り石の小石材を何段にも小口積みにして塞いでいる（第5・6図，図版5-1・10-1・14-1・15・17-1)。床面に据えられた巨大な石材は，縦175cm・横170cm・厚さ70cmを測る。底部が不安定なため，掘形の床面を掘り窪めて据えた後に，人頭大から拳大の割り石を用いて裏込めを行っている（第5・6・11図，図版20-2)。

奥壁の壁面は，床面に据えた巨大な石材そのものの表面が凸凹で平坦に揃っていないが，割り石の小石材をうまく補って構築しているため，堅牢な造りになっていた。

東側壁 東側壁は奥壁に近接した部分が遺存するだけで，石室の入口側は著しく破壊されて石材が残存しない（第3～5・8図，図版3-1・17-2・18)。最も南端に位置するG-H断面地点の根石は，内側へわずかに張り出して据えられている（第5・10・13図，図版10-2・13・14-2・17-2・18・19-1）とはいえ，石室内を玄室と羨道に区別することを意図したとは考えられなかった。この根石のさらに南側では，抜き取られた根石の掘形や裏込め石を検出した（第5・8～11・13図，図版6-2・13-2・18-2）が，抜き取られた根石そのものが著しく石室内へ張り出して構築されていたとも考えられなかった。したがってこの東側壁の壁面は，わずかに内彎して胴張りを呈しているが，袖と断定できるものは存在しないと判断した。

東側壁には4個の根石が認められた（第5・10・13図，図版18)。奥壁に近接した2個の根石は奥壁の約半分の規模を有するもので，石室内の面がほぼ垂直になるように広口に立てて据えられている（第5・6図，図版10-1・14-1・17-1・18)。奥壁に接する根石は底部が丸くて不安定であるため，人頭大から拳大の割り石10個を用いて念入りな裏込めを行っている（第11図)。この根石の上位は細長い石材を横口積みにして構築し，天井石が架設された最上段は割り石の小石材を2段に重ねて小口積みにしている（第5図，図版15-2)。奥壁から2番目に位置する根石は床面から約1.70mの高さを測り，天井石との間に小石材を小口積みに詰めているだけである（第5・6図)。奥壁と接する根石の間には上方へ広がる隙間が生じているが，割り石3個を小口積みに重ねて厳重に塞いでいる（第5図，図版14-1)。南側に位置する2個の根石は，奥壁に近接したものに比して規模の小さい石材を使用している。どちらも広口の面を石室内へ向けて構築しているが，構築された石材そのものの形態が石室内の面を長辺とした不安定な三角形を呈するため，比較的大きな割り石の石材を裏込めに使用して安定させている（第5・11図，図版20-1)。両者の根石の間には，最も接近している地点で約10cm



第9図　琴海1号墳石室解体過程図（2）（S＝1/60）

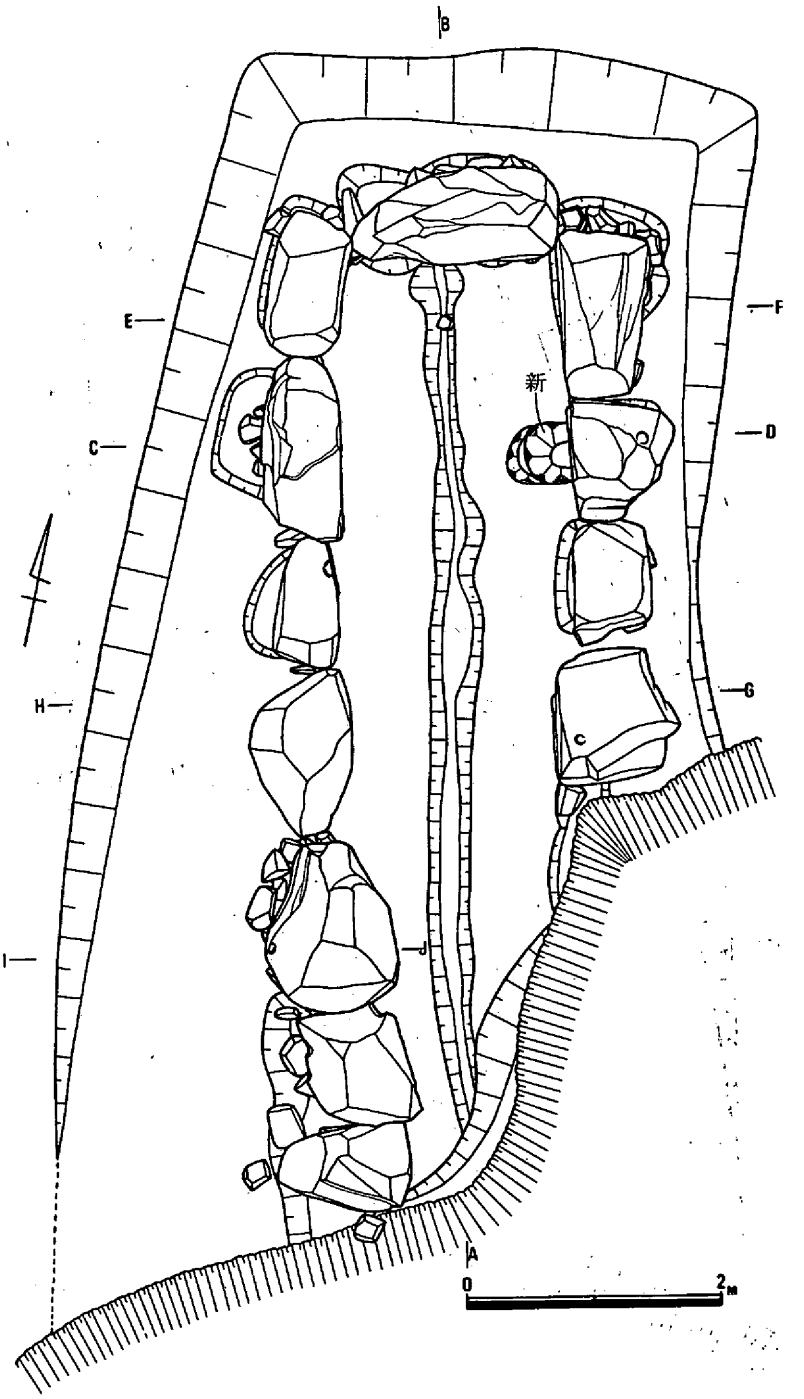
を測る隙間が存在する。その隙間を塞ぐ埋石は，割り石の小石材がわずかに1個認められるのみで粗雑な形態になっている（第5図，図版14-2)。床面に据えられた2個の根石の上位には，やや大型で細長い石材を横口積みにして並べている。さらにその上位は，使用した石材が小型であるにもかかわらず横口積みになっている。天井石直下の最上段は，割り石の小石材を小口積みにして2段に重ねている（第5図)。

このように東側壁は奥壁に近接した約4.20 m を測る部分が残存するのみであるが，南端に構築された根石の接続部分に粗雑な形態が認められるものの，全体として安定した構造を呈していた。

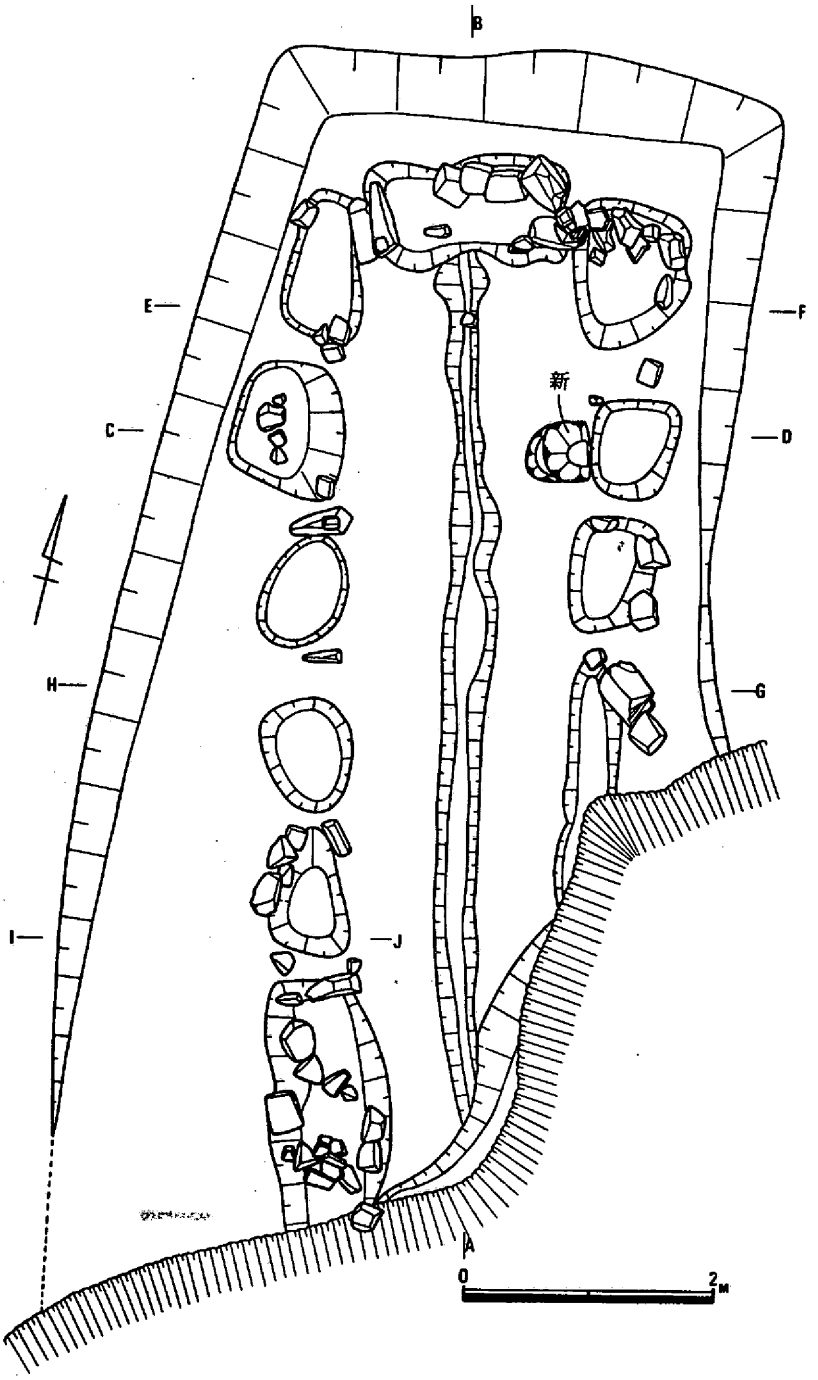
西 側 壁　西側壁は前述した東側壁よりも遺存状態が良好であるが，天井石が残存しない石室の入口付近は最上段の石材がかなり抜き取られている（第5・6図，図版6-2・12-2・13-2・16-2)。玄室と羨道を区別する袖は存在しないが，壁面がわずかに彎曲する胴張りと，床面から内傾して立ち上がる持ち送りが顕著に認められる（第5・6図，図版5・6-2・10・13-2・16～18・19-1)。この西側壁は南端に位置する石室の入口付近が著しく削平されているため，残存する根石よりもさらに南側へ伸びて構築されていた可能性が考慮される。

西側壁には7個の根石が認められる（第5・6・10・13図，図版18・19)。奥壁に接した根石は，対面する東側壁と同様に石室内の面をほぼ垂直にして広口に立てて据えられている（第5・6図，図版16-1・17-1・18)。この根石は底部よりも上端が厚い不安定な構築になっているため，床面を掘り窪めて据えた後に南端と北西端に位置する掘形の肩部に割り石の小石材を詰めて裏込めを行っている（第5・11図，図版20-2)。奥壁と接する床面の隙間には，細長い割り石2個が認められる（第11図)。この石の上位には，南脇に接して存在する石材に跨がるように細長い石材を横口積みにしている。天井石が架設された最上段は，割り石の小石材を小口積みにしている（第5・6図，図版15-1)。奥壁に接する根石の南側に並ぶ3個の根石は，広口面を石室内に向けて据えられているが，石材が不揃いであるため，構築された壁面に多くの隙間が認められる。この隙間には，割り石の小石材をうまく配して空間が生じないように塞いでいる。3個の根石の上位は比較的大型で細長い石材を2段にわたって横口積みにし，天井石直下の最上段は，割り石の小石材を小口積みにしている（第5・6図，図版16-1)。奥壁から2番目に位置する横に寝かせて構築した根石の掘形内には，割り石の小石材4個がほぼ中央付近に並んで存在する（第11図)。この4個の小石材は，根石を安定させるために詰められた裏込め石と考える。

石室の入口に面した3個の根石の上位には，天井石が残存しない。3個の根石はいずれも広口にして立てている（第5・6・10，図版5-2・6-2・10-2・12-2・13-2・16-2)。この根石が構築された床面は旧表土面に相当して不安定であるため，多量の小石材を根石の底部に詰めて裏込めを念入りに施している（第11図)。南端に位置する2個の根石の上位は，大型で細長い石材を横口積みにした後に比較的大型の石材を小口積みにしているが，石室の入口側から3番目に位置する根石の上位は，大型の石材を直接に小口積みしている（第5・6図，図版5-2・10-2・12-2・13-2・16-2)。これらの根石の間には比較的広い隙間が随所に存在して，埋石がほとんど認められないが，石室内の調査で転落したものを検出している。この天井石が残存しない地点の側壁は，床面の根石の構築を奥壁に近接した部



第10図　琴海1号墳石室解体過程図（3）（S＝1/60）



第11図　琴海1号墳石室解体過程図（4）（S＝1/60）

分とは逆方向に石室の入口側から行っていたり，上位に比較的大型の石材を小口積みにしているから，他の地点とは構築法がやや異なっている。残存する壁面から推察して，この地点の床面から天井石までの高さは，床面が地形の低い方向へ緩やかに下降していることもあって，奥壁付近よりもやや高い2m前後になるであろう（第5・6図）。

西側壁は比較的遺存状態が良好であったから，東側壁では消失して不可能であった石室の入口付近の側壁も調査することができた。この石室の入口付近は，天井石が除去されているために壁面に隙間が多く認められてやや不安定な状態であったが，奥壁に近接した地点は構築された当時の形態をほとんど原形に近い姿に留め，極めて強固な構造を呈していた。

天井石　天井石は3枚が遺存していた（第5～8図，図版7）が，奥壁側から順々に架設され，天井石の間に生じた隙間を割り石で念入りに塞いだ後に墳丘の盛土を施している。

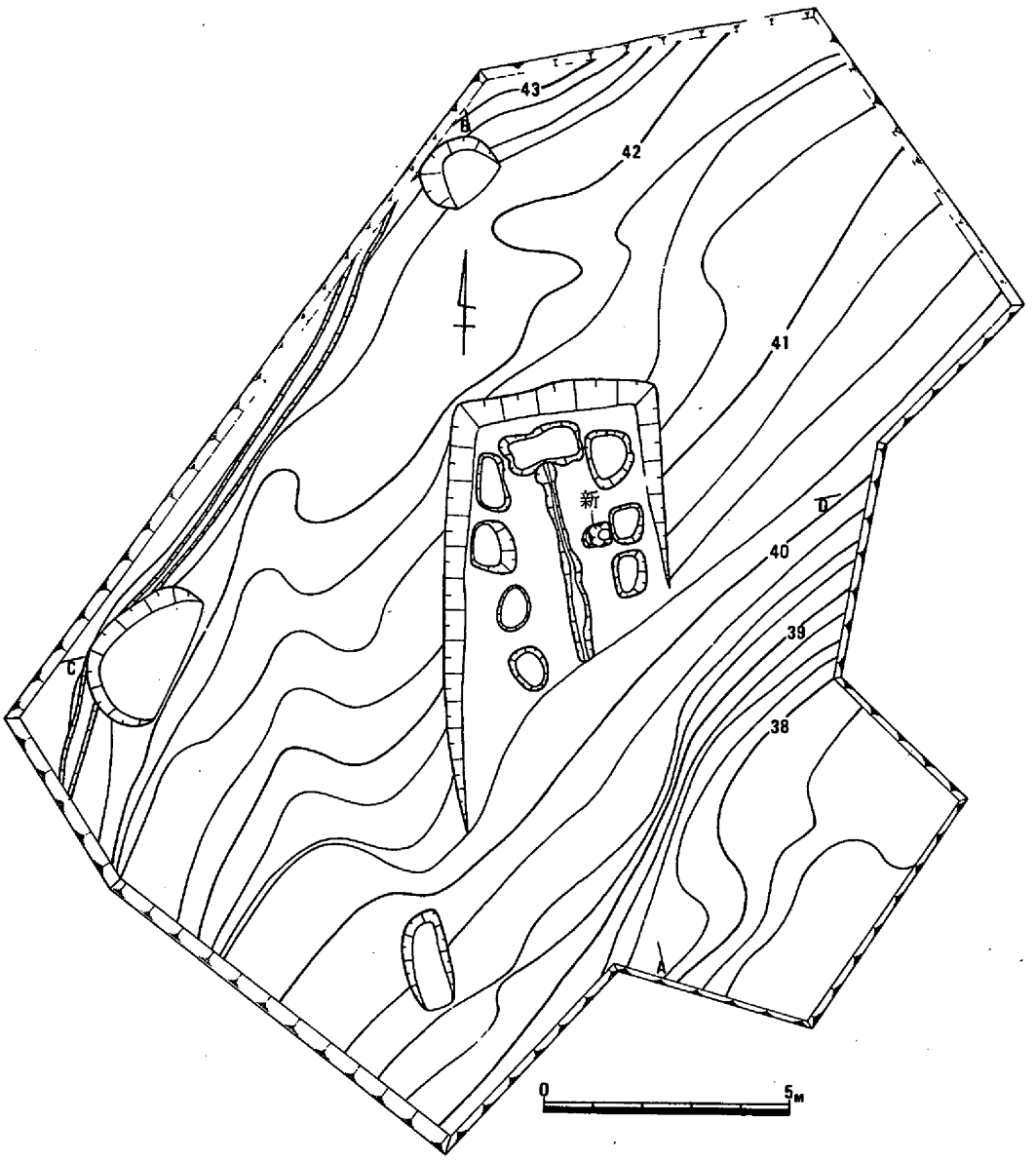
石室の構築過程　本古墳の石室は，完全に解体して調査を行った（図版21-2）ために，石室の構築過程を把握することができた（第8～11図）。古墳を構築する場所を選定して石室の掘形を掘開した後に，奥壁の巨大な根石を最初に据えている。次にそれに接する両側壁の根石を，両脇から奥壁を挾むようにして立てている（第5・6・9・10図，図版5-1・10-1・17-1・18・19-1）。

東側壁は石室の入口に面した地点が破壊されて不明であるが，奥壁に接して据えた根石を基準に，奥壁側から順々に根石を並べている（第5・10図，図版14・18）。根石の間の隙間を割り石の小石材で塞いだ後に，奥壁から2番目に位置する根石の高さまで比較的大型で細長い石材を奥壁側から横口積みにし，天井石直下の最上段には，天井石を架設する部分が平坦になるように割り石の小石材を小口積みにしている（第5図）。

西側壁は，奥壁に接して据えた根石を見透しながら当初の計画にしたがって石室の入口に予定の根石を定めているようである。奥壁近くに位置する4個の根石は，奥壁側から順々に設置されているが，石室の入口に面した3個の根石は，逆に石室の入口側から順々に据えられている（第5・6・10図，図版12-2・16・18・19-2）。その接続部分には上方へ開く隙間が生じて不安定であったため，比較的大型の石材を石室に向いた面が逆三角形を呈する状態に小口積みにしている（第5・6図，図版5-2・10-2・12-2・16-2）。石室の入口に面した3個の根石の上位は，比較的大型で偏平な石材1個を横口積みにしてまず側壁の高さを水平に揃えた後，やや大型の石材を小口積みにして並べている。天井石直下の最上段の部分は，崩壊して石材が残存しないために不明である（第5・6図，図版5-2・10-2・12-2・13-2・16-2）。

西側壁の構築状況から推察して，東側壁の石材が残存しない地点も石室の入口側から根石を据えたことが考えられる。最も南端に存在する根石が，隣接する北側の根石との間に比較的広い隙間を有する（第5図，図版14-2）のは，この根石が奥壁と入口のほぼ中間点に位置し，東側壁の根石では最後に据えられたからであろう。

石室が掘形の東側に偏在して構築され，西側壁の外側に広い平坦面が認められる（第8～11図，図版18）から，側壁は東側壁から構築し，西側壁は東側壁が定まった後にその形態に規制されて必然的に構築されたと考える。



第12図　琴海1号墳周辺調査後測量図（S＝1/150）

奥壁と側壁の間に生じた隙間は，すべての根石が設置された後に割り石の小石材を使用して塞いだのであろう。

D．遺物の出土状況

古墳に直接伴う遺物の出土は，石室内並びに石室前面の埋土中のものと，墳丘の周溝中からの出土品とに大別される。このうち石室内の遺物は石室入口付近の東側壁が抜き取られ，床面の一部も削平

されていることからみて，かなりの遺物が攪乱により二次的に移動している様で，高杯（25）の如く，入口付近2.5ｍの間に散在していたものが接合した例もある。また，石室奥壁から入口に向かって2～3ｍの間の東半部に大きな盗掘壙も掘られ，遺物もほとんど出土していないことからみて，かなりの遺物が持ち出されていると推察される。この様に攪乱された中で，奥壁に接した部分にのみ多数の遺物が一括残存していたのは，この場所の埋土上面に祠が祭られていたために盗掘の手がつけられず，原位置に近い状況を保ったものとみられる。奥壁の遺物は床面に点在する3個の石材と奥壁の間に須恵器10点，土師器4点が，あたかも詰め込んだ様な状態で出土している。このうち須恵器（6・10）と土師器（41）は三つ重ねで出土し，須恵器（1・2）も横向きに重なっている。これらの出土遺物は埋葬時の一括遺物の可能性は薄く，追葬時における二次的な移動により，この部分に寄せ集められたとみられるが，後述する須恵器蓋杯の分類ではすべて第1類に属する。また石室奥の北西隅には3個の石材を意識的に配列して奥壁部分を囲っているが，この中からの遺物の出土は皆無で，その石囲いの外側から耳環1点（99）が出土したのみである。東側には側壁に平行して大刀（57）の断片が出土している。

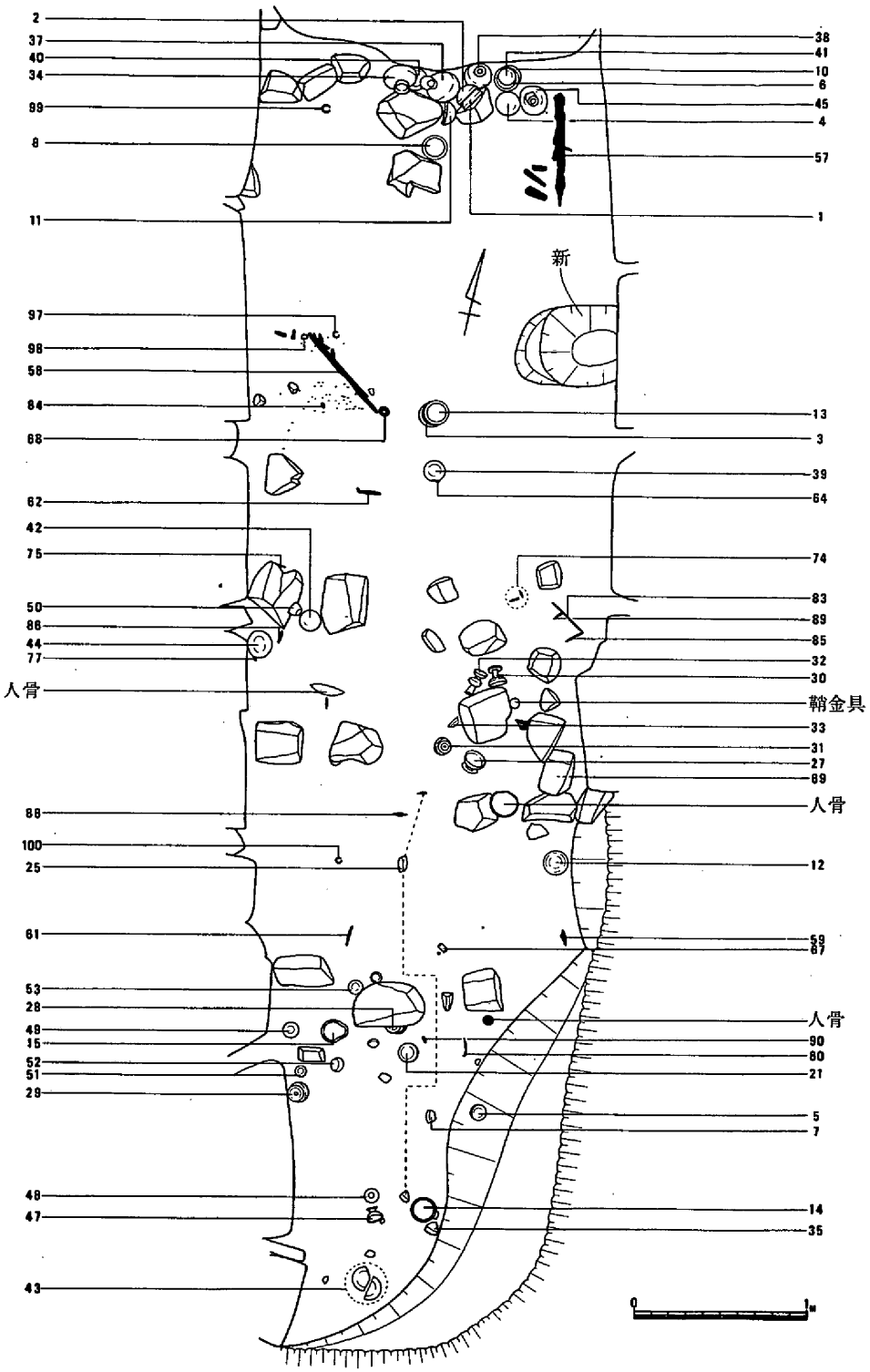
奥壁から入口に向かっての2～3ｍの間の西半分は盗掘を免れており，耳環一対（97・98）と54点にのぼるガラス玉や土玉（101～110・表3）と共に，大刀（58），鍔（68）が，かなり良好に原位置を保ち出土している。棺痕跡は確認できなかったが，遺物の配置状況から被葬者の頭部付近と推察される。周囲には棺釘，須恵器，土師器が数点出土している。

石室のほぼ中央付近には，2棺分の棺台とみられる石材が両側壁に平行して東側で2列7個，西側で2列4個設置され，その間からそれぞれ副葬品と共に頭蓋骨片が出土している。このうち東側の棺台付近からは鉄鏃（83・89・85），刀子（74），鞘金具（69）と共に，自然釉のかかった焼成堅緻な同一窯の製作とみられる須恵器3点（30・31・32）を含む計5点の須恵器が出土している。

両棺台付近から石室入口部にかけてはかなりの攪乱を受けており，床面より遊離したものや石室前面に転落したものが多くみうけられる。宝珠つまみを有して後述する3類に分類した一括の須恵器（16～20・22～24）は，鉄釘（60）付近の石材欠損痕に転落していたものである。また東側の棺台から石室前面にかけての石室東半部には，金銅製大刀装具が散見される。大刀装具に伴う刀身は確認できなかったが，東棺台の間から2点の鞘金具（図化69のみ）や入口部分から責金具が密着した鞘口金具（67），石室前面から圭頭状柄頭（66），懸面孔金具（71・72），鞘金具（70）が出土している。これらはこの付近のいずれかの被葬者に伴い，副葬されていたものと想定される。

現存する石室入口から約2ｍの間は床面がかなり傾斜を呈し，この付近の西半部から小型の手づくね土器がややまとまって出土している。なお製塩土器（54）は，この入口部の埋土中から出土のものと石室前面から採集したものが接合している。

墳丘や周溝内からはほとんど古墳に伴う遺物は検出されず，ただ1箇所の西側の周溝端部付近の溝底面から，ややまとまって須恵器甕の胴部の破片が出土しているのみである。いずれも細片のため，図化することができなかった。

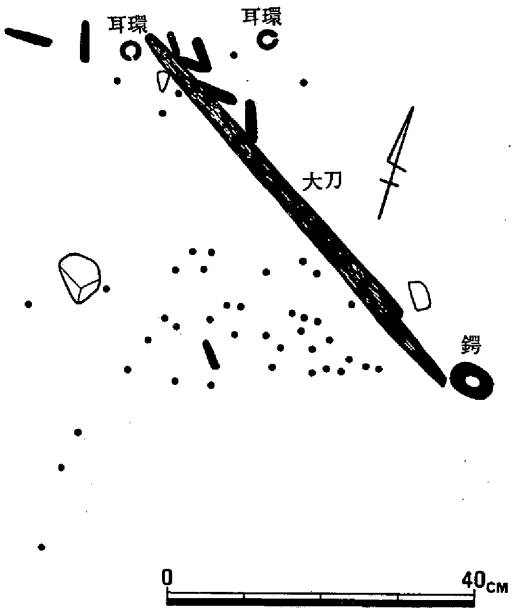


第13図琴海1号墳遺物出土状況（S＝1/80）

E. 出土遺物

土器類（第15～18図）

須恵器（1～38）　石室内並びに石室前面の埋土の選別から総計48点の器形を確認しており，その中から実測可能であった38点の図化を行った。各器種の詳細な観察は後記の表に列記したため，ここでは出土状態や各々の器種の胎土，焼成等から同一工房や窯のセット関係の把握を第一に行い，次いで形態の変化のとらえやすい蓋杯の分類を行った。



第14図　ガラス小玉出土状況（S＝1/10）

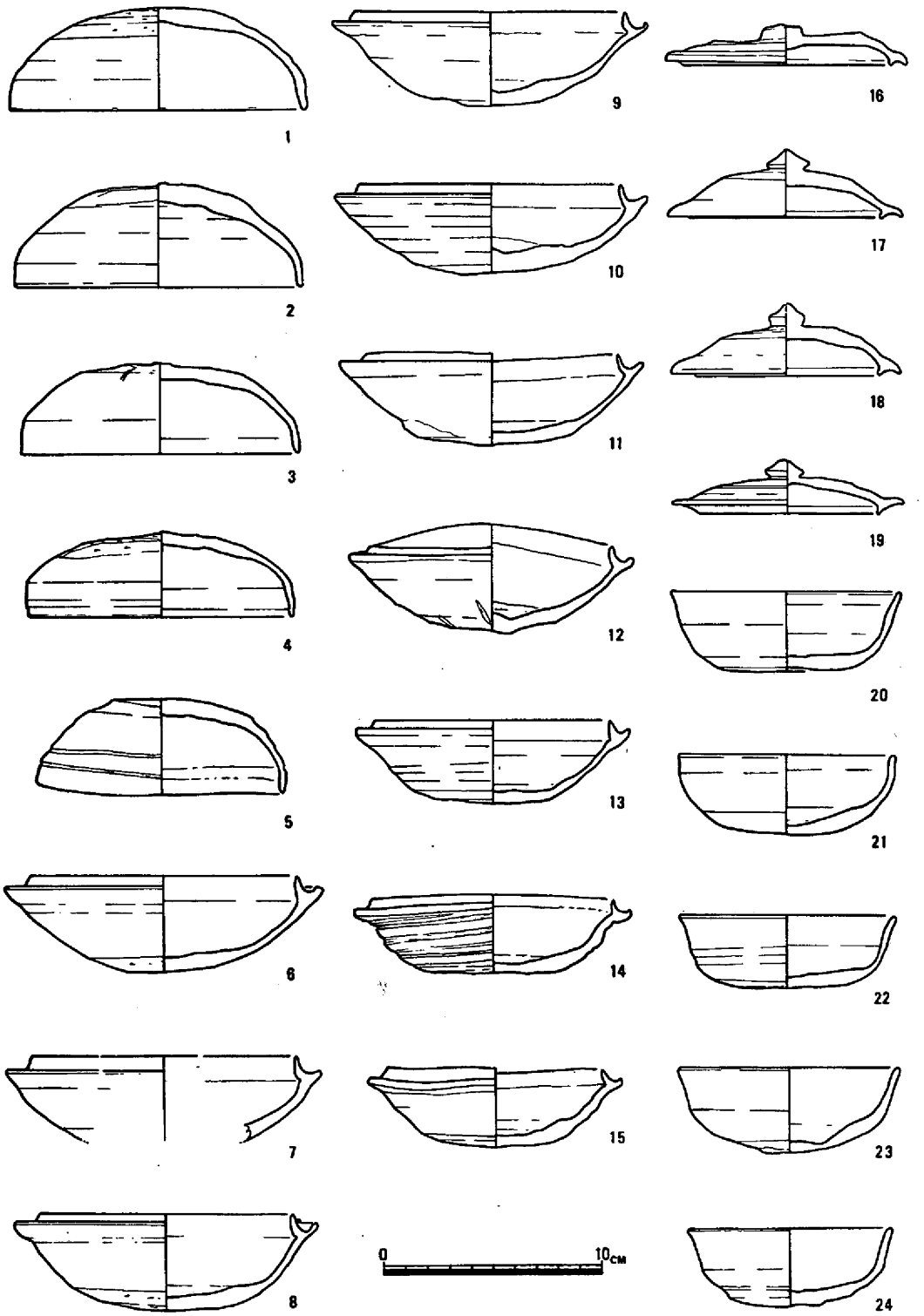
先ず，石室東側壁の石材抜き取り痕に転落の一括土器（16～20，22～24）が把握できる。いずれも原位置になく，床面から転落していたため図化を行わずに取り上げているが，第13図60鉄釘付近の出土である。宝珠つまみを有し，口縁端部にかえりを持つ杯蓋（16～19）4点と椀形の身（20，22～24）の4点がセットとなり，一括副葬品として確実にとらえられる。21については，これらの器種の杯身として掲載したが，出土地点が異なることや口縁部の立ち上りが，他の器形と比して内彎気味なこと等から，杯蓋として取り扱った方がよさそうである。この他には，これらと同時埋葬の器種は確認できない。

東側棺台の周囲からは，高杯（29～31），台付壺（32），壺口縁部（33）の4点が床面に接し，一括出土している。このうち高杯（30，31）と台付壺（32）の3点は，焼成堅緻な自然釉のかかった優秀品で一見して他と峻別でき，同一窯の製品とみられる。他の2点を含めて副葬時には一括埋葬された可能性がある。

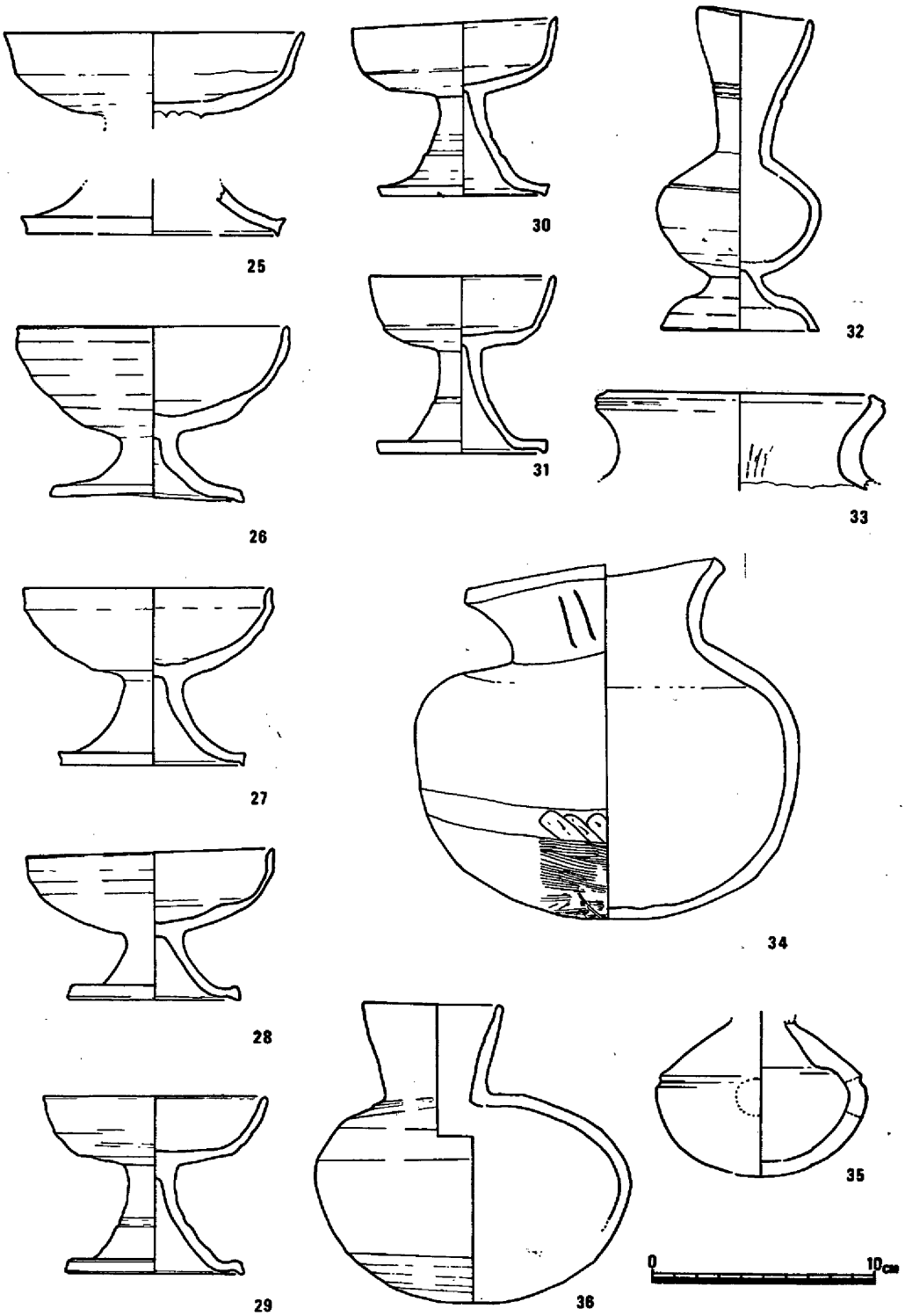
その他，入口部分から石室前面にかけて床面より遊離して散見された杯身（9）と高杯（20）は，ともに軟質な焼成を呈し，胎土も類似している。また石室奥壁に接し一括出土した須恵器10点，土師器3点のグループについては，追葬時の二次的移動が考えられ，副葬の同時性は薄いが追葬時の最終時期以前の遺物と考えられる。これらの一括出土遺物中のセット関係は確実にとらえがたいが，3と6は色調がやや異なるものの，胎土や焼成が酷似して底部の未調整に類似点が認められる。7と10～12についても，胎土・焼成・底部のヘラ削り痕跡に類似した特色がある。1の杯蓋と6の杯身については，セットになる可能性がある。

次に，出土須恵器中最も形態的変化がとらえやすい蓋杯24点を，その特徴から3分類を行った。

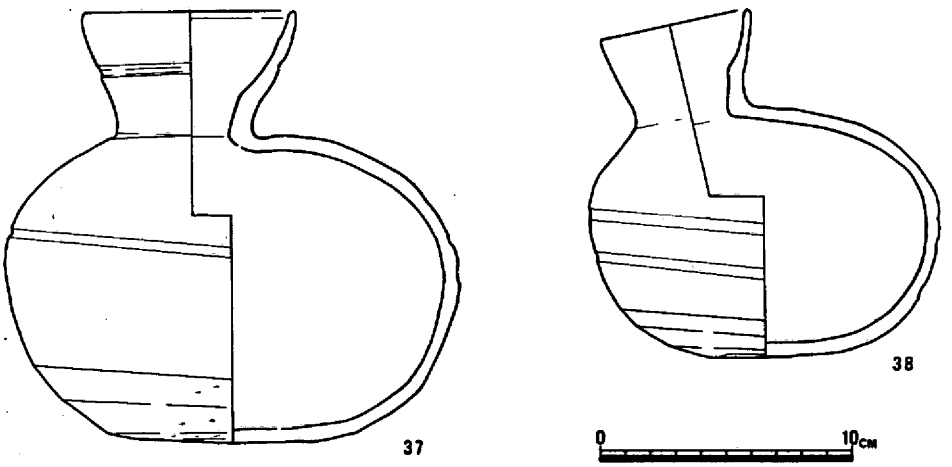
第1類は杯蓋（1～4），杯身（7～11）である。杯蓋は口径12～13.2cm，高さ4～4.8cmを測り，第2類と比較して器形が大きくてやや厚手のつくりである。天井部に明瞭なヘラ削り痕が認められ



第15図　琴海1号墳出土・土器(1)（S＝1/3）



第16図　琴海1号墳出土・土器(2)(S＝1/3)



第17図　琴海1号墳出土・土器(3)（S＝1/3）

る。杯身は最大径13.7～14.4cm，高さ4～4.4cmを測る。受部立ち上りは6mm前後を測る。さらに細別すれば，6や8の如くやや厚手で底部のヘラ削りによる稜線が明らかなものと，10や11の如く，やや薄手で底部が十分に整形されなくてヘラ起し程度の調整のものとがある。

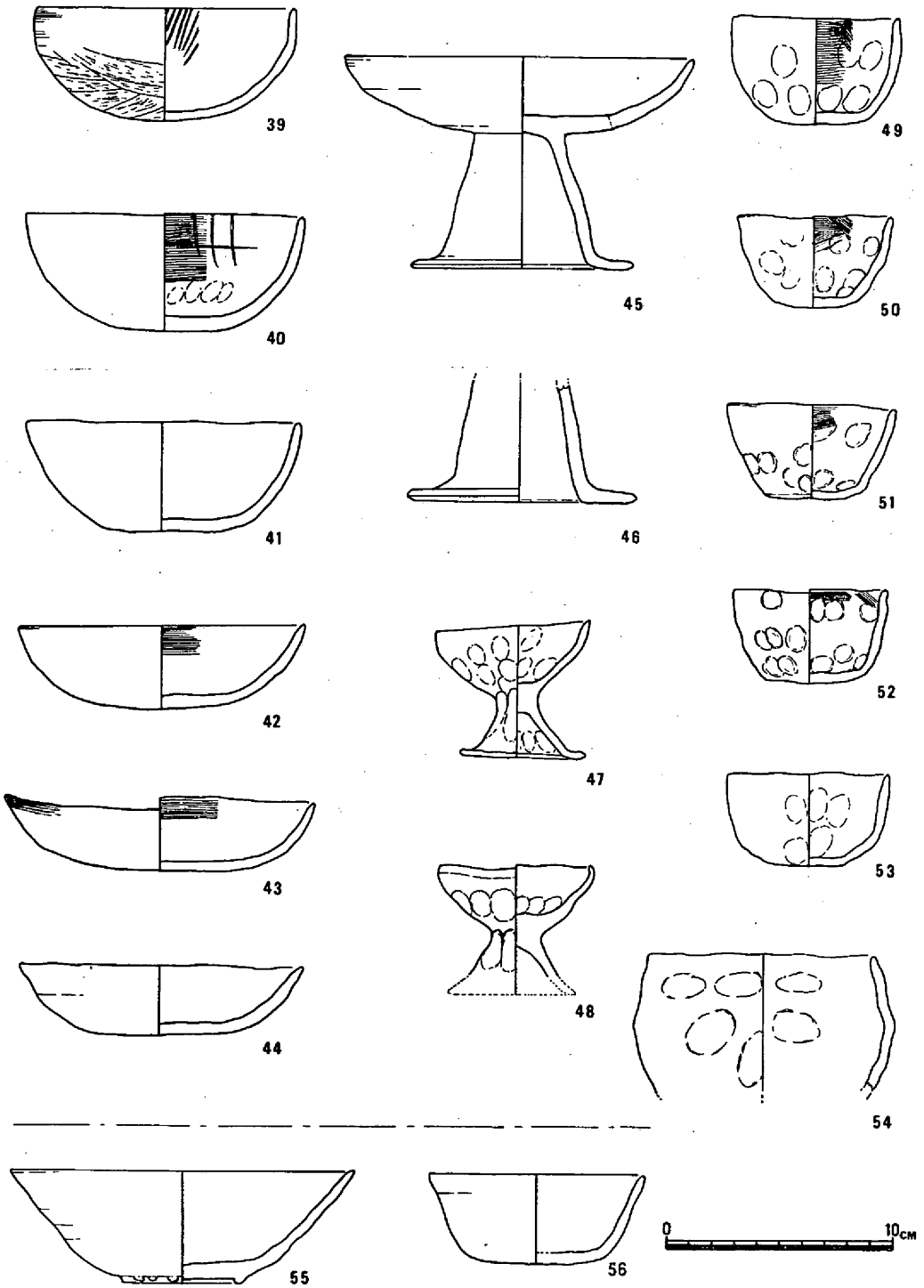
第2類は杯蓋（5），杯身（12～15）である。第1類に比較してやや小型で薄手のつくりを呈し，ロクロ目が顕著で頂部の調整が不明瞭なものが多い。21は杯身として図化掲載したが，前記の如く杯蓋の可能性が強いのでこの範疇に含めた。杯身は最大径11.5～12.4cm，高さ3.5cm前後，受部の立ち上りは5mm程である。

第3類は石室入口付近から一括出土の杯蓋（16～19），杯身（20，22～24）である。第1・2類とは形態的に大きな差異が認められる。杯蓋は頂部に宝珠形のつまみを有し，口縁端部にかえりを持ち，最大口径10.5～11cm，高さ2～3cmを測る。杯身は口径9.5～10.5cm，高さ3.4～4cmを測り，口縁部は外反して立ち上っている。細分すれば，16の如くやや偏平なつまみを有して口径のやや大きいものと，17～19の如く宝珠形のつまみのつくものとがある。

土師器・製塩土器（39～54）　石室並びに石室前面の埋土選別中から21点の個体を確認し，そのうち16点の図化を行った。出土遺物は，深い椀形のもの（39～41），やや浅い皿状のもの（42～44），高杯形のもの（45・46）等の一般的な器種と，小型の手づくね土器（47～53）と製塩土器3片（54，1点図化）に分けられる。

このうち小型の手づくね土器は，出土した7点のうち6点までが石室入口部分にまとまって出土している。いずれもやや粗い胎土を持ち，指頭圧痕が顕著に認められるものである。これらの土器に伴う副葬時の一括遺物は十分に確認できないが，付近に散見される須恵器の蓋杯の特徴から，分類した第2・3類に属するようである。

製塩土器はいずれも小片で，図化した以外に石室入口付近と石室前面の埋土中から格子状のタタキ



第18図　琴海1号墳出土・土器(4)（S＝1/3）

目痕跡を有するものが出土している。54は石室入口付近と石室前面の埋土中から出土したのが接合したものである。二次的に火を受けてかなり変色し，表面が剝離している。

本墳出土の土師器の特徴は，水漉精製粘土を使用した普遍的な器種が42～44の3点以外はみられず，他のいずれのものも多少の違いはあるが，やや粗い胎土に雲母片等を多く含んだものが使用されている。また，40と41の椀形土器については，製塩土器にみられたと同様な二次的な火を受けた様子がみうけられる。

中・近世土器（55・56）　石室前面は現代のゴミ捨場になっており，この中から石室内より転落した古墳の遺物とともに，中・近世の陶磁器片がかなり出土している。さらに石室内の埋土上層や墳丘部からも中・近世の陶磁器片が出土している。これらの出土遺物のうち，やや量の多かった小型の椀（55）と，石室西側の側壁上面から出土した椀（56）の図化を行った。

表1　土器観察表

器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	15-1	口径 13.3 器高 4.7	稜線は不明瞭で天井部より口縁部まで丸くおさめている やや厚手のつくりである	天井部外面は左回りのヘラ削り 他はヨコナデ	焼成　良好 胎土　密 色調　外面 暗青灰色 内面 暗紫灰色 完形
杯蓋	15-2	口径 13.0 器高 4.7	天井部は丸味を持ち，やや稜線が残る	天井部外面はヘラ削り ヘラ起こし痕が残る	焼成　良好 胎土　密，黒色粒含む 色調　外面 暗灰色 内面 暗紫灰色 完形
杯蓋	15-3	口径 12.5 器高 4.1	天井部は丸味を持ち，やや稜線が残る	天井部外面はヘラ起こし後軽くナデ 天井部内面ナデ仕上げ	焼成　良 胎土　密 色調　淡青灰色（外面やや黄味おびる） 完形
杯蓋	15-4	口径 12.0 器高 4.0	稜線より口縁端部にかけてやや直立気味である	天井部外面ヘラ削り 天井部内面ナデ仕上げ	焼成　良好 胎土　密，黒色粒を若干含む 色調　外面 暗灰色 内面 淡灰色 断面 茶褐色 完形
杯蓋	15-5	口径 10.2～11.0 器高 4.4	天井部より口縁部まで丸くおさめている 体部下半に2本の沈線あり	天井部外面ヘラ起こし後ナデ	焼成　良好 胎土　密，黒色粒を含む 色調　暗灰色 完形　歪み大
杯身	15-6	口径 11.8～12.0 受部径 14.4 器高 4.5	立ち上りは内傾して高さ7mmを測る	底部外面はヘラ削り 他はヨコナデ	焼成　良好 胎土　密，黒色粒若干含む 色調　外面 淡灰色 内面 青灰色 完形

琴海1号墳

器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯身	15-7	推定口径 11.9 推定受部径 14.0	立ち上りは高さ8㎜を測る	底部外面はヘラ削り 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 外面 青灰色 内面 灰色 残 1/6 程度
杯身	15-8	口径 11.5 受部径 13.7 器高 4.5	立ち上りは内傾して高さ7㎜を測る	底部外面はヘラ削り 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密，黒色粒含む 色調 暗灰色（外面一部暗紫灰色） 完形
杯身	15-9	口径 11.8～12.2 受部径 14.0～14.3 器高 4.3	立ち上りは内傾して高さ7㎜を測る	底部外面はヘラ起こし 他はヨコナデ	焼成 やや軟 胎土 密 色調 外面 暗茶灰褐色 内面 茶灰褐色 復元
杯身	15-10	口径 11.5～12.0 受部径 14.2 器高 4.1	立ち上りは内傾して高さ7㎜を測る	底部外面はヘラ起こし後ナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 砂粒かなり含む 色調 暗紫灰色 完形
杯身	15-11	口径 11.4～11.8 受部径 13.7～14.0 器高 4.2	立ち上りは内傾して高さ6㎜を測る	底部外面はヘラ起こし後丁寧なナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 砂粒多く含む 色調 外面 淡灰色（自然釉） 内面 青灰色 完形 歪み
杯身	15-12	口径 10.6～11.2 受部径 12.6～13.1 器高 3.8	立ち上りは内傾して高さ6㎜を測る	底部外面はヘラ起こし 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密，黒色粒含む 色調 暗青灰色 完形 歪み大
杯身	15-13	口径 10.2～10.6 受部径 12.1～12.5 器高 3.8	立ち上りは内傾して高さ5㎜を測る	底部外面はヘラ起こし後ナデ 一部ヘラ削り有り 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 外面 暗灰色 内面 暗灰色 完形 歪み
杯身	15-14	口径 10.1～10.8 受部径 12.0～12.6 器高 3.6	立ち上りは内傾して高さ6㎜を測る	底部外面はヘラ起こし後軽くナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密，黒色粒含む 色調 外面 暗灰色～淡灰色 内面 青灰色～灰白色 完形
杯身	15-15	口径 9.8 受部径 11.5 器高 3.6	立ち上りは内傾して高さ5㎜を測る	底部外面はヘラ起こし後ナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 青灰色 完形 歪み半分
杯蓋	15-16	口径 9.5 最大径 11.0 器高 1.9	口縁部の内側にかえりを有し，突出している 高さ7㎜のつまみを有す	天井部外面はヘラ削り 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 淡青灰色～暗青灰色 完形

琴海1号墳

器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯蓋	15-17	口径 8.8 最大径 10.8 器高 3.2	口縁部の内側にかえりを有し，突出している 高さ1.0cmのつまみを有す	天井部外面はヘラ削り 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 青灰色 完形
杯蓋	15-18	口径 8.4 最大径 10.5 器高 3.4	口縁部の内側にかえりを有し，突出している 高さ1.0cmのつまみを有す	天井部外面ヘラ削り？ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 濃青灰色 完形
杯蓋	15-19	口径 8.2 最大径 10.6 器高 2.5	口縁部の内側にかえりを有し，突出している 高さ8mmのつまみを有す	天井部外面はヘラ削り 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 暗青灰色 完形
杯身	15-20	口径 10.6 器高 3.7	口縁部はやや外反し，端部は丸い 底部はやや平坦である	底部はヘラ起こし 底部内面はナデ仕上げ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密，黒色粒若干含む 色調 暗灰色 完形
杯身（蓋）	15-21	口径 9.9 器高 3.7	体部は内彎して立ち上り，端部は丸い 底部は丸味を持つ	底部はヘラ起こし 後ナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密，黒色粒多く含む 色調 外面 暗紫灰色 内面 暗青灰色 完形
杯身	15-22	口径 10.0 器高 3.3	口縁端部はやや外反し，端部は丸い	底部はヘラ削り？ 後ナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 暗青灰色 完形
杯身	15-23	口径 10.2 器高 3.9	口縁部はやや外傾し，端部は丸い	底部外面はヘラ起こし後ナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 外面 灰色 内面 暗灰色 完形
杯身	15-24	口径 9.4 器高 3.6	口縁部はやや外反し，端部は丸い	底部外面はヘラ起こし後ナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 外面 暗灰色～暗灰白色 内面 淡青灰色 完形
高杯	16-25	口径 13.0～13.5 推定脚径 10.4	口縁部はやや外反気味である 脚部はゆるく大きく開き，脚端はやや肥厚している	杯部の底部外面はヘラ削り 他は全てヨコナデ	焼成 良 胎土 やや粗 色調 濃灰色 杯部と脚部の1部
高杯	16-26	口径 12.3 器高 7.7 脚径 8.8 脚高 2.8	杯部口縁は内彎してのび，端部は丸い 脚部は脚端近くで屈曲している	表面の状態悪く不明確	焼成 悪くなま焼け 胎土 密，黒色粒含む 色調 外面 黄灰色 内面 黄灰色～暗茶褐色 完形

琴海1号墳

器形	番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	16-27	口径 11.3 器高 8.0 脚径 8.3 脚高 3.9	杯部は椀状を呈し，端部でわずかに内彎している	内外面ともヨコナデ	焼成 良 胎土 砂粒やや多く含む 色調 灰色 完形
高杯	16-28	口径 11.1 器高 6.7 脚径 7.9 脚高 3.0	杯部は内彎してのび，端部は丸い 脚部は大きく開く	16-27 と同一手法	焼成 良好 胎土 密 色調 外面 暗灰色 内面 灰色～暗灰色 完形
高杯	16-29	口径 10.1 器高 8.0 脚径 8.2 脚高 4.8	脚端は大きく開く 脚部中央に1本の沈線を施す	杯部下半はヘラ削り後ナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 黒灰色やや光沢を持つ 完形
高杯	16-30	口径 9.3 器高 7.9 脚径 7.6 脚高 4.4	杯部外面に稜線を持つ 脚端は大きく開く 脚部中央に1本の沈線を施す	杯部下半はヘラ削り後ナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 堅緻 胎土 密，黒色粒含む 色調 黒灰色 自然釉 完形
高杯	16-31	口径 8.4 器高 8.0 脚径 7.7 脚高 4.6	16-30 と同一形態	16-30 と同一手法	焼成 良好 堅緻 胎土 密，黒色粒含む 色調 黒灰色 自然釉 完形
台付長頸壺	16-32	口径 5.2 器高 14.5 脚径 7.0 脚高 2.4	口縁部はやや内彎気味 体部上半に1本の沈線を施す	体部下半ヘラ削り後ナデ 他はヨコナデ	焼成 良好 堅緻 胎土 密 色調 黒灰色 自然釉 完形
壺	16-33	口径 13.0	口縁部は外反し，端部に沈線を持つ	口縁部ヨコナデ 体部内面青海波タタキ	焼成 良好 胎土 密 色調 濃灰色 一部に黒沢 残存 口縁部 1/3
短頸壺	16-34	口径 11.8 器高 15.9 胴部径 17.3	口縁部は外反し，立ち上る 口縁部外面に2本のヘラによる刻目	底部外面ヘラ削り後ハケ目 ヘラ削り一部残る 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密，黒色粒含む 色調 外面 淡灰色～暗灰色 内面 淡灰色 自然釉 完形
甕	16-35	推定体部径 9.4 推定体部高 7.0	体部外面に1本の沈線あり	底部外面ヘラ削り 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 灰色～濃灰色 残存 体部 1/3
平瓶	16-36	口径 6.4 器高 13.5 胴部径 14.3 頸部径 4.7 頸部長 4.2	口縁部は体部中央よりずらしてほぼ垂直に接合している	底部はヘラ起こし後ナデとヘラ削り 他はヨコナデ	焼成 良 胎土 密 色調 外面 淡灰色～淡茶灰色 内面 淡灰色 完形

器形	番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手法の特徴	備 考
平瓶	17-37	口径 8.2 器高 17.4 胴部径 17.6 頸部径 5.2 頸部長 5.0	口縁部は体部中央よりずらしてほぼ垂直に接合している 体部に1本の沈線を施す	底部外面ヘラ削り 他はヨコナデ	焼成 良好 堅緻 胎土 密 色調 淡灰色～淡緑灰色 断面 暗紫褐色 自然釉 完形
平瓶	17-38	口径 6.0 器高 14.0 胴部径 13.7 頸部径 4.4 頸部長 3.6	口縁部は体部中央よりずらして13度の角度で接合している 体部に2本の沈線を施す	底部外面はヘラ削り 一部にヘラ起こし痕が残る 他はヨコナデ	焼成 良好 胎土 密 色調 暗青灰色 断面 暗紫褐色 自然釉 完形
椀	18-39	口径 11.6 器高 5.0	口縁部はやや内彎している	体部より下半の外面はヘラ削り 口縁部外面はヘラ磨き 内面は剥離	焼成 良 胎土 粗 色調 淡茶褐色 残存 ½
椀	18-40	口径 12.3 器高 5.2	底部から内彎して端部に至る 内面に4本のヘラ刻目あり	外面は口縁部でヨコナデ 内面は不定方向のナデ 内外面とも圧痕	焼成 良 胎土 粗 色調 赤褐色 完形 整形良
椀	18-41	口径 12.2 器高 4.8	底部は平底気味	内外面とも剥離	焼成 良 胎土 粗 色調 灰色～赤褐色 完形 歪み小
皿	18-42	口径 12.8 器高 3.7	平底を呈し，口縁端部は丸くおさめている	内面に一部ナデ痕がみられる以外は剥離	焼成 良 胎土 密，精製粘土 色調 淡赤褐色 完形
皿	18-43	口径 12.2～14.0 器高 3.2	18-42 と同一形態	口縁部の内外面に一部ナデ	焼成 良 胎土 密，精製粘土 色調 明赤褐色 完形 歪み大
皿	18-44	口径 12.7 器高 3.2	18-42 と同一形態	内外面剥離	焼成 良 胎土 密，精製粘土 色調 茶褐色 完形
高杯	18-45	口径 15.5 器高 9.5 脚径 10.0 脚高 6.0	脚部中央はややふくらみ気味で，脚部は屈曲し開く	杯部外面にナデ 杯部内面に磨き痕 他は剥離して不明	焼成 やや軟（杯部に黒斑） 胎土 やや粗 色調 褐色 完形
高杯	18-46	推定脚径 10.1	18-45 と同一形態	内外面とも剥離	焼成 良 やや軟 胎土 やや粗 色調 褐色 残存 ⅓

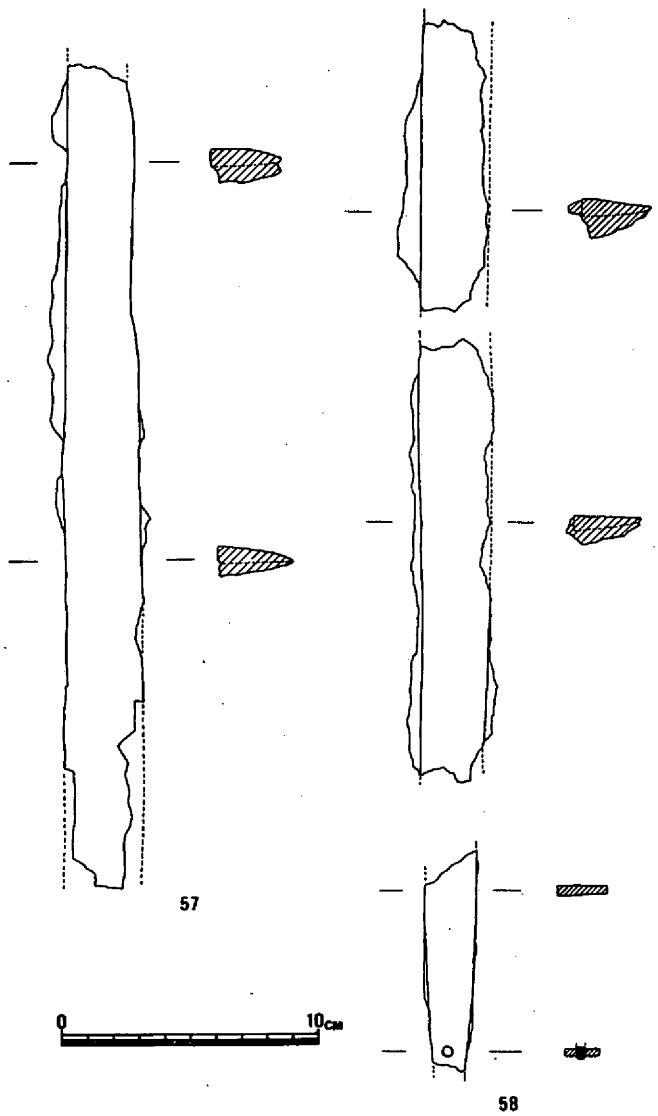
器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	18-47	口径 6.8 器高 5.9 脚径 5.6 脚高 2.5	脚部は徐々に広がり，脚端で屈曲し開く	内外面とも指頭圧痕	焼成 良 胎土 粗 色調 赤褐色 完形 歪み
高杯	18-48	口径 6.6～7.0	口縁端部はやや内彎している	18-47 と同一手法	焼成 良 胎土 粗 色調 赤褐色 脚部欠損 歪み
椀	18-49	口径 7.4 器高 4.8	やや内彎気味に立ち上る 底部はやや平底	内外面とも指頭圧痕 内面にヨコ方向のハケ目	焼成 良 胎土 粗 色調 淡褐色 完形
椀	18-50	口径 6.5～7.0 器高 4.1	18-49 と同一形態	18-49 と同一手法	焼成 良 胎土 粗 色調 赤褐色 完形 歪み
椀	18-51	口径 7.5 器高 4.2	18-49 と同一形態	18-49 と同一手法	焼成 良 胎土 粗 色調 淡茶褐色 完形
椀	18-52	口径 6.3～6.6 器高 4.2	18-49 と同一形態	18-49 と同一手法	焼成 良 胎土 粗 色調 淡茶褐色 完形
椀	18-53	推定口径 7.1 器高 4.1	18-49 と同一形態	18-49 と同一手法	焼成 良 胎土 粗 色調 淡褐色 残存 ½
製塩土器	18-54	推定口径 10.0	体部から口縁に向って内彎	内外面とも指頭圧痕	焼成 良好 胎土 粗 色調 淡褐色～赤褐色，黒褐色 破片
椀	18-55	口径 15.4 高さ 5.0	底部は平底を呈し，高さ2㎜の高台を付す 口縁は大きく外反する	底部外面に板目痕他はヨコナデ	焼成 良 胎土 密 色調 褐色，断面 淡褐色 残存 ½ 程度
椀	18-56	口径 9.6 高さ 4.0	平底気味の底部から大きく外傾して端部に至る	内外面とも不明瞭	焼成 良 胎土 密，精製粘土 色調 淡褐色 残存 ½ 程度

棺　　具（第20図）

鉄釘（59～65）　石室中央から入口にかけて明らかに鉄釘と判断できたものが8本出土している。これらの鉄釘は棺痕跡に伴う規則的な配列が認められず広範囲にわたり，しかも床面より遊離したものを多く含むことから，追葬や盗掘により二次的にかなり移動している様子であった。完形品はいずれも同形同大で長さ10cm強，一辺7～8mmの方形の断面を呈し，頭部を「く」の字状に折り曲げている。

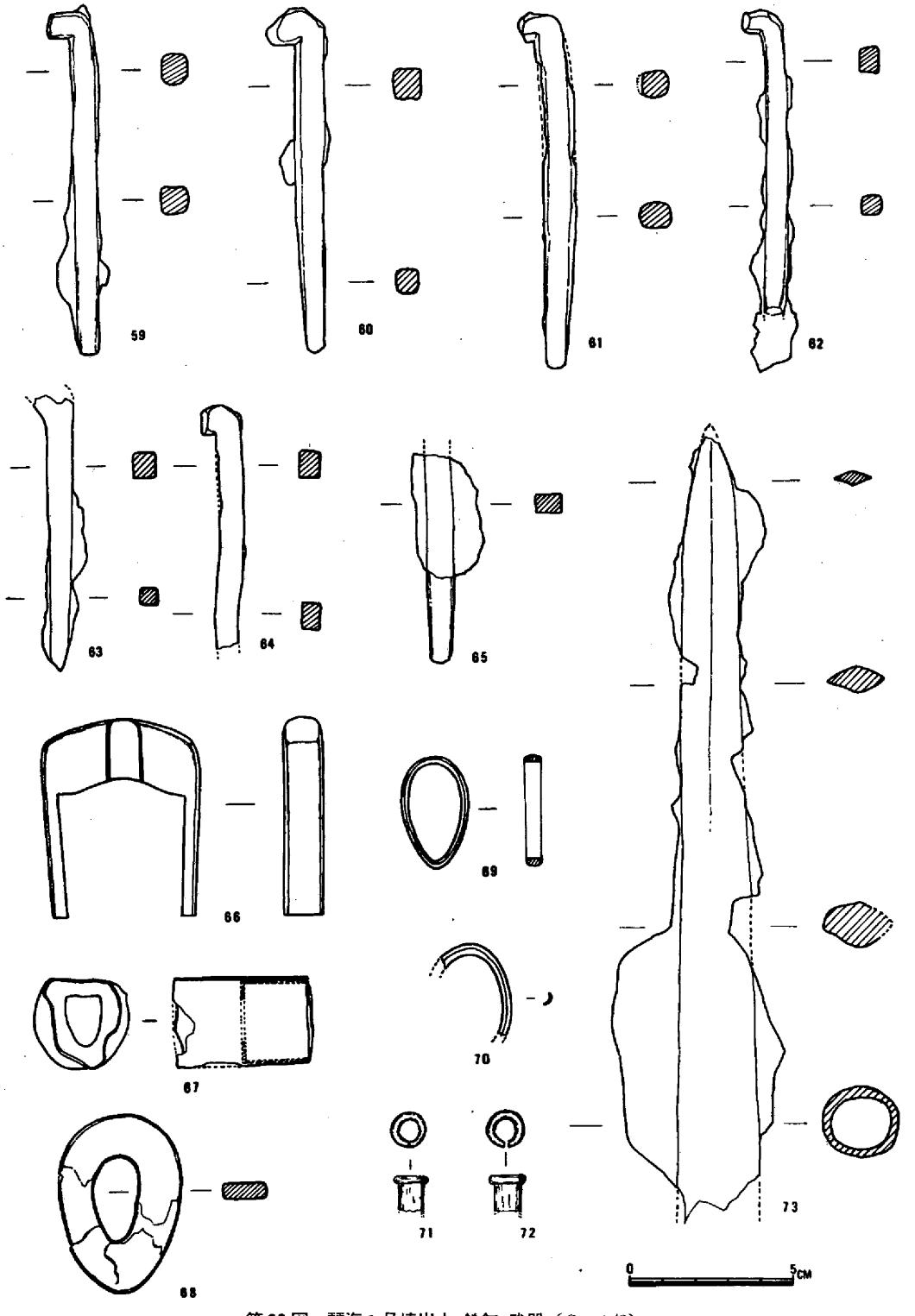
武　　器（第19～21図）

大刀（57・58）　石室内から2振の大刀の断片が出土している。いずれも大半が欠損し，全体の規模は不明である。57は石室内奥壁近くの床面から，石室長軸に平行して出土した。銹化が著しく剝離した破片が周囲に散在していた。実測可能であったものは，身の一部で，残存長33cm，幅2.5～3.0cm，棟幅7mmを測る。58は，石室内西側床面からガラス小玉，耳環とともに出土した。実測可能であったのは茎，身の一部のみである。茎は残存長9cm，最大幅2cm，最小幅1.2cmを測り，茎尻に向って徐々に幅を減じている。茎尻近くには目釘孔が1箇所残り，径3mm程の目釘が残存している。身は2片実測可能で，残存長29cm，幅2.5～3.0cm，棟幅6～7mm程である。いずれも銹化が著しい。

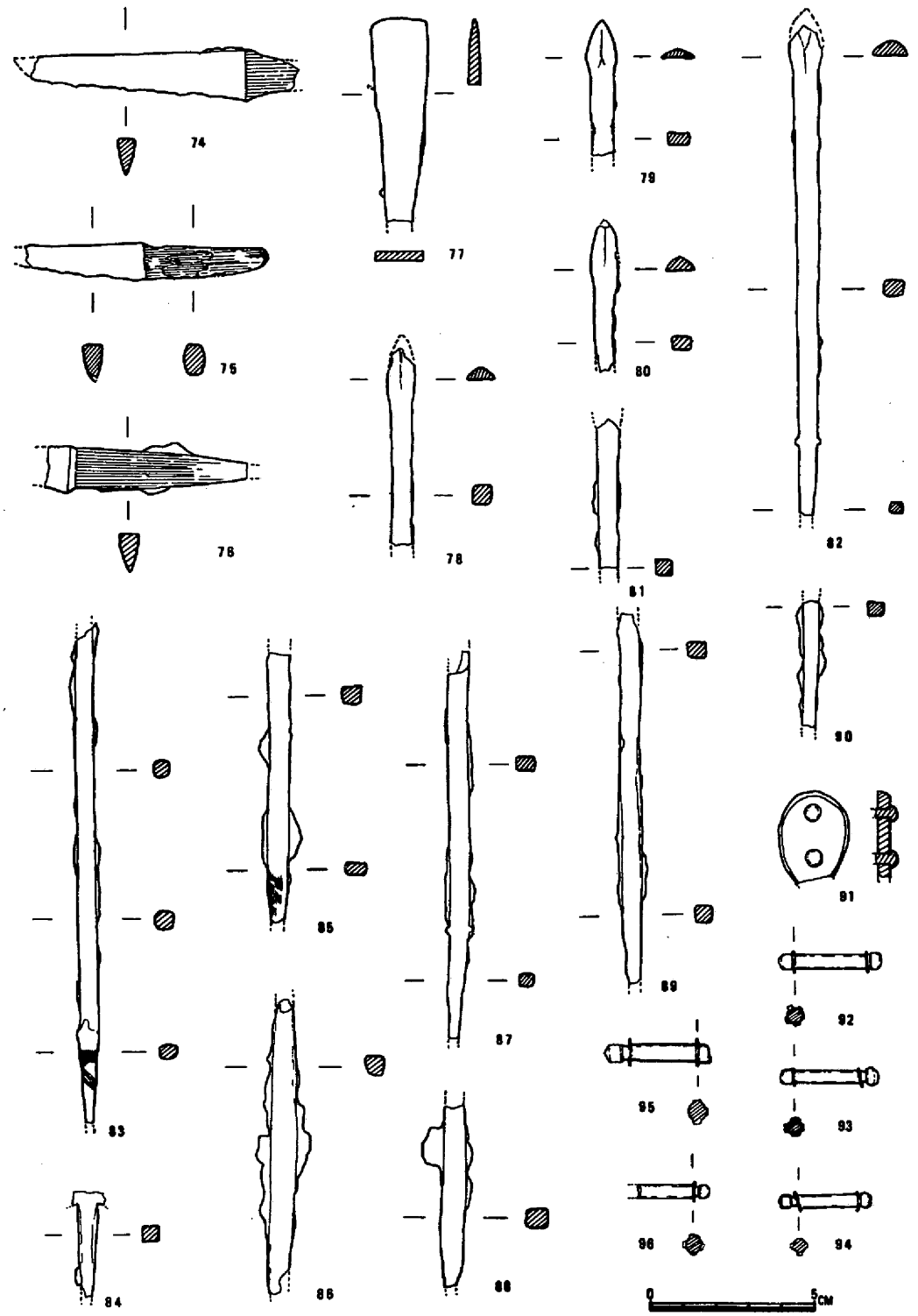


第19図　琴海1号墳出土武器（S＝1/3）

鍔（68）　大刀（58）の茎付近より出土したもので，おそらくこれに装着されたものであろう。長径5.4cm，短径3.8cmを測る無窓頭卵形のものである。かなり銹化し肥厚しているが，厚さ3mm程であったと推定される。



第20図　琴海1号墳出土･鉄釘･武器（S＝1/2）



第21図　琴海1号墳出土・武器・その他（S＝1/2）

柄頭（66） 石室前面の埋土中から採集した金銅製の圭頭状の柄頭である。土圧により変形していたため復原図化を行った。内部空洞の薄手のつくりで，柄尻は山形になり長径6cm，短径5cmを測る。

懸通孔金具（71・72） 石室前面の埋土中からいずれも採集した金銅製で円形の金具である。ともに長さ1cm，径1.2～1.3mmを測り，一端を丸く折り曲げている。おそらく60の柄頭に伴うものであろう。

鞘金具（67・69・70） 東側棺台周辺から石室前面にかけて，金銅製の金具4点（3点図化）が出土した。67は石室入口部分から出土した鞘口の金具で，内部に責金具が遺存している。土圧により歪んでいるが，復原すれば卵頭形を呈すとみられる。長さ4.3cm，長径2.9cm，短径2.7cmを測る。内部の責金具は全長2cm，長径2.7cm，短径2.4cmを測る。69は東側棺台の間から出土の卵頭形の金具で，長径3.4cm，短径2cm，幅5mm，厚さ2mmを測る。70は石室前面から採集した薄手の金具片である。破片から推定して長径3.5cm程の卵頭形を呈すものであろう。他に1点，これよりやや薄手で同様の形態の金具が棺台間より出土している。これら一連の金銅製の鞘金具は，出土状況や出土位置等から圭頭状柄頭を装着した大刀に伴っていたものと想定される。

鉄鉾（73） 石室内の床面よりやや遊離した状態で出土した。残存長24cm，最大幅2.5cmを測る細身の鉄鉾である。身部は菱形の断面を呈し，先端に向って徐々に細まる。袋穂部は中空円形をなし，中に木質が残存している。

刀子（74～76） 3点出土している。いずれも完形品でなく，全長は不明である。74は東側棺台の間から出土したもので，切先の一部と茎の大半が欠損している。残存長7.8cm，身最大幅1.5cm，棟幅4mmを測る。身部の中央はかなり狭く，砥き減りしている。75は石室内西側棺台の間より出土したもので，切先の一部を欠く。残存長7cm，茎部長3.7cm，棟幅5mmを測り，茎部に木質が残っている。77は入口部の床面からやや遊離して出土した茎部である。残存長6cmを測り，木質が明瞭に残存している。

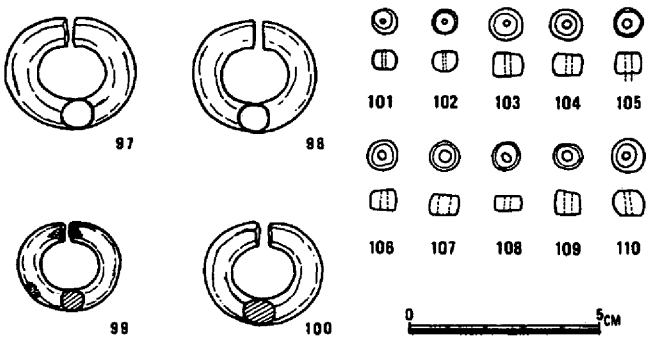
鉄鏃（77～88） いずれも完形品はなく，石室内の広範囲な場所から21点の破片が出土している。床面よりかなり遊離し，銹化折損したものが多く，二次的移動を受けた様子であった。全体に長頸鏃で鏃身が尖根式丸造り（78～82）のものが多く，出土した身部片から最低5本は数えられる。身部長1.5cm，幅0.8～1cm，厚さ3～4mm程を測る。箆被部は厚さ5～6mmの方形の断面を呈し，82で長さ11cmを測る。茎部は端部に向って徐々に狭まる方形の断面を呈し，長さ4cm程と推定される。77は東側棺台の間から出土した残存長6cmを測る平根式で，のみ頭造りのものである。銹化と剝離が著しいが厚さ3mm程を測る。84は残存長3.3cmを測る茎部の破片である。身部の一部から平根式で腸抉を持つものと想定される。

留金具（91） 石室内の排水溝より出土したほぼ楕円形を呈する金具である。長径2.7cm，短径2.2cm，厚さ4mmを測り，2箇所に径2mm程の鋲が認められる。銹化が著しい。

棒状鉄器（92～96） 石室内の埋土選別中に5点採集した。長さ2.7～3.3cm，径4mm前後の円形の断面を呈する。両端部はややふくらみ，その内側に浅い溝が巡って花弁状に薄い突起を4～5枚取りつけている。中心の棒状部分には木質が残る。

装身具（第22図）

耳環（97～100）　4点出土した。97と98は石室内西側の床面で30cmの間隔を置きセットで出土した。いずれも長径3.3cm×短径2.9cm，径8mmを測る中空円形の断面を呈するものである。剝離部分から判断して，銀地に金貼り製である。99は出土4点中で最も小型のもので，長径2.7cm，短形2.4cm，径6mmを測り，円形の断面を呈する。欠損部分の状況から判断して，銅心銀貼り製であろう。100は完形品で，長径3.1cm，短径2.7cm，径0.7mm×0.8mmを測るやや楕円形の断面を呈する。表面に緑錆が付着している状況から，銅心で銀貼り製と推察される。



第22図　琴海1号墳出土・装身具（S＝1/2）

表2　耳環計測表

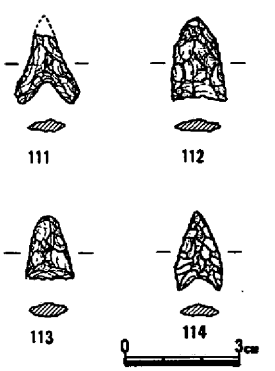
番号	長径(cm)	短径(cm)	断面(cm)	接合部間隔(cm)	重量(g)
97	3.25	2.92	0.77	0.23	5.6
98	3.27	2.94	0.79～0.83	0.21	5.4
99	2.59	2.35	0.55	0.14	9.6
100	3.08	2.72	0.7～0.84	0.24	25.2

土玉（101～102）　2点出土した。このうち1点は，石室内西側のガラス製小玉と一緒に床面から出土し，他の1点もその付近の埋土中からの採集である。いずれもきめの細かい胎土を使用し，良く焼きしまった漆黒色を呈している。

ガラス小玉（103～110）　総数56点出土した（2点計測不可能）。土玉とともに石室西側の床面上の一括遺物で，原位置から43点を取り上げ，埋土中から13点を採集した。大きさは径7～9mm，厚さ4～8mmを測り，やや不揃いである。中心部の穿孔は平均6mm程度であるが，中には径3.5mmの孔を穿っているものも認められる。色調は紺色を基調とし，薄紺色から濃青色までバラエティーに富んでいる。裁断の両面はほとんどが平坦に研磨されているが，うち2点のみ片面が裁断したままである。

その他の出土遺物　（第23図）

石鏃（111～114）　石室内と石室前面の埋土中から，計4点の石鏃が出土している。いずれもサヌカイト製の無茎打製石鏃である。基底部は水平なもの（113），やや内彎するもの（112），円弧状に内彎するもの（114），大きく抉り込んだもの（111）と変化に富んでいる。刃部は，111が内彎している以外はやや外彎気味である。重量は欠損した111が0.7g，112が1.1g，113が0.8g，114が0.8gを量る。このうち111の長脚鏃は縄文時代のものであろう。113と114も形態的に古そうで，風化が著しい。



第23図　出土石器
（S＝1/2）

表3　玉 類 計 測 表

番号	径(mm)	孔 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	色 調	番号	径(mm)	孔 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	色 調
1	0.66	0.085	0.56	0.3	漆黒色(土玉)	28	0.78	0.24	0.69	0.75	青 色
2	0.68	0.08	0.49	0.3	漆黒色(土玉)	29	0.74	0.21	0.65	0.6	濃青色
						30	0.76	0.16	0.56	0.65	青緑色
3	0.79	0.145	0.61	0.7	青緑色	31	0.71	0.14	0.61	0.7	濃青色
4	0.67	0.14	0.62	0.7	青 色	32	0.88	0.15	0.62	0.85	濃青色
5	0.72	0.23	0.55	0.55	青緑色	33	0.91	0.12	0.67	0.9	青緑色
6	0.73	0.18	0.58	0.5	青 色	34	0.66	0.18	0.63	0.6	青緑色
7	0.75	0.255	0.51	0.5	青 色	35	0.92	0.21	0.52	0.75	青緑色
8	0.75	0.16	0.37	0.4	青 色	36	0.72	0.16	0.57	0.45	青 色
9	0.72	0.21～0.26	0.61	0.5	濃青色	37	0.85	0.17	0.64	0.7	青緑色
						38	0.77	0.21	0.48	0.5	青 色
10	0.85	0.17	0.62	0.8	青緑色	39	0.79	0.15	0.48	0.6	濃青色
11	0.79	0.18	0.59	0.5	青緑色	40	0.63	0.15	0.68	0.6	青緑色
12	0.89	0.19～0.23	0.51	0.55	濃青色	41	0.72	0.16～0.23	0.65	0.6	青 色
13	0.69	0.13	0.51	0.5	濃青色	42	0.73	0.13	0.65	0.6	青緑色
14	0.77	0.14	0.59	0.6	青緑色	43	0.76	0.24	0.59	0.5	青緑色
15	0.7	0.16	0.64	0.6	青緑色	44	0.73	0.14	0.58	0.5	青緑色
16	0.86	0.17	0.62	0.75	青緑色	45	0.93	0.14	0.57	0.7	濃青色
17	0.76	0.19～0.24	0.66	0.6	青緑色	46	0.81	0.15	0.71	0.9	青緑色
18	0.85	0.12	0.59	0.7	青緑色	47	0.72	0.15	0.59	0.6	青緑色
19	0.71	0.2	0.58	0.5	青 色	48	0.8	0.34	0.69	0.6	濃青色
20	0.93	0.17	0.53	0.7	濃青色	49	0.87	0.23	0.64	0.75	青緑色
21	0.86	0.14	0.69	0.9	青緑色	50	0.78	0.13	0.62	0.7	青緑色
22	0.84	0.22	0.75	0.8	青緑色	51	0.81	0.14	0.68	0.75	青緑色
23	0.8	0.19	0.44	0.55	青緑色	52	0.87	0.17	0.55	0.7	青緑色
24	0.91	0.17	0.59	0.8	青緑色	53	0.78	0.26	0.49	0.5	青 色
25	0.68	0.19	0.45	0.4	青 色	54	0.63	0.15	0.72	0.6	青緑色
26	0.75	0.14	0.57	0.6	青緑色	55	0.82	0.19	0.58	0.6	青緑色
27	0.76	0.23	0.48	0.7	濃青色	56	0.75	0.12	0.63	0.7	青緑色

5. 小　結

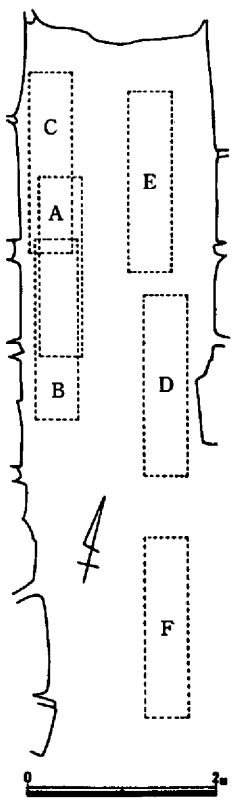
規模　本古墳は，児島半島の南端に近い標高144 m を測る神道山東斜面の標高41 m 付近に位置していた。古墳の前面には備讃瀬戸内海が広がり，眼下には海岸線がせまる平地の少ない地形を呈している。古墳の周辺は，戦後に開墾を受けて大幅に削平されており，古墳自体も石室の入口付近の崩壊や墳丘の削平等のため，良好な残存状態とは言えなかった。しかし，石室の完全な解体を含めた調査の結果からは，本墳の規模・構造等についてかなりの成果をあげることができた。

墳丘規模は，南側墳端部がすでに消失していたことや，墳丘封土が大幅に削平されていたことにより，正確な測定は不可能であった。調査により検出した残存周溝の計測からは，径12 m を測る円形に近い形状と推定された。墳丘高は，周溝低部のレベルの違いから測定点によってはかなり異なり，周溝レベルの最も高い北側では封土まで高さ1.5 m，南西の残存周溝端部では高さ2.7 m を計測できた。

石室はS14°E に開口し，東側壁残存長4.2 m，西側壁残存長7.4 m，奥壁幅1.9 m，最大幅2.1 m，最大高さ1.9 m を計測できた。石室平面形は，入口付近の一部石材の消失のため不明瞭ではあるが，胴張り無袖を呈する横穴式石室と判断した。また石室の全長については，西側壁がかなり良好に残っていたこと，周囲の開墾が石室にはほとんど及んでいないこと，墳端部の検出状況等から推察して，西側壁の残存長（約7.40m）もしくは若干長い程度であったと想定された。

追葬　横穴式石室墳が家族墓的な機能を有し，追葬が行われていたことは，多くの調査例で確認されているが，本墳でもこの例に漏れずかなりの追葬が行われていたことが実証された。前述した遺物の出土状況や，出土須恵器等の遺物の編年観から，被葬者の追葬回数について検討すれば以下の如く考えられる。

先ず，被葬者の耳環は4点出土しており，このうち確実に対となる2点は，50数点のガラス玉とともに，奥壁に近い西側の石室床面から，ほぼ安置された状態の出土状況を呈していた。棺痕跡や鉄釘の配列は確認できなかったが，頭部を奥に置き入口に向って安置された棺Aが考えられる。さらにこの棺の南側では，石材4点を設置して棺台として使用した別の棺Bが，前述の棺Aと一部が重複する配列状態にあることが想定された。この棺Bについては，付近から出土した頭蓋骨片や耳環1点が，この棺に伴うものと推察される。棺Aと奥壁との間はやや間隔があり，この奥壁近くから出土した耳環1点を考慮すれば，棺Aと重複する位置に比較的古い時期の埋葬の棺Cの配置が想定



第24図　概念図（S＝1/100）

された。

また，東側壁に接する場所には，7個の偏平な石を棺Bと同様に床面に2列に配して棺台としていたため，この場所に棺Dを想定した。この棺Dの棺台周辺からは，須恵器・武器等の副葬品や頭蓋骨片が出土している。棺Dと奥壁の間は，かなりの盗掘を受けていたため，出土遺物・棺痕跡等は認められなかったが，最低1体の埋葬は十分に行える長さ2m程の空間部分があるため，この場所に棺Eの設置を想定した。

以上の様に，石室内の追葬状態を棺台や遺物の出土状態から想定すれば，最低5体の被葬者が考えられる。

時期　次に出土遺物の中で最も時間的推移の把握しやすい須恵器の編年観から，本墳の築造から最終埋葬に至る追葬の過程を，前項で分類した有蓋杯をもって考えてみる。

出土した有蓋杯24点のうち第1類とした器種は，第2類と比較して口径・杯身受部立ち上りともやや大きく，また蓋天井部・身低部の未調整が第1類よりも第2類により顕著に認められる。また石室内のこれら第1・2類の出土状況は，第2類が石室奥壁の一括土器の中には認められず，棺A付近から入口にかけて出土しているのに対し，第1類は入口付近からの出土も少しみられたが，奥壁部分からまとまって出土している。第1類の石室奥壁部分の出土状況は，追葬時の二次的移動はあるにせよ，初期の埋葬かあるいは比較的古い時期の埋葬に使用された須恵器と考えられる。これら第1・2類は，須恵器の形態的な変化や石室内の出土状態から，第1類→第2類の推移がたどれよう。

次に第3類とした器種は，石室入口付近の東側壁の抜き取り穴から一括出土したもので，前2類とは形態が全く異なり，陶邑編年(註1)の第二の画期として把握されている器種で，本墳出土遺物の中では最も新しいものである。この最も新しい器種に伴う棺は確認できなかったが，第3類出土土器付近に棺Fを想定すると最低6体の被葬者が考えられる。

以上の様に本墳出土の須恵器は，3分類した形態上の相違が時間的な推移を示しているものと想定され，第1類→第2類→第3類の前後関係としてとらえられよう。これらを陶邑の須恵器の編年に対比すれば，Ⅱ期末からⅢ期の初頭にかけての時期と思われ，6世紀末から7世紀前半または中葉と推定できる。

被葬者　本古墳の所在する児島半島は，現在では周囲の干拓や河川の堆積作用によって本土と陸続きとなって半島状を呈しているが，中世以前には瀬戸内海に浮かぶ大きな島であった。山が海にせまり，平地が少なくて農耕に不適な場所が多いこの児島半島には，古墳時代の製塩遺跡が旧海岸線に数多く認められており，さらにこれらの遺跡の背後の丘陵には，多くの古墳時代後期の横穴式石室墳が知られている。

このような古墳時代の製塩遺跡と古墳との関連ある立地状況を示す好例としては，香川県直島町喜兵衛島遺跡が掲げられる。周囲3km余りの同島の浜には，古墳時代後期を中心に製塩土器が散布しており，発掘調査から製塩炉の検出もなされ，製塩研究の先鞭をつけた著名な遺跡である(註2)。喜兵衛島の小さな島には，さらに後期の古墳が16基も形成されており，製塩遺跡と墳墓との密接な関係を示している。同様な例は，児島半島の倉敷市児島塩生の金浜古墳と海岸に認められる金浜遺跡や，同

福田町の広江浜遺跡と周囲の丘陵の古墳等が知られている(註3)。本墳周辺でも，琴海2号墳や鷲羽山に所在する数基の古墳等が，いずれも海を望む場所に築かれ，周辺の海岸には古下津井遺跡，阿津走出遺跡等の製塩遺跡が知られている。

阿津走出遺跡の背後の丘陵上に築造された本墳は，石室内出土遺物中に製塩遺跡との関連を示すタタキ痕の製塩土器や，二次的に火を受けた土師器が出土していることから，瀬戸内海島嶼部における製塩遺跡と墳墓のあり方を端的に示す好資料となるものである。

註1　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966年
註2　喜兵衛島調査団「謎の師楽式」『歴史評論』72　1956年
　　近藤義郎「師楽式遺跡における塩生産の立証」『歴史学研究』233　歴史学研究会　1958年
　　渡辺則文，近藤義郎「海部と製塩」『古代の日本』4　角川書店　1970年
註3　間壁忠彦，間壁葭子，藤田憲司，小野一臣「広江浜遺跡」「金浜古墳」『倉敷考古館研究集報』第14号　倉敷考古館　1979年

(1) 琴海1号墳 調査前遠景（南から）

(2) 琴海1号墳 調査前石材散在状況（南から）

図版 2

(1) 琴海1号墳 側面から調査前全景（東から）

(2) 琴海1号墳 後方から調査前全景（北から）

(1) 琴海1号墳 墳丘全景（南から）

(2) 琴海1号墳 墳丘全景（北東から）

図版 4

(1) 琴海1号墳 墳 丘 全 景（西から）

(2) 琴海1号墳 墳丘北側周溝（西から）

(1) 琴海1号墳 石 室 内 (南から)

(2) 琴海1号墳 石室入口部分 (北から)

図版 6

(1) 琴海1号墳 天井石・封土土層断面（西から）

(2) 琴海一号墳 石室前面（南から）

(1) 琴海1号墳 天 井 石 (西から)

(2) 琴海1号墳 天 井 石 (北東から)

図版 8

(1) 琴海1号墳 墳丘西側封土断面（北から）

(2) 琴海1号墳 墳丘東側封土断面（北から）

(1) 琴海1号墳 墳丘北側周溝土層断面（西から）

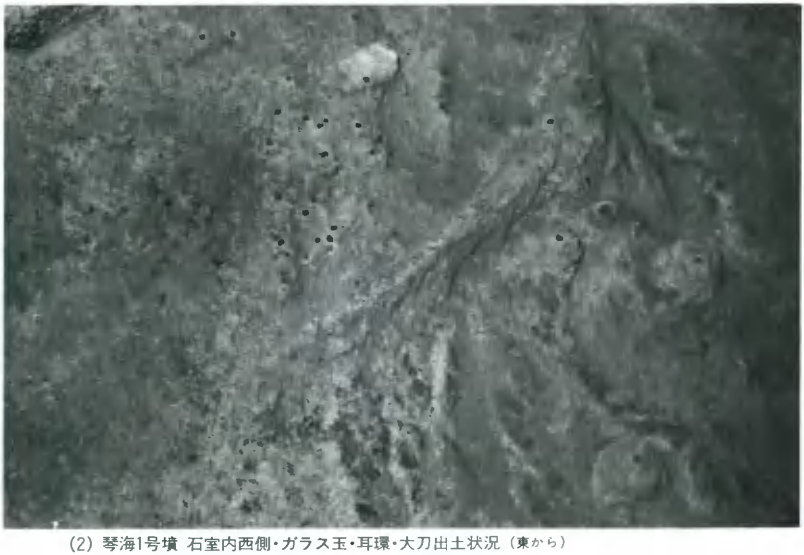
(2) 琴海1号墳 石室奥掘形土層断面（西から）

図版10

(1) 琴海1号墳 石室内遺物出土状況（南から）

(2) 琴海1号墳 石室内入口周辺遺物出土状況（北から）

(1) 琴海1号墳 石室内奥壁部遺物出土状況（南から）



(2) 琴海1号墳 石室内西側・ガラス玉・耳環・大刀出土状況（東から）

図版12

（1）琴海1号墳 石室内東側棺台付近遺物出土状況（南西から）

（2）琴海1号墳 石室内入口付近遺物出土状況（東から）

(1) 琴海1号墳 棺台設置状況（北から）

(2) 琴海一号墳 棺台設置状況（南から）

(1) 琴海一号墳 石室東側壁（南から）

(2) 琴海1号墳 石室東側壁（西から）

(1) 琴海1号墳 石室奥壁北西隅（南東から）

(2) 琴海1号墳 石室奥壁北東隅（南西から）

(1) 琴海1号墳 石室西側壁（南東から）

(2) 琴海1号墳 石室西側壁（東から）

(1) 琴海1号墳 天井石除去後全景（南から）

(2) 琴海一号墳 天井石除去後全景（北から）

(1) 琴海1号墳 石室基底部・掘形全景（北から）

(2) 琴海一号墳 石室基底部全景（南から）

(1) 琴海1号墳 石室基底部（南から）

(2) 琴海1号墳 石室基底部（西から）

(1) 琴海1号墳 石室東側壁裏込め石（東から）

(2) 琴海1号墳 石室西側壁裏込め石（北西から）

(1) 琴海一号墳 掘形全景（南から）

(2) 琴海1号墳 石室解体作業（東から）

琴海1号墳 出土須恵器(1)

16

18

17

19

20

23

22

24

26

28

27

29

琴海1号墳　出土須恵器(2)

30

32

31

34

37

36

38

琴海1号墳 出土須恵器(3)

39

47

41

48

42

49

45

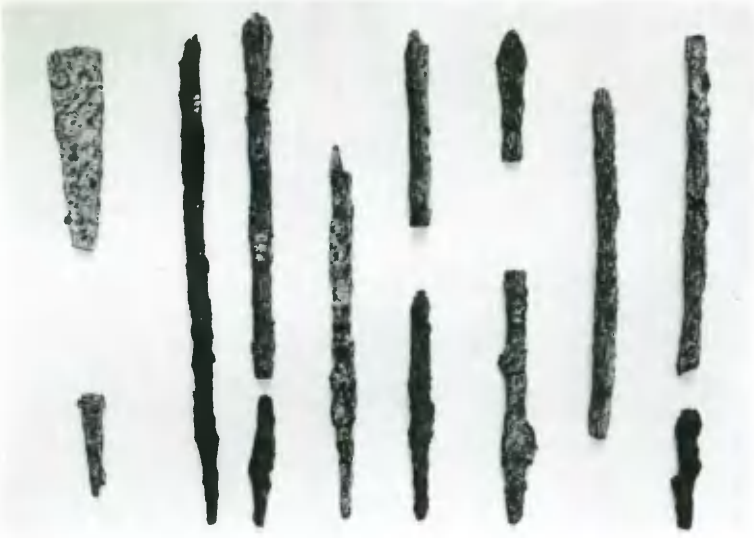
51

52

琴海1号墳 出土土師器

（1）琴海1号墳 出土装身具

（2）琴海1号墳 出土武器



(1) 琴海1号墳 出土武器

(2) 琴海1号墳 出土武器・鉄釘

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　36

本州四国連絡橋陸上ルート
建設に伴う発掘調査

I

昭和55年3月20日 印 刷
昭和55年3月31日 発 行

編集
発行　岡 山 県 教 育 委 員 会

印刷　岡 山 県 出 納 局 用 度 課